

二松学舎大学

歴史文化学科 開設記念展示

黎明期の歴史学

— 東洋史学者 市村瓚次郎資料から —



一松学舎大学 歴史文化学科 開設記念展示

黎明期の歴史学

— 東洋史学者 市村瓚次郎資料から —

黎明期の歴史学 — 東洋史学者 市村瓚次郎資料から —

二松学舎大学文学部教授・大学資料展示室運営委員 町 泉寿郎

昌平坂学問所の濫觴である忍ヶ岡の林家塾が寛文年間に修史事業を契機としてその規模を拡大したこと、また水戸学が『大日本史』編纂事業を淵源とするこ
と等が示すように、江戸期の漢学と史学は深く結びついていた。前近代の伝統的史学が近代化過程でどのような変遷を経て近代史学へと脱皮したかという問題
についてはさまざまな視点がありうるが、今回の展示では、近年本学に収蔵された東洋史学者市村瓚次郎の関係資料を中心に、黎明期の歴史学について主に漢
学との関わりから照射してみたい。

幕府教学の中核を占めた昌平坂学問所は、明治政府に移管され大学へと名称変更の末、明治四年（一八七二）七月に廃止され文部省が設置される。大学は分
局の南校・東校のみが存続し、翌年の「学制」では大学は「高尚ナル諸学ヲ教ル専門科ノ学校」と規定され、南校と東校における学科目（理・化・法・医・数理）
がその専門科となり「文」の学びが高等教育から脱落し断絶する。

明治一〇年（一八七七）四月一二日に創立した東京大学では、法・医・工・文・理の五学部が設置され、法・理・文三学部はひとつのまとまりを形成した。
文学部には当初、哲学科・史学科・政治学理財学科・和漢文学科が置かれたが、史学科は教授適任者の不在を理由にすぐに廃止される。東京大学時代（一八七七
〜八六）、文学部卒業生の約七五%を占めた政治学理財学科が明治一八年（一八八五）に法学部に配置替えとなって文学部は存亡の危機に瀕するが、東京大学か
ら帝国大学への移行期に、文学部に臨時的に設置された古典講習科が国書・漢書の二課・前後二期において本科を上回る卒業生を出し、明治末期〜大正前期ま
での国語漢文の学術教育界に人材を供給した。古典講習科生徒が多く在籍した一八八〇年代、和漢学の教官で史学と縁の深い人物としては川田剛・重野安繹の
ごとき昌平坂学問所出身の漢学者、また栗田寛・内藤耻叟のごとき水戸史学の流れを汲む者があり、近代史学を導入したルートヴィヒ・リースらと共に次代の
歴史学の形成に影響を与えた。

前記の市村瓚次郎は明治二〇年（一八八七）七月に漢書課前期を卒業し、後に東京帝大の東洋史学（はじめ支那史学）講座の教授となった。古典講習科の出
身者では、東京帝大国史科の教授となった萩野由之、東京高等師範学校教授として東洋史学を講じ朝鮮史研究で知られる林泰輔、また文筆家・新聞記者として
知られ『日本宋学史』など思想史に業績を残した西村時彦などが出ており、伝統的な和漢学が新時代の研究に転換した様子の一端を物語る。

東大から帝大への改組（一八八六年）に続き、同二六年（一八九三）には講座制が導入され、同三八年（一九〇五）には文科大学における九学科（哲・国文・
漢・国史・史・博言・英・独・仏）から三学科（哲学・史学・文学）への学科再編が行われる。この時期の学科編成によって哲学・史学・文学からなる人文学
系の基本的枠組みが形成され、また講座の漸次開設によって学問領域の確立が促された。

哲・史・文三学科成立以前の帝大文科大学において東洋史学・西洋史学は未分化で、市村とともに東京帝大の東洋史学講座を主導した白鳥庫吉は史学科（一八八九
〜一九〇四）の卒業生であった。三学科成立以降の東京帝大文科大学では、支那史学科・東洋史学科（一九〇五〜一八）、次いで「史学科（東洋史学専修）」（一九一
〜一八）となって東洋史学講座が独立し、中原地域の政治・文化史を専門とした市村と、欧州東洋学の成果や満州語・突厥語など漢文以外の文献を駆使した塞
外地域の東西交渉史を開拓した白鳥がこれを牽引した。また国史科（一八九三〜一九〇四）を主導した帝大和文学科の卒業生三上参次は、例えば南北朝正閏論
争（一九一一年）の例に見られるような学術性と教学性の矛盾を抱えながら、史料編纂と国史学の確立に足跡を残した。

明治三〇年（一八九七）に創設された京都帝国大学では、日露戦後の同三九年（一九〇六）九月に漸く文科大学が開講し、東京帝大文科大学における哲・史・文の三学科制を反映して、初年に哲学科、翌四〇年（一九〇七）に史学科、翌四一年（一九〇八）に文学科と一学科ずつ開設された。当初から「東洋学研究の重視」の方針があったとされ、新聞記者内藤虎次郎（号湖南）や文学者幸田成行（号露伴）など東京帝大出身士以外からも教官を採用し、人事にも新機軸を打ち出した。史学科では、東洋史学（三講座）の内藤虎次郎、東京高等師範学校から転任した帝大漢学科出身の桑原隲蔵らに加えて、小川琢治の地理学など特色ある人文地理学が形成された。

東北帝大（一九〇七年開設、一九二二年法文学部増設）では、東洋学関係講座を京都帝大出身者が占め、新たに文化史学講座（日本思想史学・日本美術史）が創設された。九州帝大（一九一一年開設、一九二四年法文学部増設）では、東洋学関係講座を東京帝大出身者が占め、従来の国史学・東洋史学などに加えて、新たに政治史・外交史や、植民政策をその内容とする経済学第四講座などが開設された。

外地では、大正一三年（一九二四）五月に京城帝大が創設されて法文学部に法・哲・史・文の四学科が置かれ、京城帝大に近似した講座が開設され、国史学・東洋史学の学者が朝鮮・満洲・渤海の研究に携わった。昭和三年（一九二八）には台北帝大が創設され、最初に文政学部と理農学部の二学部を設置して、南島方面への南進政策推進に資する人文学と物産学が構築された。南洋史を国史学科出身者が担当したことは、京城帝大における朝鮮史の場合と似通う。

歴史学は、日本近代化と歩調を合わせて、国内的には漢学などと共に国体論の形成に奉仕した面があり、対外的には中国大陸・朝鮮・台湾・満洲・西域・南洋など諸地域を研究対象として、従来の漢学が主対象とした古典研究にとどまらず、地政、物産、政治社会制度等に関心を拡大し、国家の政策とも深く関係する研究分野として歩み続けた。

ところで、「東洋史」という名称が「国語」と同じく、大学における学科名に先んじて、中等学校の教科名として始まったことはよく知られている。「東洋史」は東京高等師範学校的那珂通世教授の発議により、日清戦争のさなか明治二八年（一八九五）から従来の本邦歴史・外国歴史に替わって本邦史・東洋史・西洋史として始まる。東洋史の守備範囲は朝鮮半島・インドを含む諸地域に及び、日本との影響関係や各種民族の盛衰等を包摂するものとされ、従来の中国古典を対象とした漢学とは異なる東洋学が興隆する。「国語」「東洋史」の名称が学科名に先んじて教科名として始まることは、研究分野として未成熟な段階で社会の要請に促されて教育現場に提供されたこと、或いは研究と教育が自転車操業的に進化したことを意味するものである。市村の来簡からは、帝大教授たちが文部省検定試験や教科書調査会の委員などの立場から、中等教育における国漢・歴史・倫理などの教科教育にも少なからず関与したことが窺える。

一旦は諸学問領域に解体された漢学が、日露戦後の頃から再び復興の動きを見せ始めることも看過できない。孔子祭典会（一九〇七年）、斯文会（一九一八年）、或いは大東文化学院（一九二三年）などの漢学振興のための諸組織にも、多数の漢学者・東洋学者が関与した。漢学の中から産み落とされて新しい学術研究分野として発展してきたものであることは、黎明期の東洋史・歴史学が持った少なくとも一つの側面であり、黎明期の人々には歴史家という側面だけでなく、儒教道徳の擁護者であり、また漢詩文や文芸の実作者の顔を持つ者も少なくなかったのである。

昨年の中国共産党創立百年に続き、今年には日中国交正常化五十年、また孔子歿後二千五百年の記念すべき年に当たる。世界情勢を反映して、現在の我々の中国や東アジア近隣諸国への関心は上述の歴史学・東洋史学黎明期のそれとは大きく隔っている。過去には反省すべき点も少なくない以上、単に懐古を主張したいわけではないことは言うまでもない。但し、曾て先人たちが持っていた中国・東アジア近隣諸国に対する旺盛な関心をもし仮に我々が失ってしまったているとするならば、それはやはり問題ではないかと思うのである。本学文学部の歴史文化学科開設を記念する記念展示の開催にあたり、中国・東アジア近隣諸国の歴史文化への関心を喚起する一助となることを願って、緒言とする。

はじめに (二松学舎大学文学部教授・大学資料展示室運営委員 町泉寿郎)

目次

I 東京大学古典講習科と市村瓊次郎

- 1 古典講習科漢書課前期卒業記念写真
- 2 市村瓊次郎「(古典講習科卒業謝恩会における) 謝辞」
- 3 古典講習科在学中の市村瓊次郎の詩文稿

II 漢学から東洋史学へ

- 4 小中村義象書簡 (一八八七年〈明治二〇〉一〇月三十一日、市村宛 2)
- 5 三上参次書簡 (一八八八年〈明治二二〉三月三〇日、市村宛 6)
- 6 白鳥庫吉書簡 (一八八九年〈明治二三〉八月一七日、市村宛 13)
- 7 白鳥庫吉書簡 (一八九二年〈明治二五〉一〇月一七日、市村宛 27)
- 8 萩野由之書簡 (一八九四年〈明治二七〉七月二十九日、市村宛 40)
- 9 林泰輔書簡 (一八九四年〈明治二七〉九月二十四日、市村宛 42)
- 10 児島献吉郎書簡 (一八九八年〈明治三二〉九月某日、市村宛 70)
- 11 三上参次書簡 (一九〇二年〈明治三五〉二月二十七日、市村宛 75)
- 12 狩野直喜書簡 (一九〇五年〈明治三八〉四月二十八日、市村宛 92)
- 13 市村瓊次郎書簡 (一九〇五年〈明治三八〉八月二十八日、市村宛 97)
- 14 内藤虎次郎書簡 (一九〇六年〈明治三九〉一月九日、市村宛 98)
- 15 宮崎道三郎書簡 (一九〇七年〈明治四〇〉二月十四日、市村宛 104)
- 16 服部宇之吉書簡 (一九〇八年〈明治四二〉九月一日、市村宛 112)
- 17 坪井九馬三書簡 (一九〇八年〈明治四二〉九月一〇日、市村宛 113)
- 18 菊池謙二郎書簡 (一九一一年〈明治四四〉十一月二〇日、市村宛 145)
- 19 西村時彦書簡 (一九一一年〈明治四四〉十二月二十三日、市村宛 147)

III 教科教育としての東洋史

- 20 桑原隲蔵書簡 (一九一〇年〈明治四三〉一〇月一七日、市村宛 132)
- 21 桑原隲蔵書簡 (一九一七年〈大正六〉九月二〇日、市村宛 202)

IV 再び漢学の振興へ

- 27 田中義成書簡 (一九一二年〈明治四四〉七月二〇日、市村宛 139)
- 26 坪井九馬三書簡 (一九一二年〈明治四四〉三月一六日、市村宛 138)
- 25 井上通泰書簡 (一九一一年〈明治四四〉三月一四日、市村宛 137)
- 24 岡田良平書簡 (一九一一年〈明治四四〉二月一九日、市村宛 135)
- 23 桑原隲蔵書簡 (一九一四年〈大正三〉一〇月五日、市村宛 165)
- 22 桑原隲蔵書簡 (一九一四年〈大正三〉七月九日、市村宛 161)

V 市村瓊次郎草稿類

- 31 西村時彦書簡 (一九一八年〈大正七〉三月六日、市村宛 206)
- 30 宇野哲人書簡 (一九一一年〈明治四四〉十一月三日、市村宛 144)
- 29 瀧川龜太郎書簡 (一九〇七年〈明治四〇〉二月一四日、市村宛 101)
- 28 嘉納治五郎書簡 (一九〇九年〈明治四二〉二月八日、市村宛 122)
- 32 市村瓊次郎「奉天の文書典籍に就きて」
- 33 市村瓊次郎「風葬に就いて(附) 林葬」
- 34 市村瓊次郎「雲南二爨碑考」
- 35 市村瓊次郎「(詩稿)」(大正末期〜昭和初期)

VI 詩文実作者としての中国学者たち

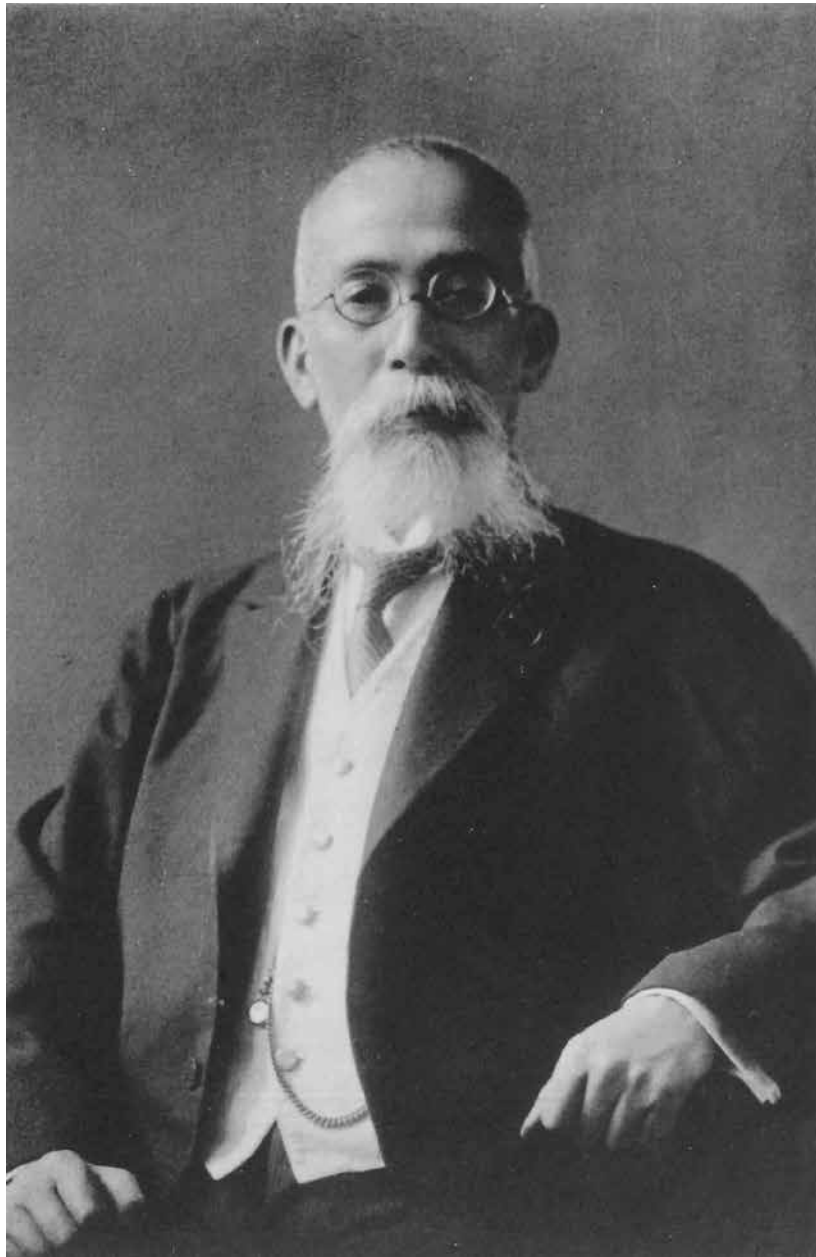
- 36 漢学者・漢詩人揮毫屏風(八曲一双)
- 阪本蘋園・前田慧雲・細田劍堂・岡田劍西・渡貫香雲・上夢香
- 上村亮剣・服部擔風
- 落合東郭・高野竹隱・近藤物庵・土屋鳳洲・諸橋止軒・岡崎春石
- 市村器堂・内田遠湖

VII 資料翻印

凡例

- 一 本書に使用する漢字の用字は、常用漢字体など通行の字体を基本とした。
- 一 人物の呼称は姓名を基本としたが、姓号で表記した場合もある。
- 一 本書は、二松学舎大学資料展示室の企画展「歴史文化学科 開設記念展示 黎明期の歴史学―東洋史学者 市村瓊次郎資料から―」(期間2022/3/14~5/14)の展示図録を兼ねるものである。

I | 東京大学古典講習科と市村瓚次郎



(『市村博士古稀記念東洋史論叢』〈富山房、1933〉口絵より)

市村瓚次郎 (字は奎卿、別号器堂・筑波山人・月波散人)

1864年9月9日(元治元.8.9)に常陸国筑波郡北条町(現つくば市北部)に出生。上京して東京大学文学部古典講習科漢書課前期に学び、1887(明治20)7月9日に同課を首席卒業。学習院の教授を経て、1898年(明治31)より東京帝国大学文科大学助教授、1905年(明治38)に教授昇任、1907(明治40)に文学博士を授与され、1925年(大正14)3月に62歳で定年退官するまで27年に亘って東京帝国大学に東洋史学を講じた。また漢学者としても知られ、漢詩・訳詩を創作し、漢文教育にも関与した。皇室からの信頼が厚く、明治天皇皇女への漢籍講義、宮中講書始での進講(1925年)、明仁親王(現上皇)降誕時の読書鳴弦の儀などを行っている。1947年(昭和22)2月23日、84歳で歿した。著書に『支那史』1888~1892年刊、『東洋史要』1897年刊、『支那論集』1916年刊、『文教論集』1917年刊、『孟子講話』1936年刊、『東洋史研究』1939年刊、『東洋史統』1939~1943年刊等がある。



1 | 古典講習科漢書課前期卒業記念写真(1887年〈明治20〉7月9日)

古典講習科は国書課・漢書課二課が前後二期募集され、下記の計88人の卒業生を出した。展示品は市村瓚次郎ら漢書課前期生の卒業記念写真であるが、極度な写真嫌いのために首席卒業の市村の姿はここになく、この日卒業した25人中、市村を除く24人が写っている。

教官は、前列右から川田剛、重野安繹、南摩綱紀、加藤弘之、小中村清矩、三島毅、大沢清臣。二列目右から渡邊弘基(総長)、中村正直、島田重礼、外山正一。

*参考：古典講習科卒業生名簿

国書課前期生(29人)：松本愛重、小中村義象、関根正直、萩野由之、戸沢盛定、辻清次郎、井上政次郎、東宮鉄磨、佐藤定介、江上正彦、雨宮于信、今井彦三郎、三浦純雄、橋本光秋、伊藤肇、飯田元彦、石田道三郎、豊田伴、若松釜三郎、小串隆、高木六郎、亀山玄明、鈴木重尚、反町銚之介、伊藤平章、奥平清規、内山直枝、山田巽、西村金平。

漢書課前期生(28人)：市村瓚次郎、林泰輔、松平良郎、岡田正之、岡田文平、花輪時之輔、熊田鉄次郎、田野泰助、今井恒郎、名取弘三、須藤求馬、瀧川亀太郎、末永允、安原富次、堀捨次郎、宮川熊三郎、安本健吉、深井鑑一郎、福島操、池上幸次郎、渡辺恕之允、橋本好蔵、萱間保蔵、日置政太郎、福田重政、鈴木栄次郎、松本胤恭、与野山熊男。

国書課後期生(15人)：岩本正方、西田敬止、平岡好文、赤堀又次郎、黒川福蔵、鹿島則泰、宮島善文、和田英松、星野忠直、井上甲子次郎、大久保初男、生田目経徳、須永球、佐佐木信綱、大沢小源太。

漢書課後期生(16人)：竹添治三郎、島田鈞一、山田準、児島献吉郎、長尾楨太郎、黒木安雄、平井頼吉、竹中信以、北原文治、藤沢碩一郎、斎藤坦蔵、菅沼貞風、大作延寿、桜井成明、関藤十郎、牧瀬三弥。
(以上卒業成績順に掲出)

之覽の後は
送る候へ

新編
加藤弘之
渡辺洪基

謝辞
 明治二十年 月卒業謝恩会
 席上の役生を代表し
 不肖 齋 古典科漢書課を卒業す 市村 次郎
 今日未臨の栄を辱くせむ徳を蒙り下は總理閣下
 及び新旧両校長諸先生に向つて一言の謝辞を本
 マ併せて時勢の希望を陳せんと欲す
 抑古典科の漢書課
 五年お初め明治十六年より実に旧總理閣下
 の設立に係りしものあり既に我々を生み出しし
 は旧總理閣下なりといはれり其の功ありし故
 るに昨年の初めより再び旧總理閣下は我々を全

2 | 市村瓚次郎「(古典講習科卒業謝恩会における) 謝辞」(1887年〈明治20〉7月9日)

1887年(明治20)7月9日に举行された帝国大学卒業式において、文科大学の卒業生は哲学科学生3名のみであり(在生も計12人)、古典講習科漢書課の卒業生は25人を数えた(渡辺洪基総長式辞による)。学士学位を授与されない古典科卒業生の胸中は必ずしも喜びに満ちたものではなかったはずである。式典後、古典科卒業生たちは麹町区富士見町の富士見軒を会場に教官や父兄を招待して謝恩会を催し、その席上、市村は卒業生を代表して謝辞を述べた。展示品2はその原稿である(後年自ら転写したものか)。冒頭、市村は加藤弘之前総長の転任によって古典科生徒は親に離れるような絶望を味わったが、渡辺洪基新総長によって新しい親を得たと謝意を表し、世間の風潮に流されて自ら漢学を無用視すべきではないこと、東洋学には塞外史や東西交渉史など未開拓分野があること、洋学一辺倒の時世にあつて中国の歴史文学を修めることは世界のためであることを述べている。

結得首婆奴

壯者其與人談也音吐吐快、口角津々飛沫、今茲十月、將飯隱其鄉、招余告由、余也於先生情如父子、思如師、於其飯、豈可無一言乎、聞若井之鄉在刀川之岸、出門則白帆往來者、歷々可見矣、乃謂先生曰、既平矣、民既寧矣、刀川之水潔且清矣、先生其可以濯其纓矣。

市村瓚拜編

大正

雲帆翁亦一偉士、余讀此篇、始知之、憾不接也。

丙戌十月念八日 南摩綱紀

結得首婆奴

有焉坐則彼富貴、采蓮未足以喜而貧賤困厄亦未足以悲、况矣、概滑替以致富貴者、又何足羨焉、宜矣、先生所樂不在彼而在此也、今茲十月、先生有故、將飯其鄉、余也於先生情如父子、思如師、矣、豈可無一言之贈乎、聞若井之鄉在刀川之岸、波光翻色、可坐而觀、外、謂先生曰、既平矣、民既寧矣、刀川之水潔且清矣、先生其可以濯其纓矣。

大正

甲戌十二月二十日 皇村禮安評

更和習
前聯宋詞雅
巧不若後聯
自然

理在道存語果
而與是同故無
味

觀梅雜詩錄一

一水流來有斷橋、更無人處見仙標、似雲時或為風散、非雪未曾回、晚消百代知、心松落落、一生佳、配竹蕭々、從來音亦性相近、不愛繁華愛寂寥。

讀莊子

君看人間事、紛紛日不窮、有非茲有是、無異則無同、理在言論外、道存瓦壁中、此言如不信、請問漆園翁。

市村瓚再拜

三月一日

兄多才技、畫巧、故立自然、見是白壁、微瑕

大正

中州老人教得讀

譽矣、可謂不能動乎、而今乃曰我為我、何邪、先生即非我也、我知我為我矣、余歸獲而不寐、臥而思之、明日又見曰、先生所謂我為我、我知之矣、夫彼其時權也、因其宜義也、榮辱必以明也、毀譽必以察也、惟以量之、義以剛之、依乎明、立乎慎、此四者不從時而異也、不固宜而變也、不為毀譽榮辱而移也、是先生所以我為我也、邪、先生曰、善哉、我知我為我、我知我為我、他人有心、我付度之、尔之謂也、蓋余為記

乃成

評似穀忽而竟實、正確、覆解、慶見左國語法

新志 二百五頁 歐荷澤再拜

大正

3 古典講習科在学中の市村瓚次郎の詩文稿

古典講習科を含む1880年代の東京大学法学部・文学部の授業では、月例の課題が定められて作詩文が課されていた。展示品は、1885～1887年（明治18～20）に市村が提出した課題の詩文に対して教官たちが朱筆で識語を加えたもの。右上・左上は「送雲帆間中先生」（1886年〈明治19〉10～12月）に対する島田重礼（篁村）と南摩綱紀（羽峰）の評、右下は1885年（明治18）4月課題として作成した「我為我堂記」に対する重野安繹（成斎）の評、左下は1887年（明治20）3月の詩稿に対する三島毅（中洲）による評である。なお、間中雲帆（1818～1893）は下総猿島郡岩井村出身の勤王家・漢詩人で、維新後は諸県の属官となったが志を得ず、1877年（明治10）に東京千駄木に隠居し後に帰郷した。郷里に近い市村は間中を慕い交流があった。

全篇佳余輩及所不非也余全小書其少平雅古錄志り故中問推上疎脱し趣し分
客在り多事真乃不文行何んか報致り用キント余回ク子試二層宋又家別作ノ尺文極多身
色尾多し此二亦多事多純道快流り致して代り再書
ノ成り并言返りし吾春也か
市村時彦即
伏乞

大正
洋三大篇墳之屑二叙は有興味況一篇保平語
次非空中様漢比作家苦心ヲ想也
岳之改竄漫點崑山之玉多光々孔恰但親
作者胸臆也耳
七月十七夜隆下亭外延壽の兒

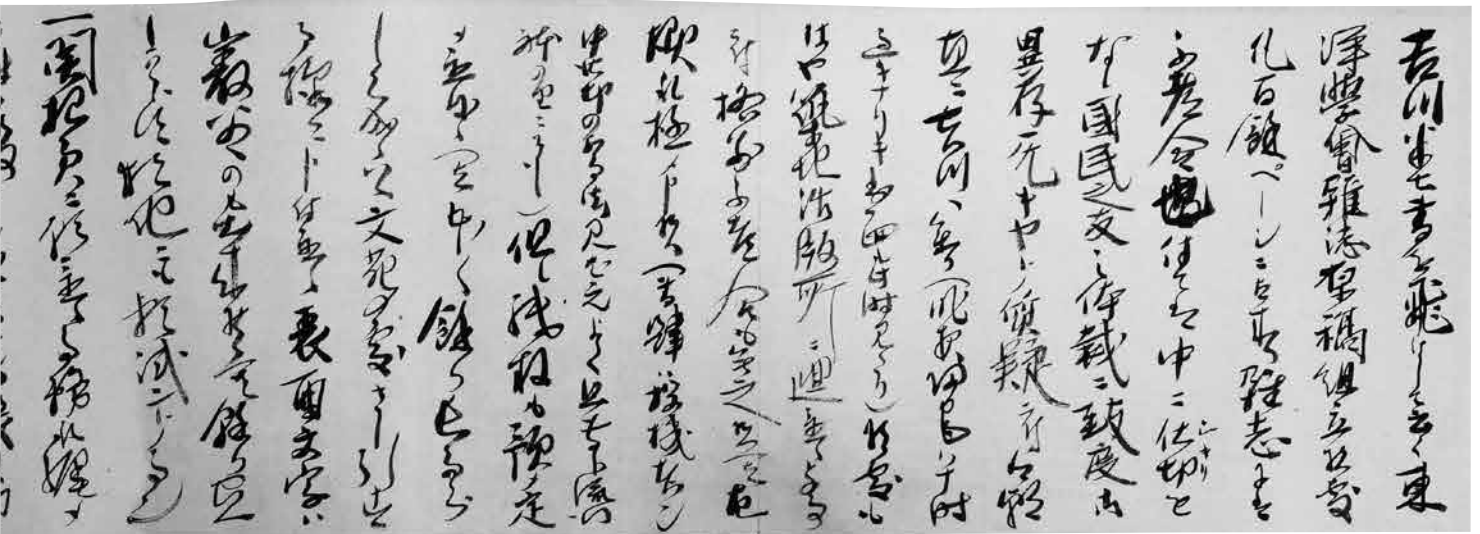
一往還書
勤而不怠能辨地氣嗚呼高人之德遠矣哉予信朋
之日是可以為友矣
丙戌五月
五月十日
市村續拜稿
只就親月相思工回環牽神情登低向目既
野文盡牙
丙戌五月中夜
西園正借評
佐士佐夜至母氏於女氏設玉席人文多其快
昔乃曲折極極在是有力
五月十日
林直養再檢多批

明海成子
厚友瀧川行
人好尚不同以其重指之
同作之有不克意者慢加增
世行忌嫌
意定王之言之其吾國在行不
龍太郎又稿

支那小史序
大矣哉支那之揚子江也森々漫々涯涘函渚之
間不辨人馬氣船通焉艘艦泛焉龍蛟龍鼉
生焉然而導其源則遙々千里在崑崙山下星
海矣今夫在之稱文明者必先屈指歐洲何也入
其市則石殿玉樓列矣出其野則鐵路電線通矣
望其海則大艦巨舶泛矣登其學則課程備而師
範勉矣觀其車則連連麗麗而士卒和矣整坐者我
知其政治煥然者我知其文學彩然燦然者我知
其工藝枝術嗚呼稱之稱之為文明亦詢有故也

市村の古典講習科在学中の詩文稿には、前記の教官による識語のほかに、より多くの同級生たちによる識語が残されており、生徒同士が切磋琢磨したさまを伝えている。なかでも西村時彦と瀧川亀太郎による批評が多い。右上は1886年（明治19）5月に西村時彦の祖母に寄せた「前田孀人八十寿序」に対する岡田文平・岡田正之・林直養（泰輔）の評。左上は1885年（明治18）7月の「喜界島行（訳平語）」に対する大作延寿（蘭城）の評。右下・左下は、市村と瀧川亀太郎の共著『支那史』の初稿かと思しい『支那小史』に寄せる市村の自序（1888年〈明治21〉4月）に対する瀧川の評。なお市村の自序は刊本『支那史』には収められておらず、市村の中国史学の出発点を知る上で意味がある。市村は欧州各国において国史編纂に次いで文明の源流として希臘羅馬史に及ぶことを踏まえて、日本においても国史に次いで中国・朝鮮史が必要であると説く。

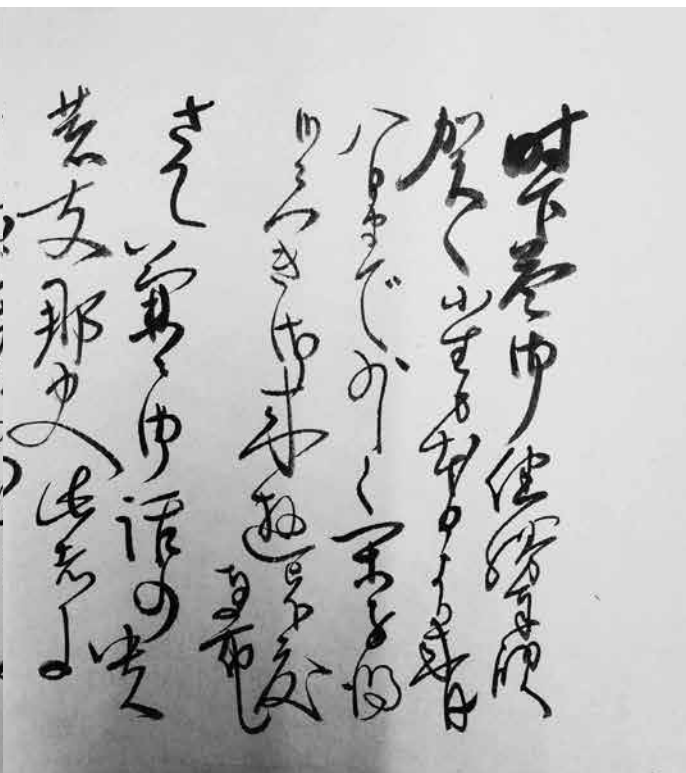
II | 漢学から東洋史学へ

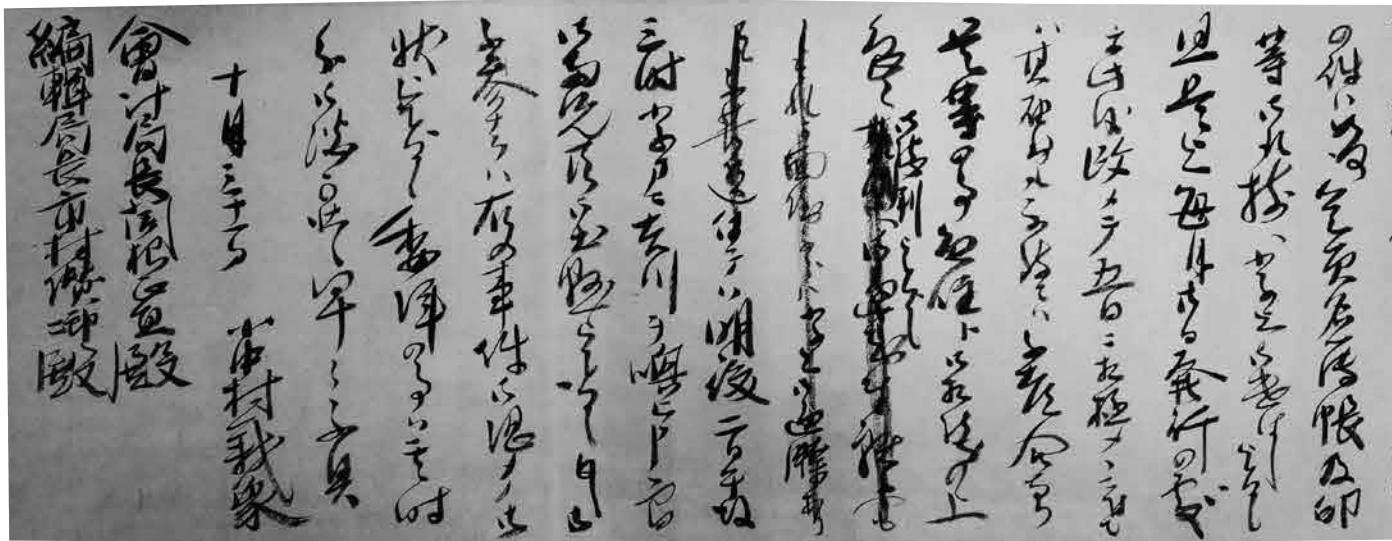


▲ 4 | 小中村義象書簡 (1887年〈明治20〉10月31日、市村宛2)

1886年(明治19)に発布された帝国大学令により、学術技藝のうち国家にとって何が須要であるかが取捨選択された。和漢学に求められるものは制度史や学史(文学史・哲学史)であり、漢作文は不要となり、教官もこれにともなって免職者と残留者が選別された。帝大改組にともなう激変に危機感を強めた古典講習科生徒たちは教官と共に同年5月に東洋学会を発足し、同年12月から月刊誌『東洋学会雑誌』を発刊して、彼らの存在を主張する場を求めた。展示品4は、小中村が会計担当関根正直と編集局長市村瓊次郎に宛てた同誌の編集刊行に関する書簡。同誌は5年間にわたり計42号刊行され、1888年(明治21)3月の2巻5号からは理学・史学・文学の三分野に分けて論説を掲載しており、文学部における哲学・史学・文学の三学科制が固定される以前の人文学系分類の例として注目される。

*小中村義象(1861～1923、本姓池部)は古典講習科国書課前期に学び、小中村清矩教授の養子となり、短歌や日本古典研究で知られる。

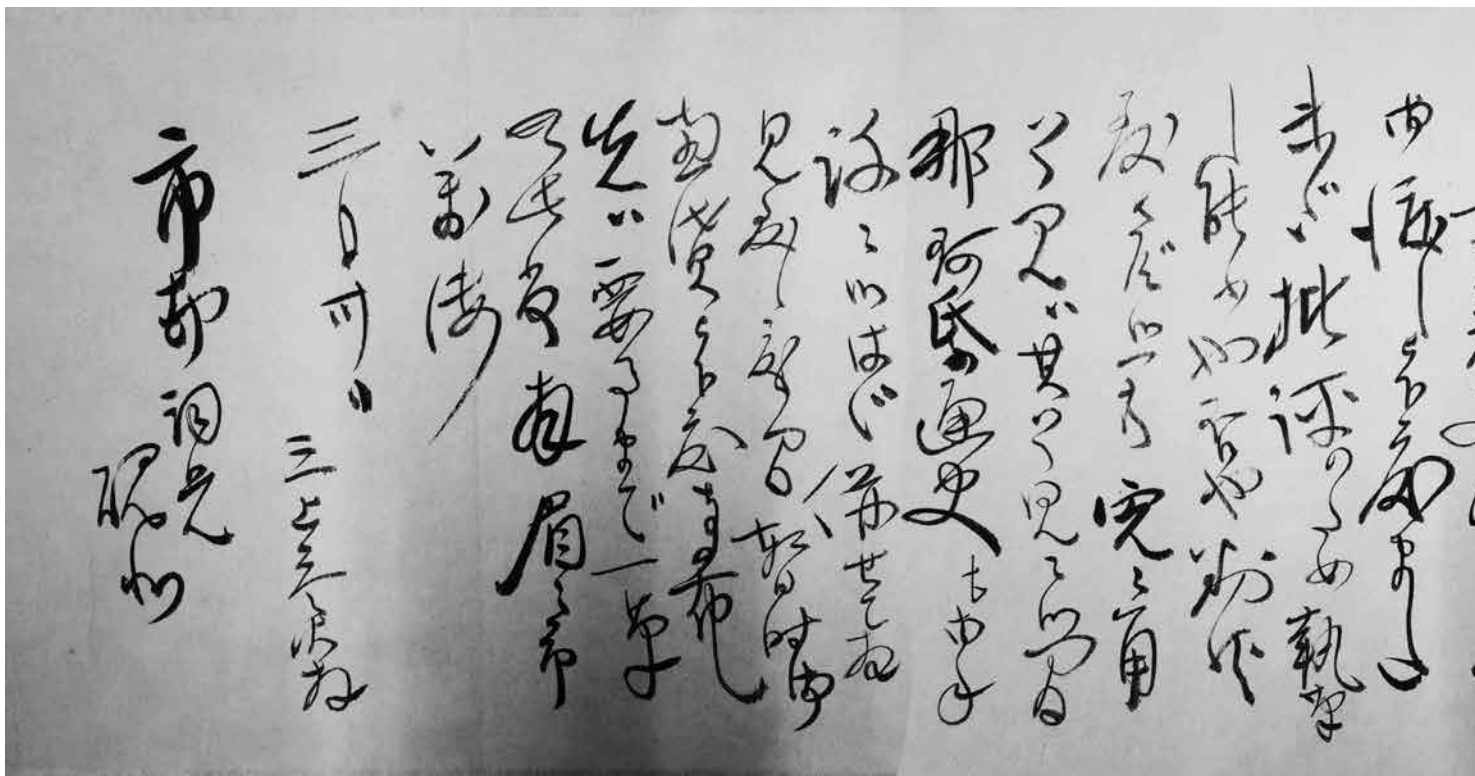


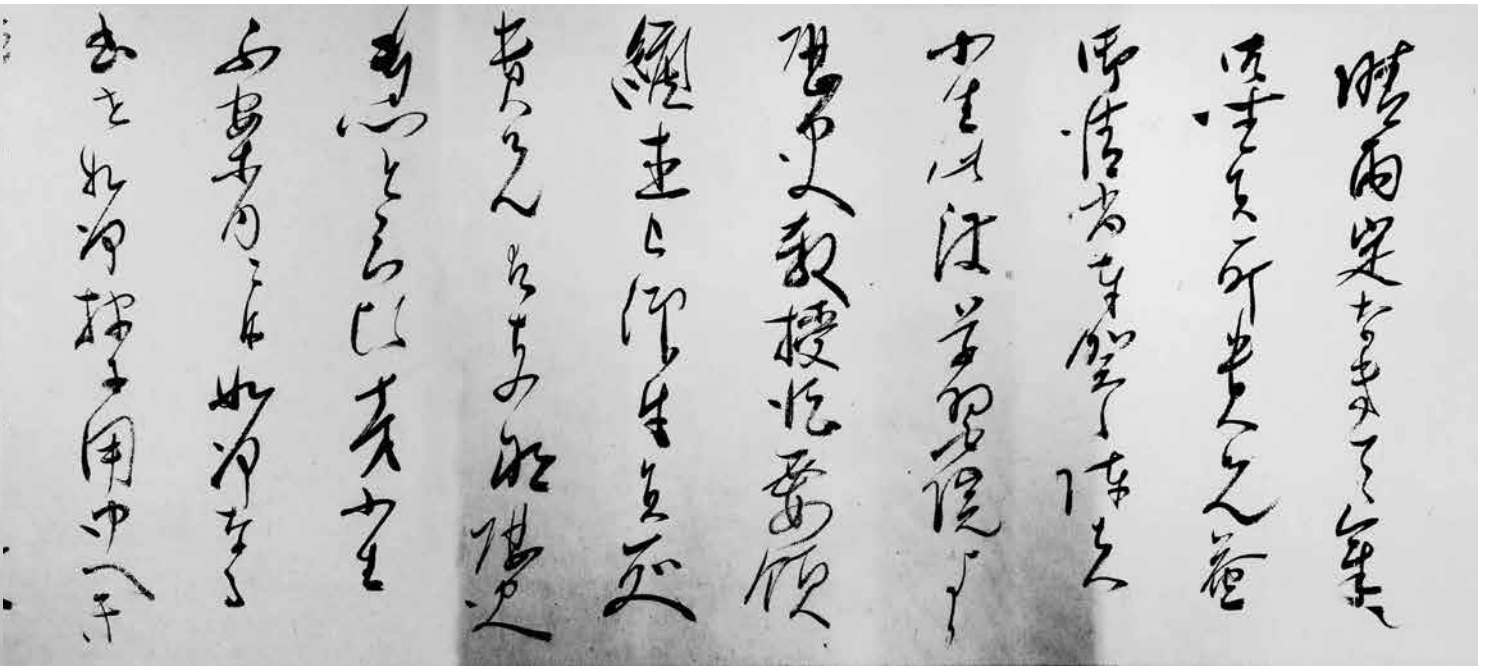


▼ 5 | 三上参次書簡 (1888年〈明治21〉3月30日、市村宛6)

市村瓊次郎は古典講習科卒業後、1887年（明治20）12月から翌年12月まで司法省属僚となり、次いで学習院備となった。市村は古典科同級生の瀧川亀太郎（1865～1946）との共著による処女作『支那史』に在学中に着手し、1889年（明治22）11月にその巻1・2を刊行する。同書は中国史の教科書として編纂されたものであり、自序に「社会の現象を網羅」することに勉めたと述べており、彼らの新分野開拓の意図と意気込みが窺える。瀧川は今日から見て歴史学者というより漢学者の印象が強い人物であるが、『東洋学会雑誌』に「支那史料」を連載するなど、本来、史学に関心が深かった。展示品5は、帝大在学中の三上参次が市村から『支那史』原稿について批評を請われた際の書簡である。三上は批評できるかどうか、当時刊行中であった那珂通世『支那通史』（1888～90刊）も併せて送付してくれるならば、それと引き比べて検討してみると回答している。

* 三上参次（1865～1939、1889帝大文科大学和文学科卒）は国史学者。

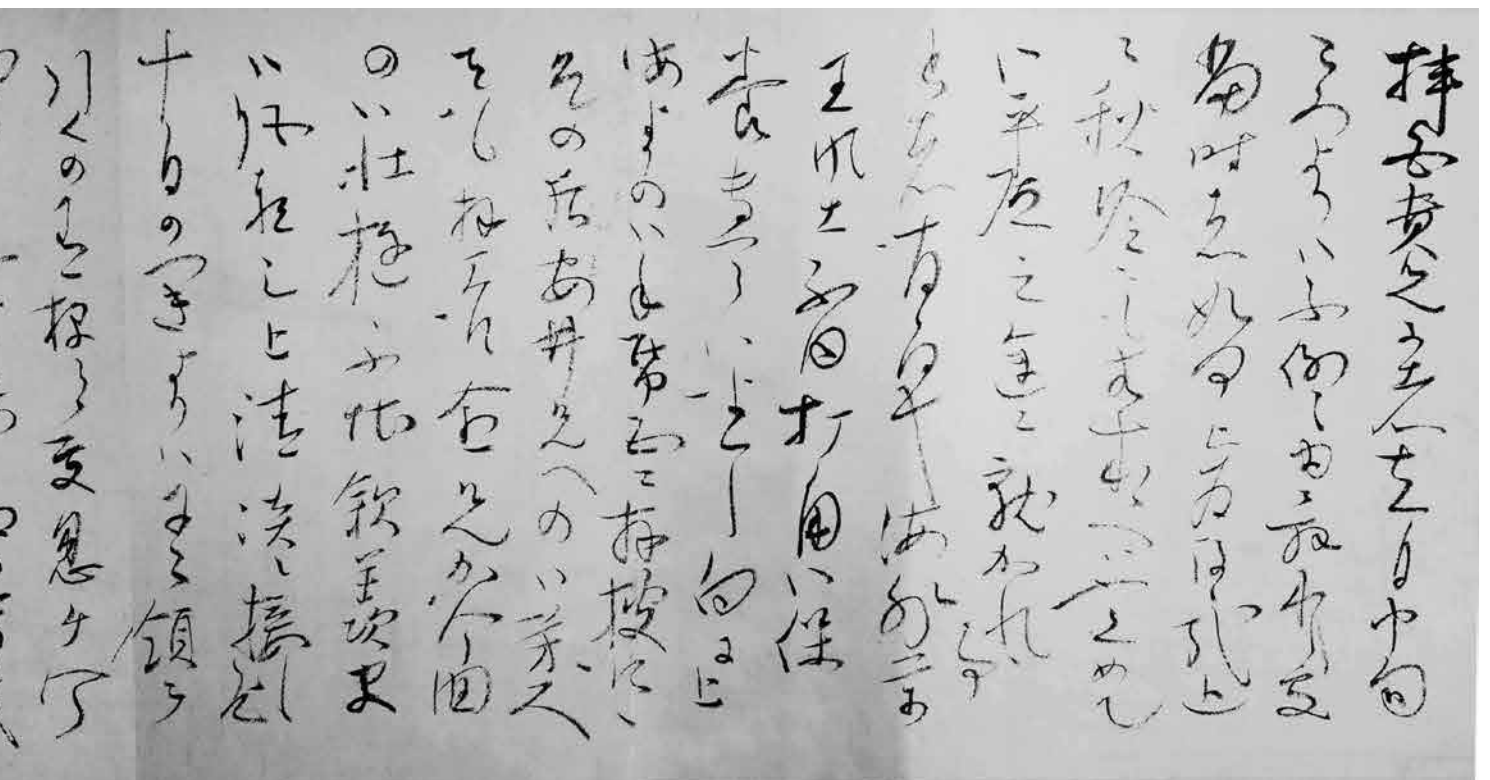


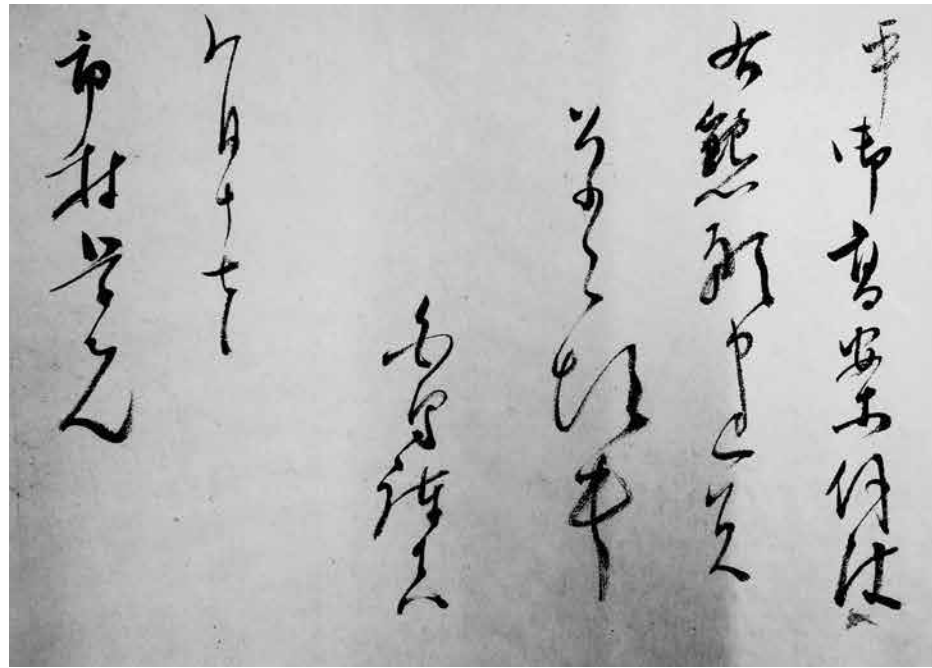


▲6 白鳥庫吉書簡 (1889年〈明治22〉8月17日、市村宛13)

ベルリン大学でランケ (Leopold von Ranke) に学んだルートヴィヒ・リース (1861～1928、Ludwig Riess) が来日して帝大文科大学に史学を講じたのは1887年 (明治20) のことである。これ以前、東京大学時代に史学科は教授適任者の不在を理由に廃止されたまま推移し、1890年 (明治23) に史学科を卒業した白鳥庫吉は帝大在学中、リースから最も影響を受けたとされる。展示品6は、帝大在学中の白鳥が学習院から「歴史教授法要領」の執筆を依頼されたため、学習院備として既に支那史と漢文を教えていた市村に、参照すべき参考書について問い合わせた書簡である。近代学問の第一世代に通有の難しさと間違さがここにも見出せる。

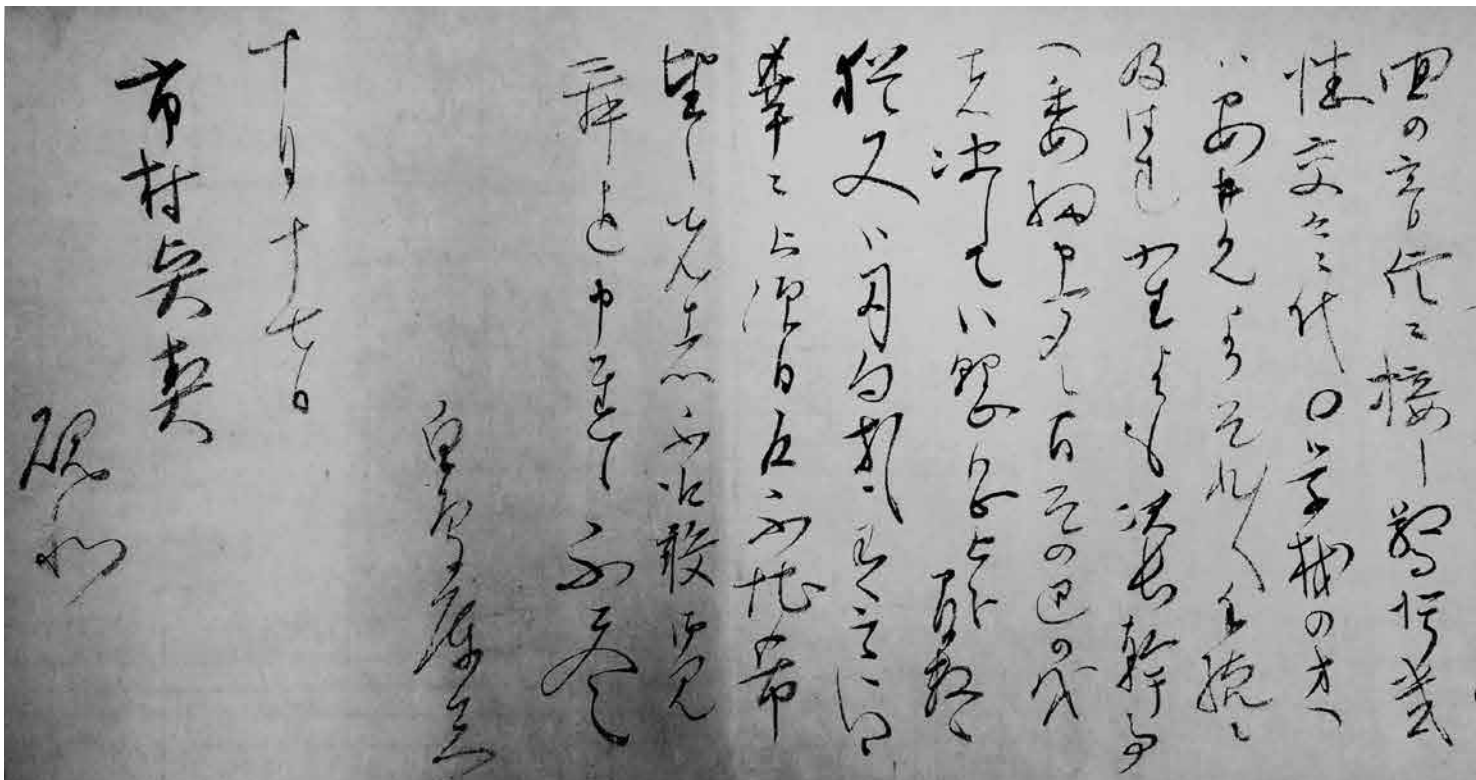
*白鳥庫吉 (1865～1942、1890 帝大文科大学史学科卒) は上総出身の東洋史学者。主に中原地域の歴史を講じた市村瓚次郎に対して、白鳥は塞外地域における東西交渉史を中心に新しい研究分野を開拓した。

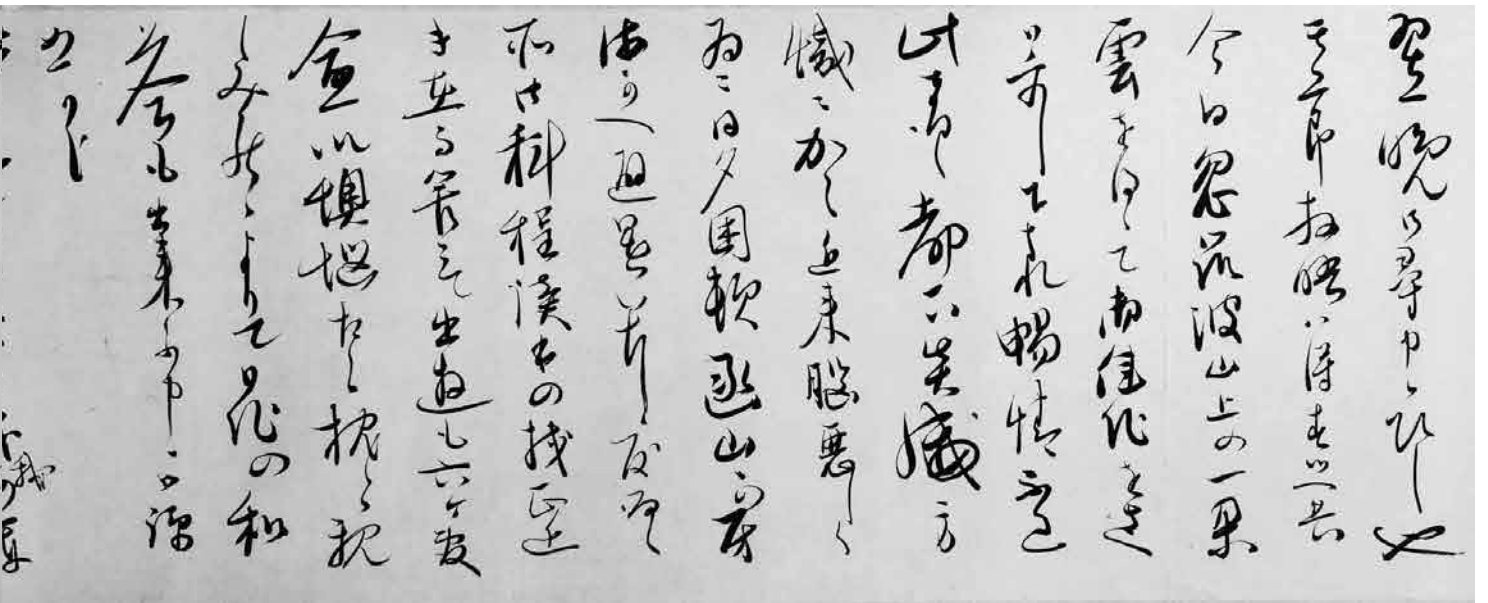




▼ 7 | 白鳥庫吉書簡 (1892年〈明治25〉10月17日、市村宛27)

明治以降の史学に見出だせる新しさの一つは、研究者が対象とする地域に自ら赴いて史料調査をするようになったことであろう。市村瓊次郎は1892年（明治25）7月に学習院教授に昇任し、同月から史蹟踏査のために初めて清国に渡航した。上海から長江流域、武昌・漢口を経て、北は芝罘・天津を経て9月に北京に到る大旅行であり、溽暑中に馬車などの交通手段しかない行程は消耗甚だしく、北京に到着した市村は風土病のために病臥した。帰国予定を延期せざるを得なくなった市村が学習院の同僚をはじめとする知友に書簡で事情を知らせたため、その返書が残されている。展示品7は白鳥庫吉からの返書で、東洋史学者にとっても清国踏査はまだ羨望に堪えない「壮遊」であったことが分かる。学習院への帰国遅延に伴う諸手続は古典講習科の先輩にあたる安井小太郎が当たったことも知られる。

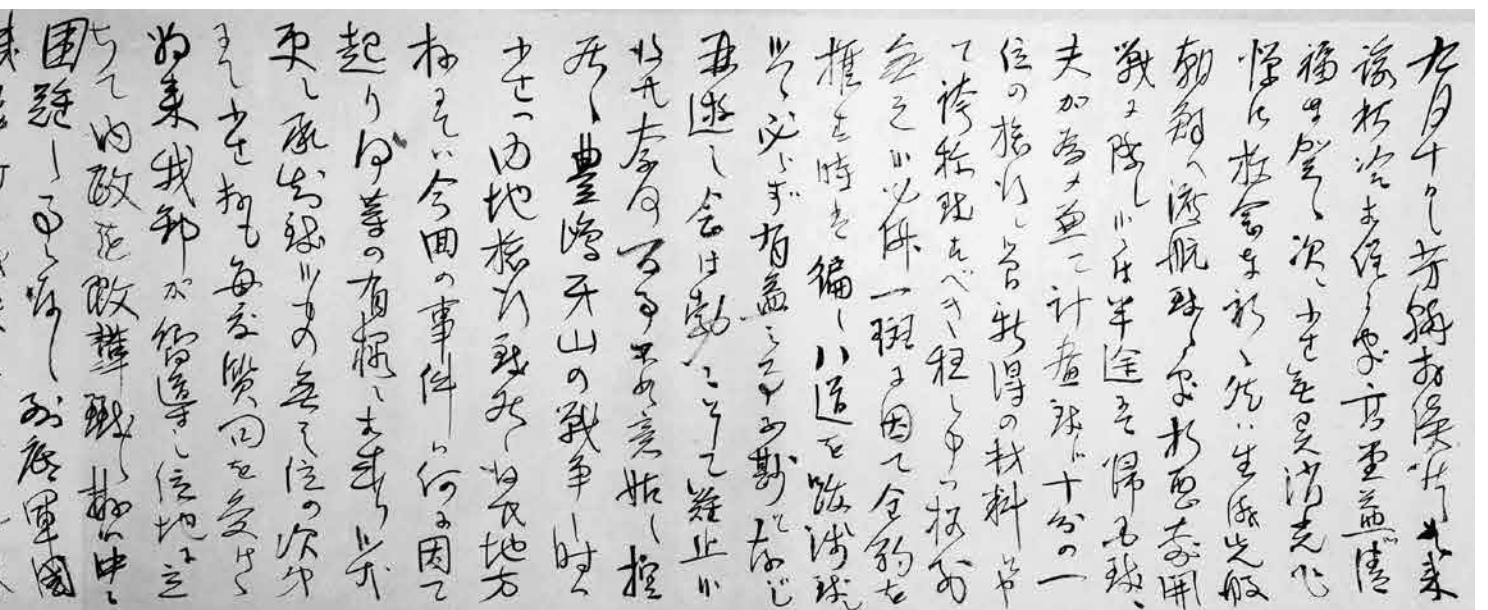


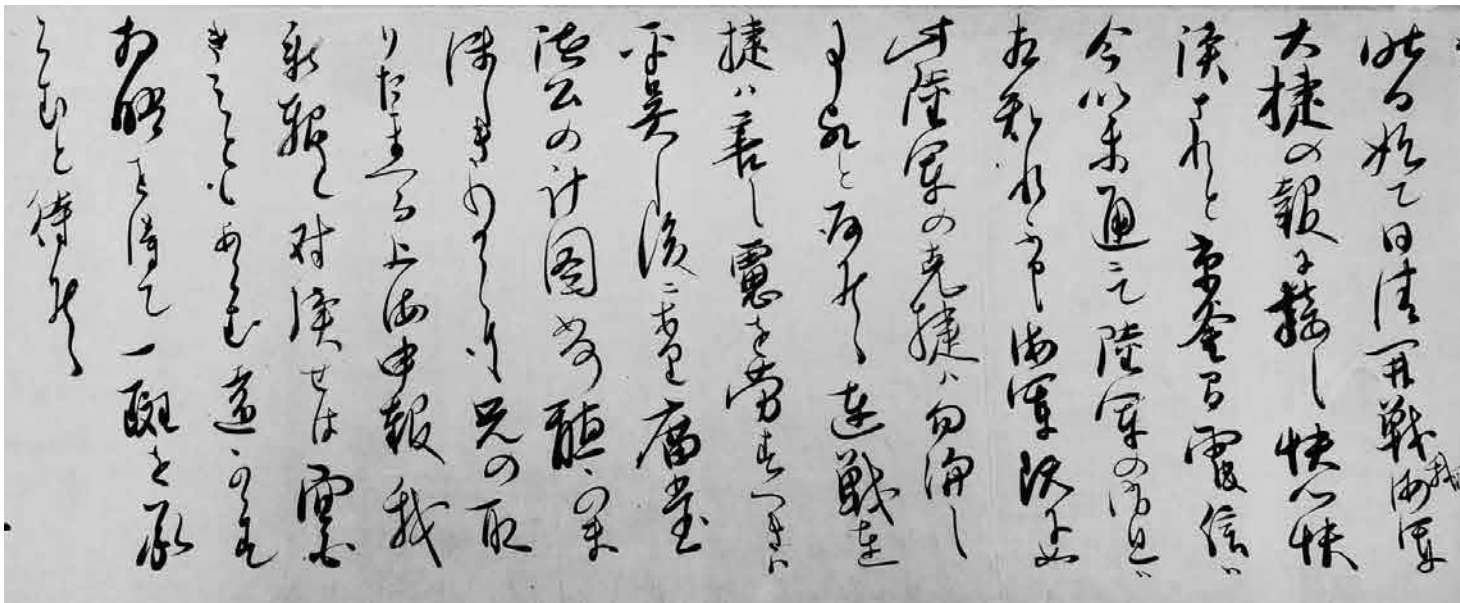


▲ 8 | 萩野由之書簡 (1894年〈明治27〉7月29日、市村宛40)

開国後の日本にとって台湾と朝鮮半島は地政学上、特別な地域であり続けた。朝鮮半島における東学党の乱に対する日清両国の派兵を発端とする日清戦争は1894年（明治27）7月に始まった。展示品8は、開戦早々の海軍戦勝の知らせに萩野由之が松井簡治宅で大村西崖らと祝杯を挙げ、征韓談を論じあったことを伝える書簡。追伸には号外を知らせる声がかえるとあり、戦争突入時の高揚した空気感が伝わる。夏季休暇中の市村はこの時帰郷して不在であったため、萩野は市村が購読している上海の『申報』とわが国の『時事新報』を対照して読めば面白いであろう、市村の見解を聞きたいので遠からず面会したいと伝えている。

* 萩野由之（1860～1924、号和庵）は佐渡出身の国史学者。東大古典講習科国書課前期に学び、学習院教授を経て東京帝大教授となり、市村瓚次郎と似通った経歴をたどった。

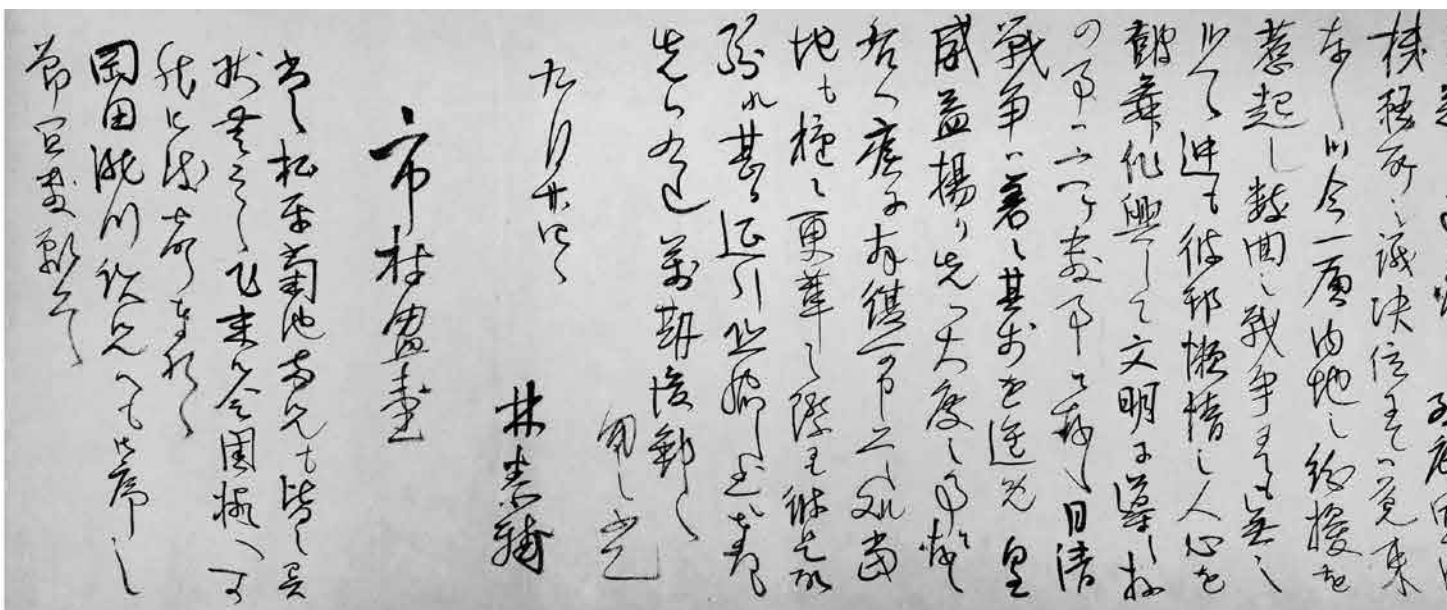




▼9 林泰輔書簡 (1894年〈明治27〉9月24日、市村宛2)

林泰輔は山口高等中学校助教授時代に処女出版『朝鮮史』(1892刊)を刊行し、同書は日本統治時代の朝鮮の歴史教科書にも一定の影響を与えた。林は1894年(明治27)7月7日に資料調査のために初めて朝鮮に渡航したが、日清開戦によって短期間の調査で帰国を余儀なくされた。展示品9は林が帰国後に朝鮮調査について市村に報じた書簡で、踏査した地方都市では日清開戦の事情に無知な者が多く、日本が朝鮮を教導して内政改革を進めることは容易ではないとして、更なる武力行使を肯定するような趣旨も見出させる。

* 林泰輔(1854~1922)は下総出身の東洋史学者・漢学者。東大古典講習科における市村瓚次郎の同級生で、卒業成績は市村に次いだ。早くから朝鮮史研究に従事し、山口高等中学助教授を経て、帝大助教授となるも間もなく辞し、東京高師教授として東洋史を講じた。また新発見の甲骨文研究にいち早く従事して中国古代史研究を開拓し、白鳥庫吉の中国古代史に関する見解に異を唱えた。



其兄ノ大業ニ於てん定し其執燭
 為大生後ハ既ニ烟ニマカレテ
 里中ノ(コレハ失教) 彷彿セ
 ハラシト云 何卒吾等ノ為ニ
 ナラズ年ヲ奪得ア之交希
 知ニテ 己ハ亦希友ノ通
 信ニ其書ノ大意ニ於てん 都々全
 至極宜敷決シテ 林ノ執燭ヲ
 讀ルコトハ心ヲ安キ言 又在臣等
 會程後ハ 廣利ニ決セテ 尚進セシ
 トノ文言アリ之、前者ノ言ニ對シテ
 通信ノ通ニ其書ハ 氏後去ノ言ニ
 對シテハ 陰ニ鞭ヲ死者ニ加フルノ
 親ヲ之ニ決シテ 固安ノ取カ不
 字々ニ 吊言ヲ表シテ、
 当地を左軒し又書物ナシ若し
 一年以上ノ落ニ 雖ニコレハ合ク
 井底ノ 魁ト化シ去ンベシト 尚ハト
 時ニ 浩歎ヲ傳シテ 在ノニ有
 白書ナリト雖、言ハ其ニセウ 且深
 哀ニ云、
 九月十三夜訪向山對月
 言懐

▼ 11 | 三上参次書簡 (1902年〈明治35〉2月27日、市村宛75)

市村の古典講習科における同級生岡田正之は、初め陸軍、次いで学習院を本務とし、傍ら東京帝大の講師・助教授を兼務した。展示品 11 からは、この時期、市村と三上参次らが岡田を陸軍から東京帝大の専任に移籍するよう運動したが、成就しなかったことが分かる。今日、漢文学・日本漢文学史で知られる岡田だが、卒業論文『支那文字史』や陸軍幼年学校から刊行された『支那歴史』等の著書から、その中国古典学・中国史への造詣が知られる。また、岡田に期待されている役割が大学本科の科目としての「東洋史」と併せて、大学内に附設された臨時教員養成所における「支那史」の担当者であったことが知られ、東洋史教科に対する需要の高まりが感じられる。なお、臨時教員養成所は1902年4月入学—1904年3月卒業、1904年4月入学—1906年3月卒業の2回のみで廃止となった。

* 岡田正之 (1864 ~ 1927、号剣西) は富山県出身の漢学者。帝大古典講習科漢書課前期卒業。著書『近江奈良朝の漢文学』(1929刊)、『日本漢文学史』(1929刊) ほか。

市村先生
 三上参次
 岡田正之
 漢書課
 支那文字史
 支那歴史
 東洋史
 臨時教員養成所

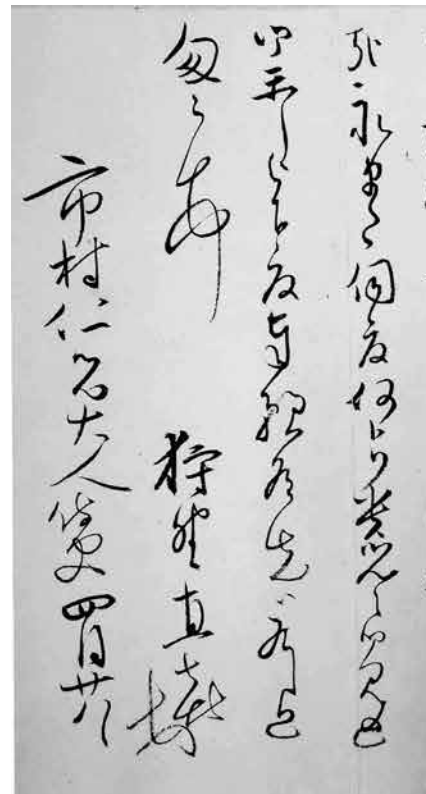
拜啟 憲術法福恭賀其の極多相々
 役調査存に於て或人も需むるものと
 おもふれども難計就ては日未済く漢
 井氏を推舉故存に備付すは
 二此置るに一回は延請するに上りや
 不の事定むるに此收の事知れぬ
 外に唯此の身は存に事知れぬ
 中々尋に調査存に清国現今の制
 度なるに於て其一部則例令典の例
 迄存に上流なるを推擧すは漢ある人も
 都に存に支那制の専門の漢学を
 對しての身は存に其の為人の
 ともおもふれども其の又と少くとも
 殊に存に一水も推擧するに上りや
 困りたるに存に他一と延請すは
 一報酬の事存に其の延請すは

▲ 12 | 狩野直喜書簡 (1905年〈明治38〉4月28日、市村宛92)

1897年(明治30)の京都帝大創設から日露戦争を挟んで1906年(明治39)に文科大学が開校するまでの間、清国留学から帰国した狩野直喜は、岡松参太郎・織田萬ら京都帝大法科教授が委員となり京都帝大内に設置された臨時台湾旧慣制度調査会に所属して、『清国行政法』の編纂事業に従事した。展示品12は、『清国行政法』編纂に必要な人員採用に際し、狩野が市村の推薦した人物について市村に照会する内容。狩野は市村の推薦した浅井虎夫(1877～1928、1902東京帝大漢学科卒)に関して、台湾旧慣制度調査会における調査内容が同時代中国の制度調査であり、通常の古典中国語とは異なる制度史文献や各種公文書を読解する能力が必要であるから、これらを読み慣れた人物かどうか照会している。植民地経営という現実的要請が中国研究の内容を変容させていったことが感じ取れる内容である。

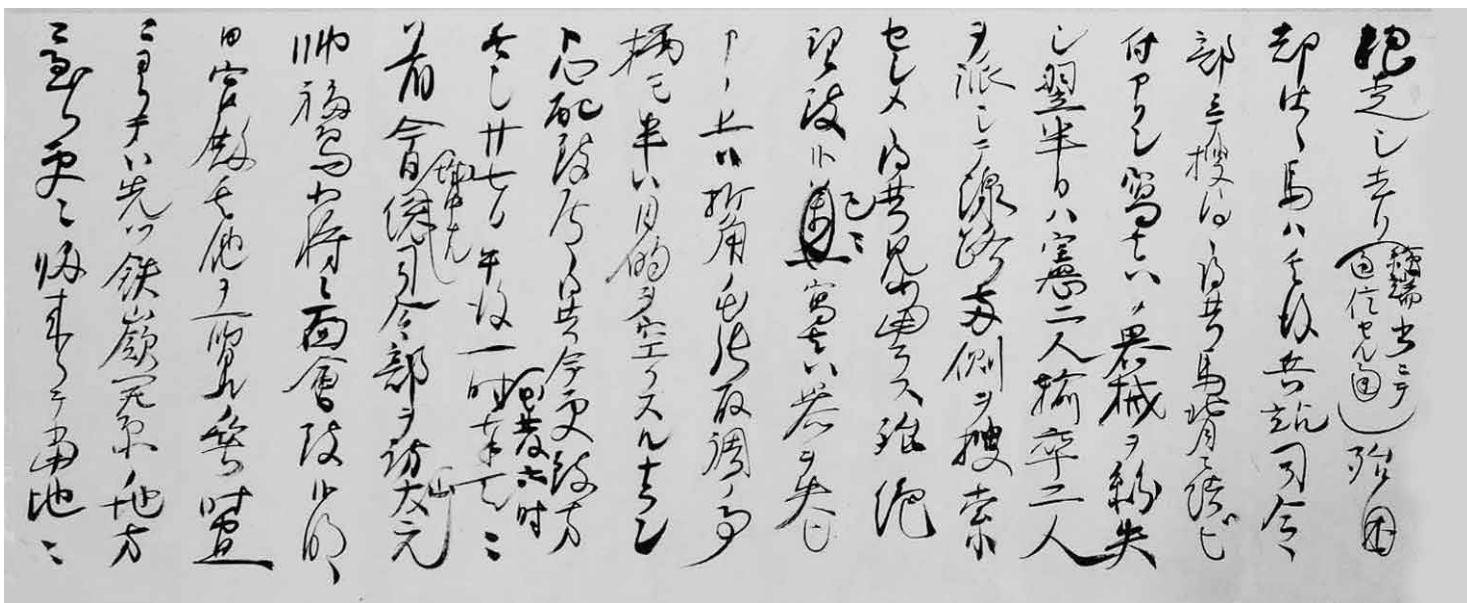
* 狩野直喜(1867～1947、1895帝大文科大学漢学科卒)は熊本出身の中国文学者。清朝考証学と欧州東洋学の影響のもと新しい中国学を開拓し、京都帝大で多くの後継者を育てた。

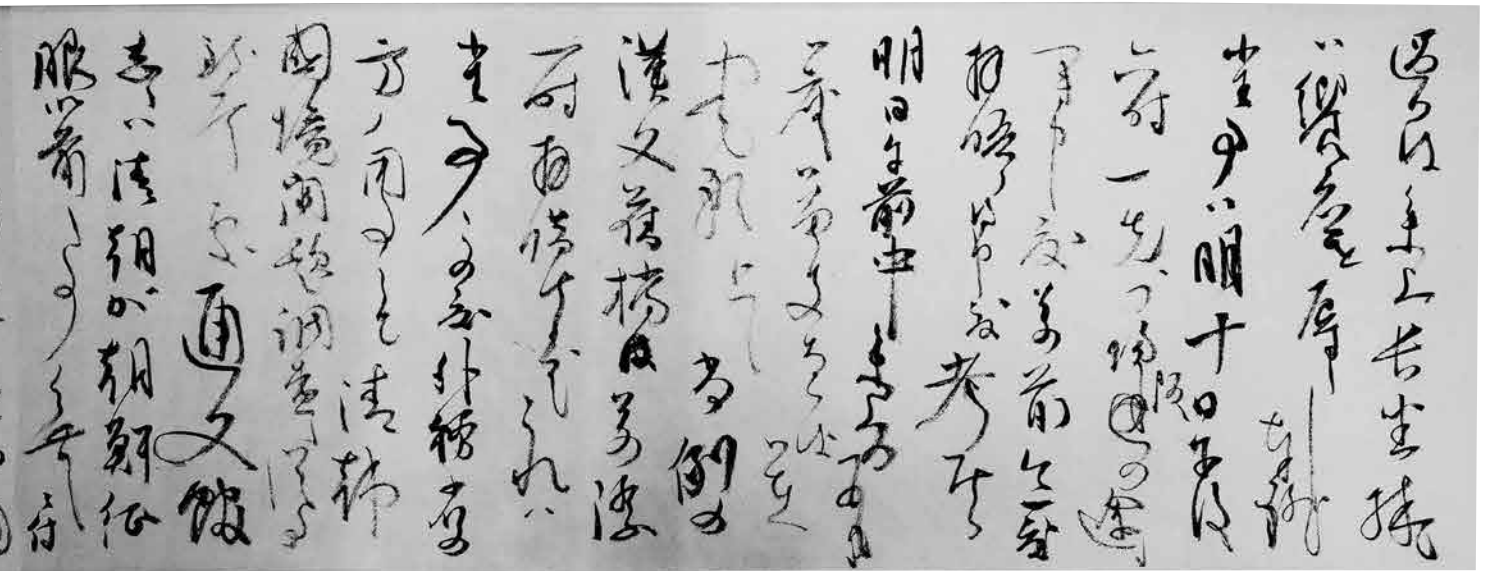
拜啟 市村君に大臣有聖と旅
 順に北平三台港と旅か其難冠
 山三劫山松柳山安孝山橋子山
 二の三の地安金山と一覽海小
 陸西砲台と秘完全に伏
 杏ん橋子山安孝山三其堅
 牢壯大矣、狩野君、其統
 冠二劫山松柳山安孝山三其堅
 杏ん橋子山安孝山三其堅
 元伏と存せざる其伏を五根
 其像を其の所とて我軍隊
 此ノ堅牢を犯其破り元即
 候るに、其伏を其の所とて
 三其地にせし其旅順港ノ全形
 其一月ノ下を其山上、其砲
 其砲台を其山腹に其砲台の
 元其今其砲台を其砲台の
 人其地上に其出せる其砲台



▼ 13 | 市村瓚次郎書簡 (1905年〈明治38〉8月28日、市村宛97)

1905年(明治38)9月5日の講和条約締結による日露戦争の終結を待たず、同年7月に市村は奉天の文溯閣四庫全書の調査と、明清時代の朝鮮関係資料の採訪を目的とする満洲出張に出かけている。展示品13は市村が留守宅に宛てて各地巡歴の状況を報じた書簡で、大連(8/18)、旅順(8/19~21)、遼陽(8/23)、東京城(8/24)、首山堡(8/25)、奉天(8/27)の逐日の旅程が記され、特に激戦の跡が残る旅順の見聞が多く記されている。この時、市村は写真機を携行しており(但しその写真機を8/25に紛失)、また移動手段も鉄道が多くなっていて、1892年(明治25)の清国初訪時と比べて実地踏査の方法にも新しい変化が見いだせる。

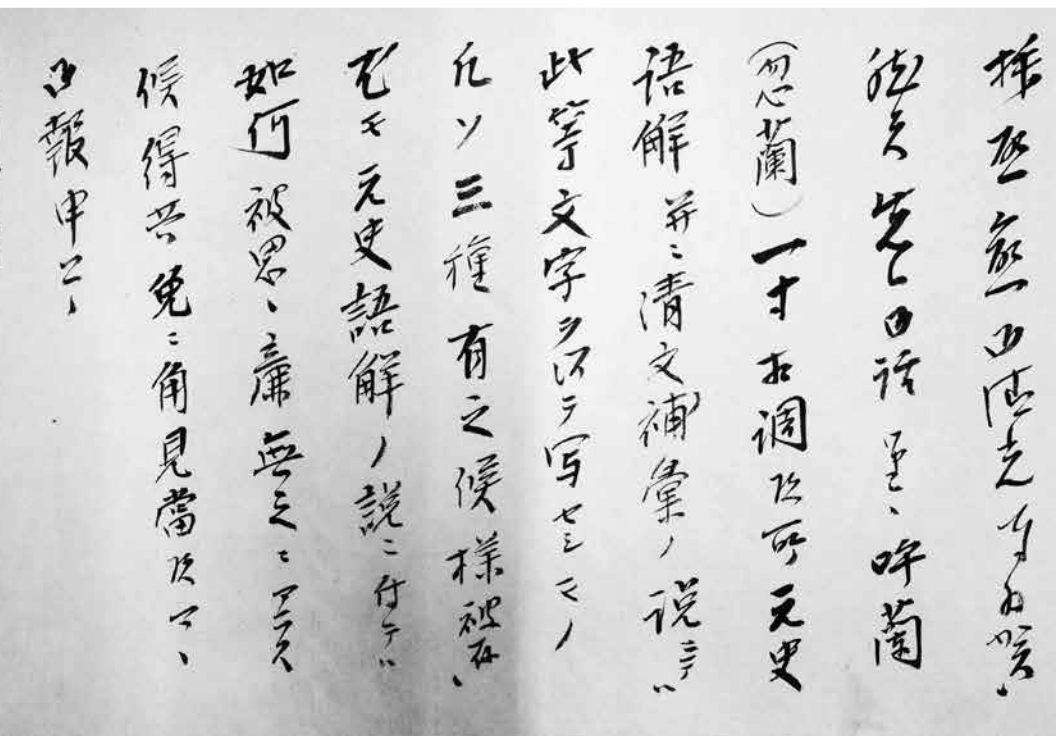


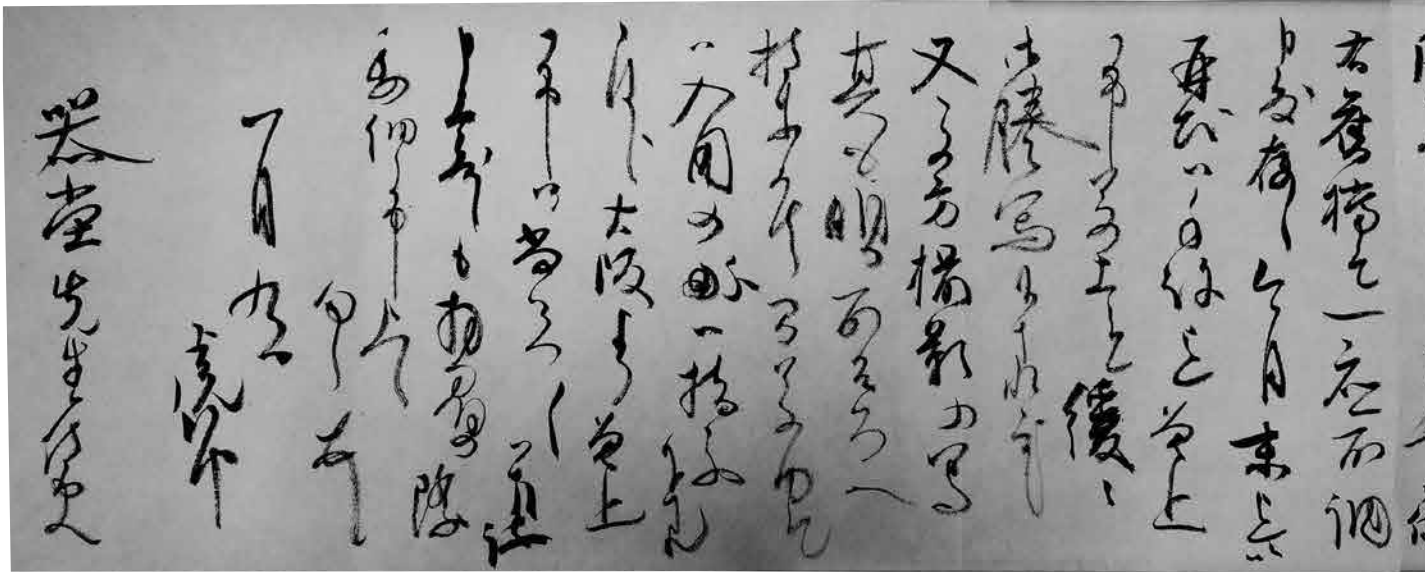


▲ 14 | 内藤虎次郎書簡 (1906年〈明治39〉1月9日、市村宛98)

内藤虎次郎が京都帝大文科大学史学科の東洋史学第一講座の担当者として着任するのは1907年（明治40）のことであり、**展示品 14**はそれ以前の大阪朝日新聞社論説記者時代のもの。この時の内藤の市村訪問の目的は、前年に市村が奉天調査によって収集した朝鮮に関する清朝の漢文旧档（漢文体古記録）を調査閲覧するためであったと考えられる。市村が奉天調査に出かけた前年7月、内藤もまた外務省から委嘱されて満洲に渡り、占領地行政調査、清国朝鮮国境問題調査に従事し、奉天崇謨閣の『満文老档』発見などの成果があった。京都帝大に奉職した内藤は、その後1910年（明治43）に狩野直喜・小川琢治・富岡謙蔵・濱田耕作と共に北京調査を行い、1912年（明治45）に富岡・羽田亨と共に奉天調査を行い、これらの学術調査は京都帝大における支那学形成の一契機となった。新聞記者出身の内藤は現代中国の動向に精通しており、それが新しい中国史研究の重要な背景をなした。

*内藤虎次郎（1866～1934、号湖南）は秋田出身の新聞記者・東洋史学者。

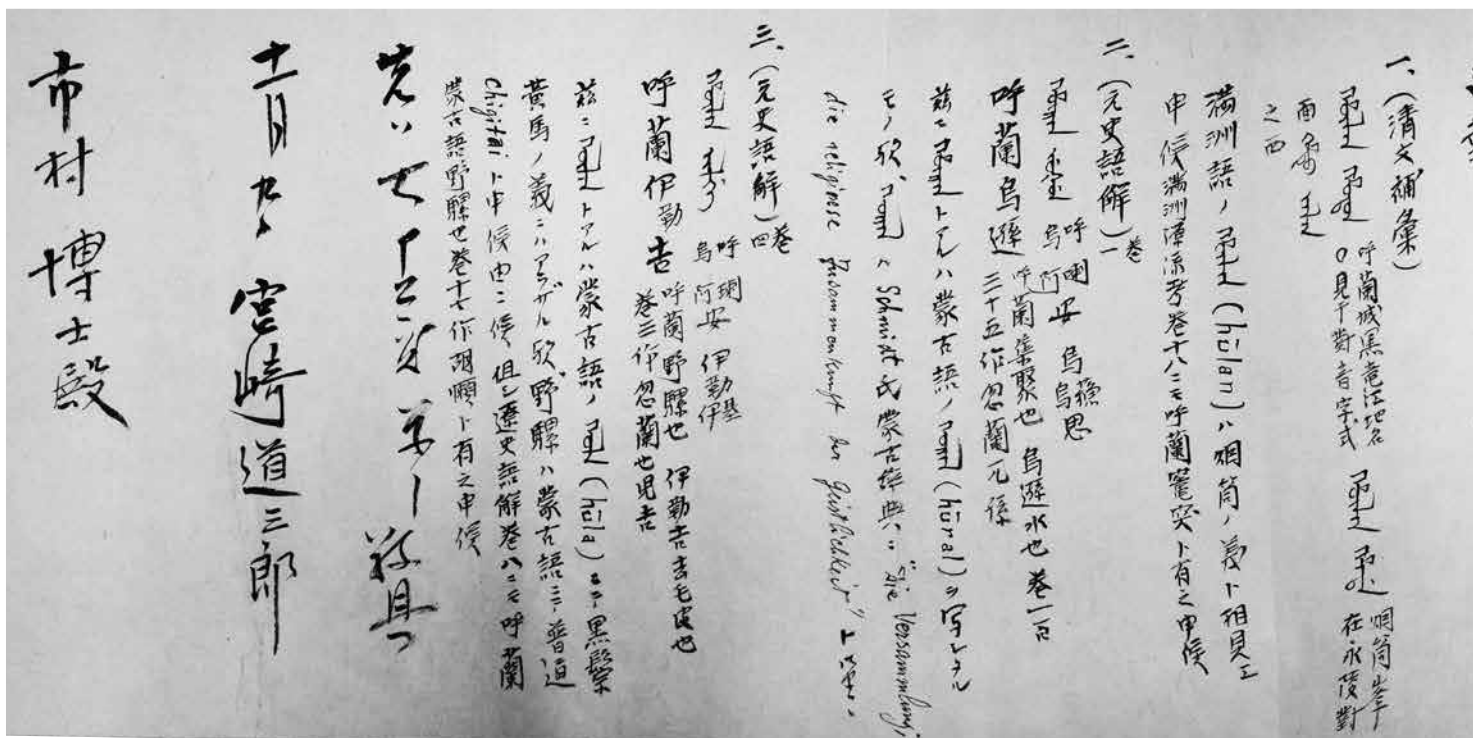


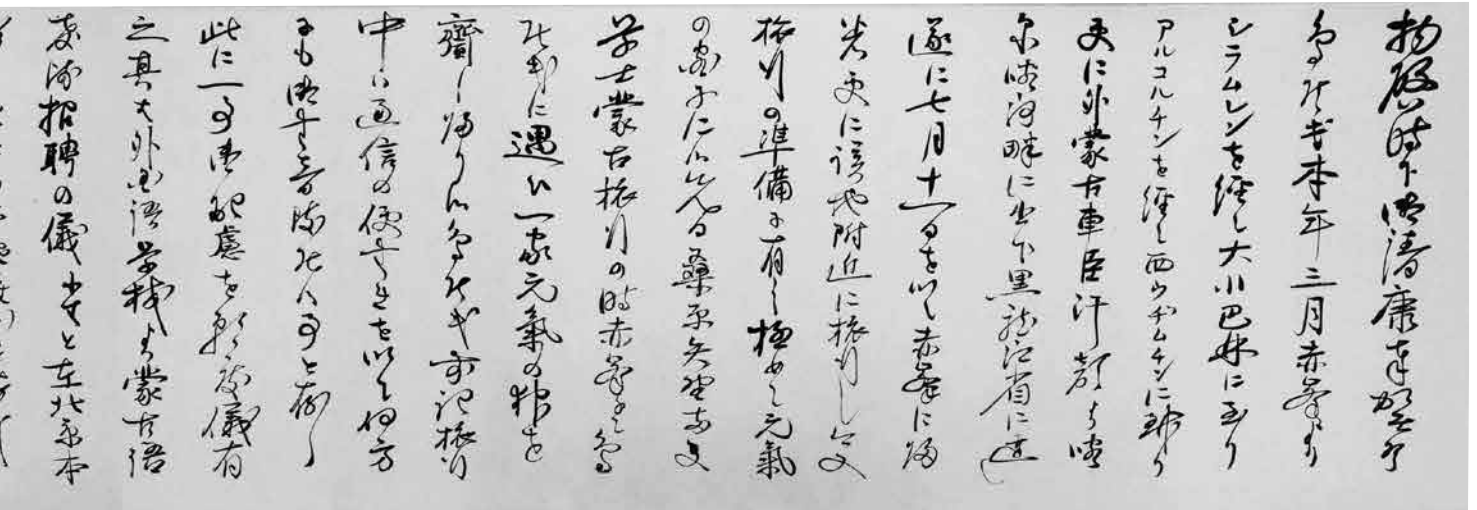


▼ 15 | 宮崎道三郎書簡 (1907年〈明治40〉2月14日、市村宛104)

市村は内藤虎次郎とほぼ同時期の1905年(明治38)8月に奉天調査を行い、文溯閣四庫全書のみならず漢文・満文の旧档をも実地検分したらしいが、恐らく満州語の理解力を欠いたため内藤に比べて満州語資料に関する成果をあげることは少なかったように見える。展示品15は、市村からの満州語「呼蘭(忽蘭)」に関する質問への回答で、宮崎は『元史語解』『清文補彙』の用例を挙げて答えており、比較法制史を講じた宮崎が諸言語に通じたことを窺わせる。各国各時代の法律制度を対象とする法制史学は、東京大学時代の文学部における国学系の日本法制史と共に、近代史学形成に一定の役割を果たした。

*宮崎道三郎(1855~1928)は伊勢国出身の法学者。東大法学部を卒業後(1880)、法学部助教授となり(1881)、ドイツ留学を経て帝大法科大学教授となる(1888)。日本法制史・比較法制史・羅馬法を講じた。

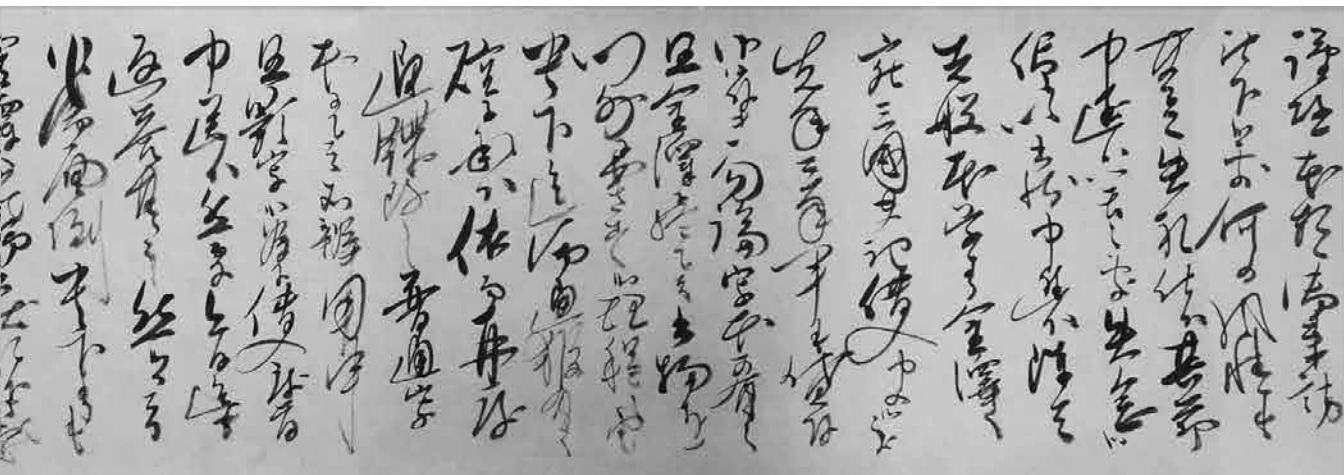


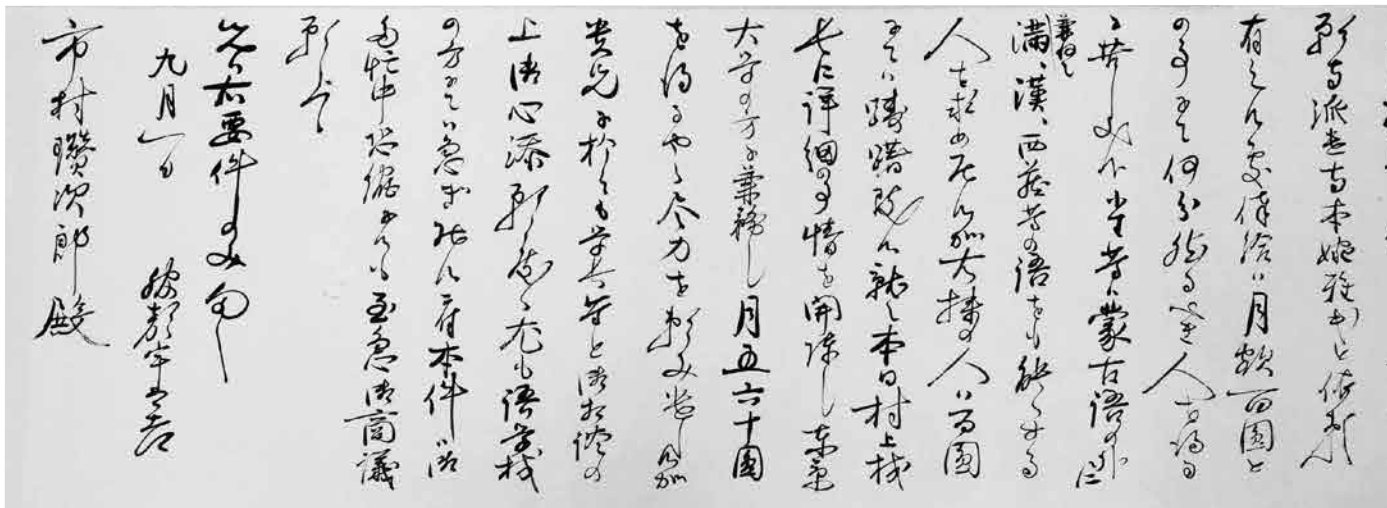


▲ 16 | 服部字之吉書簡 (1908年〈明治41〉9月1日、市村宛112)

清朝末期、政治的混乱が続くなかいくつかの制度改革が進められた。戊戌の変法(1898)によって設立された京師大学堂では、1902年(明治35)に総教習呉汝綸が来日し教育制度視察を行う。この時ドイツ留学中の服部字之吉は命じられて留学を中断して帰国し、京師大学堂師範館の総教習として北京に赴任する(～1909年帰国)。服部は清国人学生の日本留学を斡旋し、また北京の日本人社会で重要な立場を占めた。展示品16は、前半が東アジア各地の民俗学調査を精力的に行った鳥居龍蔵(1870～1953)の満蒙調査の様子を伝える内容。後半は、東京外国語学校の村上直次郎校長から服部と開教僧寺本婉雅(真宗大谷派)に対して蒙古語教師候補の推薦依頼があったが、薄給では人材確保が難しいので、この蒙古語教師を東京帝大にも兼勤させて俸給を増額してしかるべき人物を見つけたいと、市村に協力依頼している(1911東京外語蒙古語科開設)。満蒙への日本の関心の高まりを示す内容である。

* 服部字之吉(1867～1939、号随軒、1890帝大文科大学哲学科卒)は福島出身の中国哲学者・学務行政家。東京帝大で東洋倫理を講じた。清国留学中に義和団事件に遭遇した際の『北京籠城日記』でも知られる。

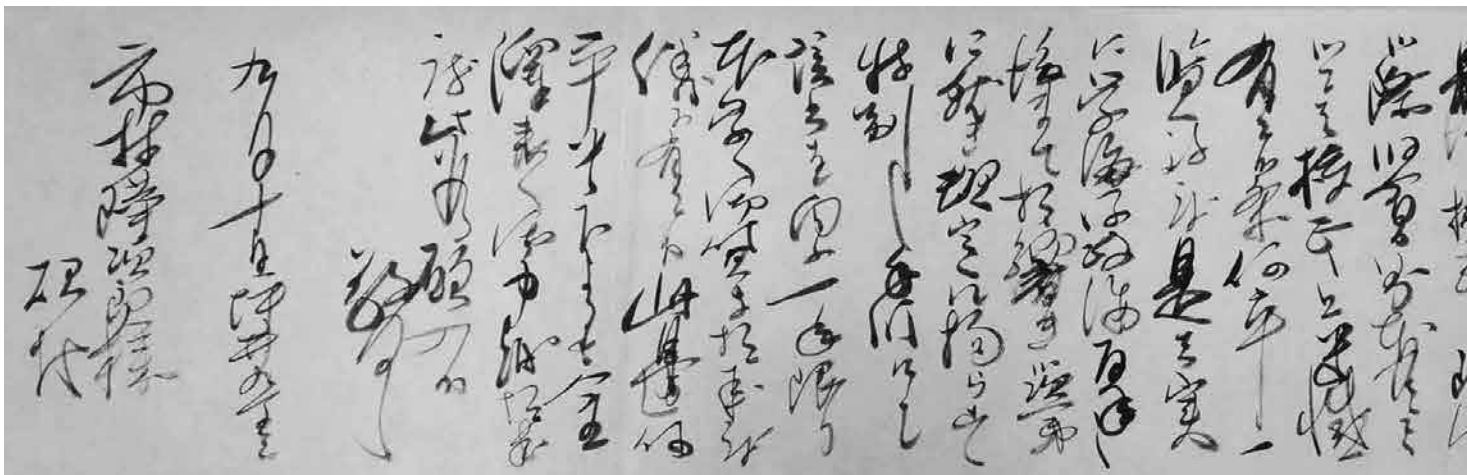


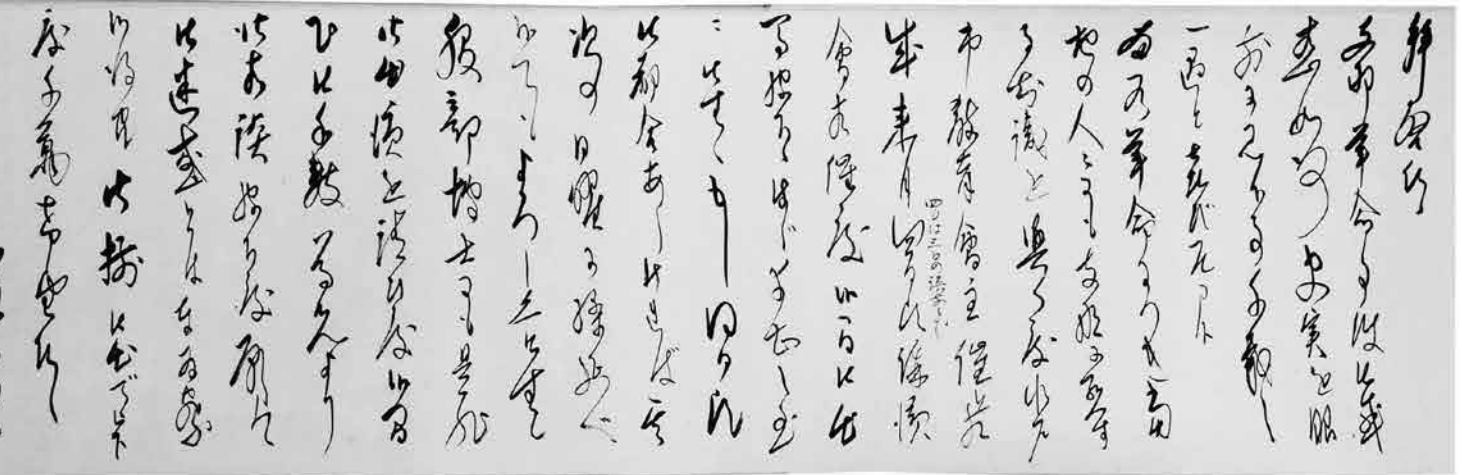


▼ 17 | 坪井九馬三書簡 (1908年〈明治41〉9月10日、市村宛113)

坪井九馬三は漢学者日下寛（号勺水）と共に校訂作業に従事して、日本および朝鮮の史書・史料を集成した「文科大学史誌叢書」全56冊（木版と金属活字の併用）を東京帝大から刊行している（1897～1913刊）。史料編纂掛による古記録・古文書の編纂刊行とは別系の動きとして注目される。明治政府による修史事業は明治前期の修史局をめぐる変遷の後、臨時編年史編纂掛が帝大に移管されるが、筆禍事件を契機に一端廃止され、1895年（明治28）に再び史料編纂掛が置かれて一次史料を編纂した『大日本史料』『大日本古記録』『大日本古文書』の刊行が1901年（明治34）に始まる。展示品17は、坪井が朝鮮最古の史書『三国史記』の校訂にあたり、金沢の前田家本の借用について市村に相談している内容。前年1907年（明治40）に金沢に調査出張し「金沢訪書志」を著した市村に対して、金沢から大学への貸出を断る回答があったため、坪井は従来の経緯を説明し、市村から重ねて借用依頼してほしいと頼んでいる。1913年（大正2）刊の「文科大学史誌叢書」所収『三国史記』には口絵に明倫館蔵書印のある前田家本の写真が収録されており、借用できたことが分かる。

*坪井九馬三（1859～1936）は摂津国出身の歴史学者。東大文学部（1881政治学理財学科卒）と理学部（1885応用化学科卒）に学び、ドイツ留学を経て帝大文科大学教授となり、西洋史・歴史地理を講じた。

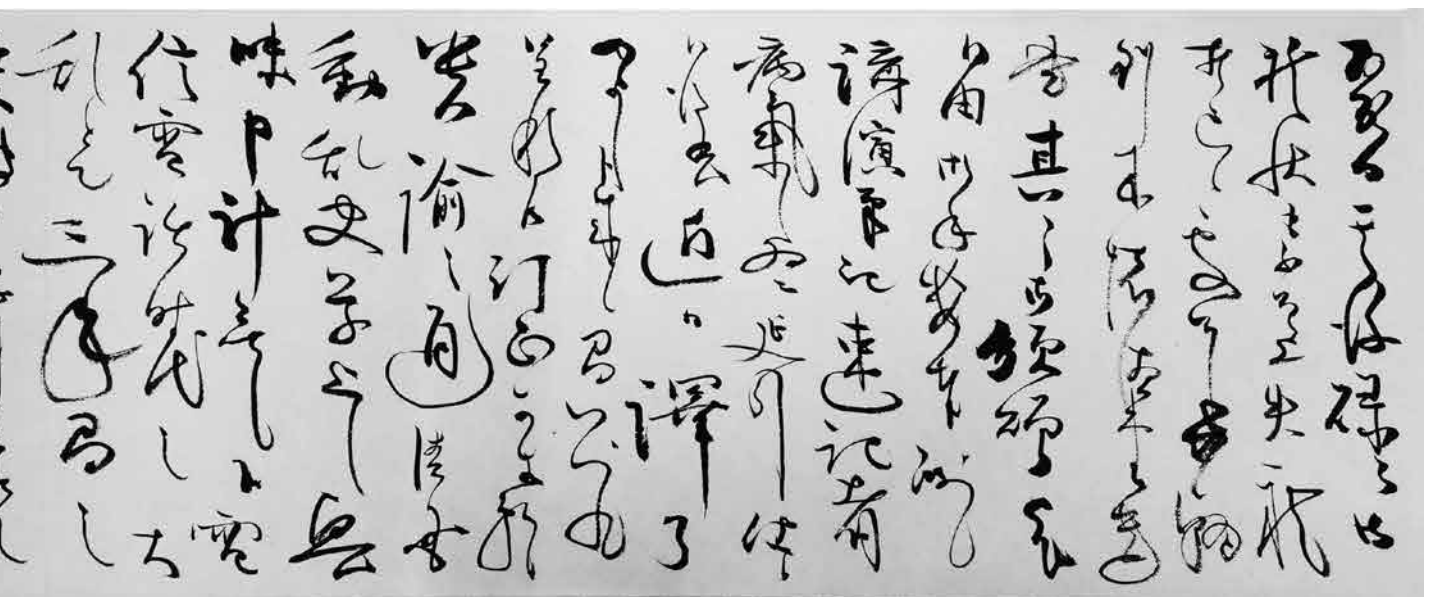


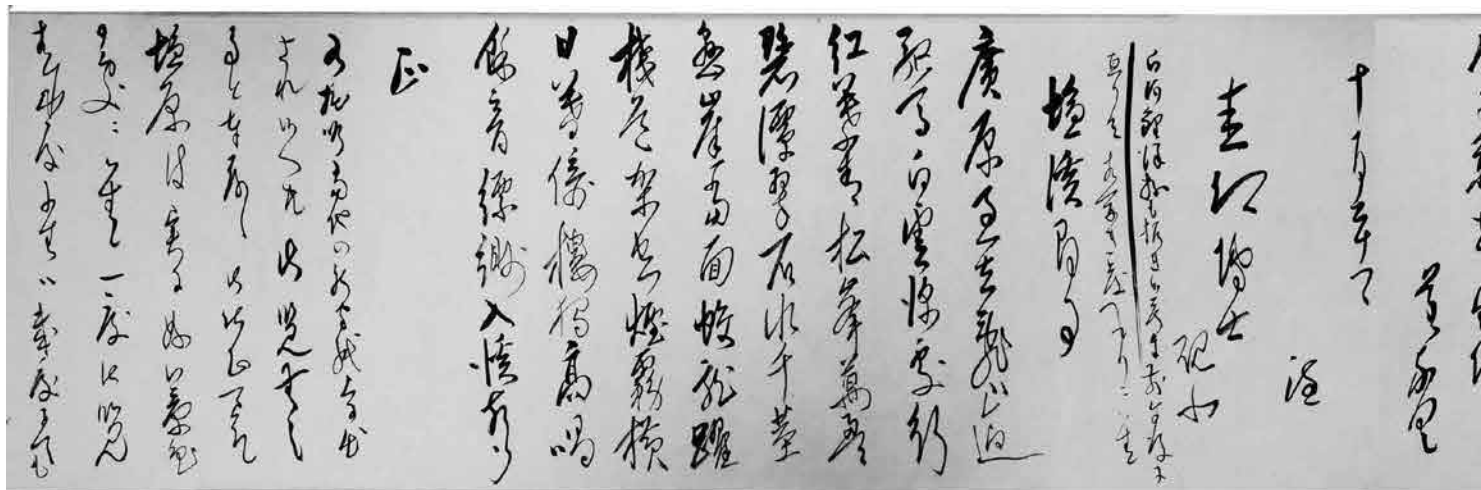


▲ 18 | 菊池謙二郎書簡 (1911年〈明治44〉11月20日、市村宛145)

辛亥革命の幕開けとされる武昌における革命派の武装蜂起は1911年（明治44）10月11日のことであり、孫文による中華民国建国宣言は翌年1月のことである。展示品18は辛亥革命に際会して、菊池謙二郎が会長を務める水戸教育会において茨城県民に現代中国の動向を啓蒙する講演会を開催すべく、市村と服部宇之吉の二人を講師に招請しようとした時の書簡。講師候補として東京帝大の後輩で新聞記者と清国での教育経験がある白河鯉洋（1874～1919、1897 漢学科卒）の名も挙がっている。現代中国の政治情勢が歴史学者にとって大きな刺激となっていることが感じられる。後出の南北朝正閏問題でも菊池は活発な動きを見せており、同じ常陸出身の歴史家として菊池と市村には多くの接点があった。

* 菊池謙二郎（1867～1945、1890 帝大文科大学国史科卒）は水戸藩士の家に生まれた歴史学者・教育者。二高校長等を務めるも辞職して京都帝大法科に入り直し、明治34年（1901）に東亜同文書院教頭として上海に赴任。帰国後、水戸中学校長・水戸教育会長等を務め、水戸学の研究で知られた。

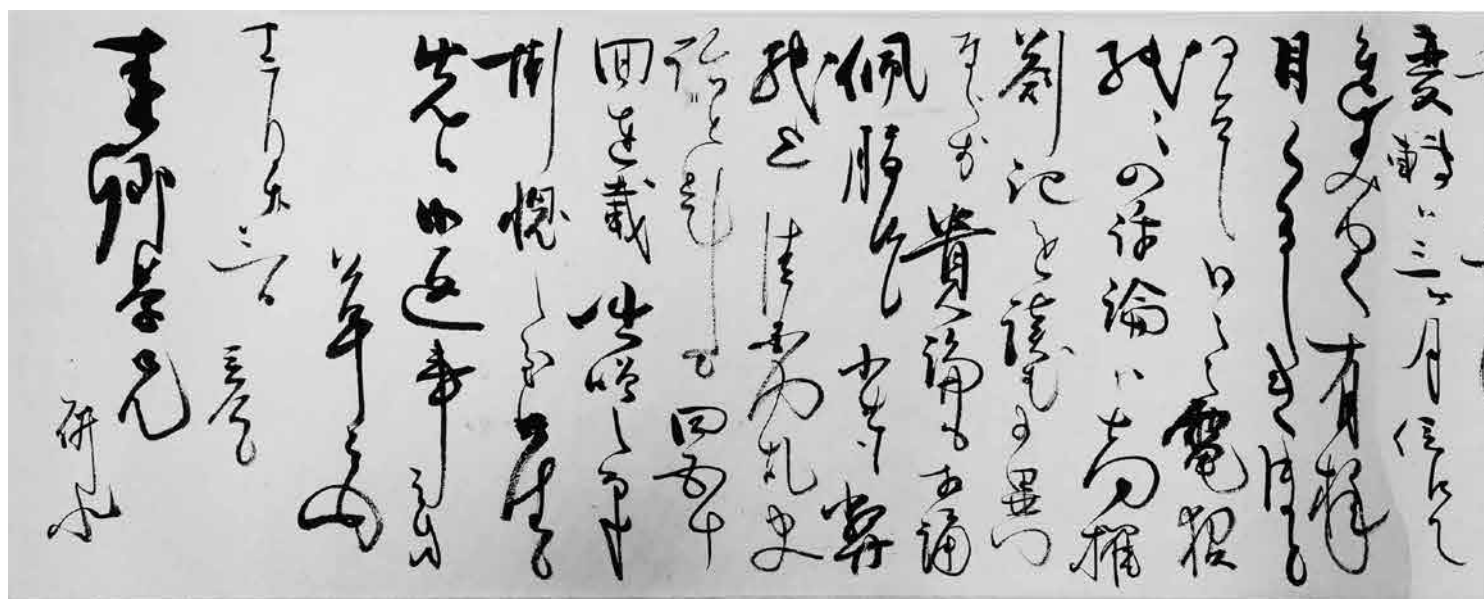




▼ 19 | 西村時彦書簡 (1911年〈明治44〉12月23日、市村宛147)

市村にとって西村時彦と瀧川亀太郎は古典講習科同級生のうち最も親交のあった人物。前年に懷徳堂復興のための組織懷徳堂記念会を発足した西村は、この年の秋、懷徳堂先儒の祭典・記念講演会および展覧会を計画し、自ら奔走してこれを実行した。講演会講師には東京・京都から学者を招き、古典科出身者を代表して市村も講演者に加わった。記念出版として五井蘭洲・中井竹山・中井履軒の遺著五種からなる『懷徳堂遺書』も刊行されており、西村の企画力・行動力は特筆すべきものがある。また、辛亥革命に際会して、西村は大阪朝日新聞に「清国内乱史話」の連載を開始した。情報通信が発達した時代の大事件ゆえ日々電報や新聞の評論を通読するのに忙しいが、王鳴盛『十七史商榷』や趙翼『廿二史劄記』のような清朝の史論を読むのに異ならないと言っているのは、漢学出身の新聞記者ならではの言と言えよう。

*西村時彦 (1865 ~ 1924、号天囚・碩園) は種子島出身の新聞記者・小説家・漢学者。古典講習科漢書課前期を中退後、新聞記者となる。後年、師重野安繹の意向を受けて大阪懷徳堂の復興に尽力し、また京都帝大文科大学に講師として出講し「楚辞」を講じた。文学博士 (1920)。宮内省御用掛となった (1921)。著書『南島偉功伝』『日本宋学史』『懷徳堂考』『碩園先生遺集』ほか。



III 教科教育としての東洋史

右の如く、桑原清祥、桑原鶴蔵、
 小生等、本月一日、胃、腹痛、
 に苦み、今日、就、褥、服、並、
 一、居、併、し、兩、三、日、前、の、異、状、
 瘡、向、明、後、日、は、登、井、同、講、
 し、豫、定、と、つ、き、申、上、申、す、
 文、部、省、令、回、極、秘、密、と、し、文、部、省、
 より、大、学、總、長、に、高、等、中、学、校、の、
 学、科、の、時、間、敷、設、問、相、成、の、由、に、
 總、長、より、學、長、と、被、に、教、授、者、
 見、と、徴、せ、れ、る、貴、大、学、に、定、め、し、
 同、様、の、事、と、し、送、答、す、る、に、右、の、
 中、学、校、の、方、は、漢、文、と、二、年、の、課、
 時、間、と、相、成、し、居、る、に、右、は、一、年、の、
 課、時、間、を、方、違、端、を、と、思、ふ、に、
 次、に、中、学、の、東、洋、史、と、從、來、一、三、
 學、年、一、年、間、教、授、せ、ら、る、に、今、
 同、の、以、上、の、事、と、な、單、に、一、三、學、年、の、
 一、二、學、期、と、一、二、學、期、と、み、に、東、洋、
 史、と、授、け、一、三、學、期、は、西、洋、史、
 主、授、け、と、や、り、相、成、し、居、る、に、右、は、由、々、と、
 申、上、申、す、

▲ 20 | 桑原鶴蔵書簡 (1910年〈明治43〉10月17日、市村宛132)

周知のように「東洋史」という名称は、「国語」と同じく大学における学科名に先んじて中等学校の教科名として始まった。「東洋史」は東京高師の那珂通世教授の発議により、日清戦争のさなか1895年(明治28)に従来の本邦歴史・外国歴史に替わって本邦史・東洋史・西洋史として始まる。展示品 20 は、京都帝大文科大學史学科の東洋史学第二講座教授に着任した桑原鶴蔵から市村に対して、中学校の漢文と東洋史の授業時間削減に反対するために共同歩調をとるように呼びかけた内容。文部省から大学総長に中学校の漢文と東洋史の授業時間削減について諮問があったことを受けて、桑原は京都帝大の同僚と計り反対意見を提出するつもりであり、東京帝大でも市村が白鳥教授と相談の上、相応の措置を講じるように求めている。中学校の漢文・東洋史教科が大学において東洋史を志望する学生に直結するため、帝大教授が中学校の教科教育の改変に敏感に反応していることが窺える。

* 桑原鶴蔵 (1871 ~ 1931、1896 帝大文科大學漢学科卒) は福井県出身の東洋史学者。桑原が編纂した『中等東洋史』と教授用参考書は名著とされ、中等教育において広く用いられた。

右の如く、桑原清祥、桑原鶴蔵、
 小生等、本月一日、胃、腹痛、
 に苦み、今日、就、褥、服、並、
 一、居、併、し、兩、三、日、前、の、異、状、
 瘡、向、明、後、日、は、登、井、同、講、
 し、豫、定、と、つ、き、申、上、申、す、
 文、部、省、令、回、極、秘、密、と、し、文、部、省、
 より、大、学、總、長、に、高、等、中、学、校、の、
 学、科、の、時、間、敷、設、問、相、成、の、由、に、
 總、長、より、學、長、と、被、に、教、授、者、
 見、と、徴、せ、れ、る、貴、大、学、に、定、め、し、
 同、様、の、事、と、し、送、答、す、る、に、右、の、
 中、学、校、の、方、は、漢、文、と、二、年、の、課、
 時、間、と、相、成、し、居、る、に、右、は、一、年、の、
 課、時、間、を、方、違、端、を、と、思、ふ、に、
 次、に、中、学、の、東、洋、史、と、從、來、一、三、
 學、年、一、年、間、教、授、せ、ら、る、に、今、
 同、の、以、上、の、事、と、な、單、に、一、三、學、年、の、
 一、二、學、期、と、一、二、學、期、と、み、に、東、洋、
 史、と、授、け、一、三、學、期、は、西、洋、史、
 主、授、け、と、や、り、相、成、し、居、る、に、右、は、由、々、と、
 申、上、申、す、

市村 總、長、
 桑原 鶴、蔵、
 九月廿日
 桑原 鶴、蔵、

大事と存りぬ
 佛兼知し如く高等中学科の歴史
 は大抵は西洋史又は日本史之主とし
 東洋史を授けりとの意は稀なり大
 学生の東洋史の知識は單に中学の
 亦三学年とし習得せし知識に止
 る故從亦とも授業上困難を感
 するは勤勞なりと今更に授
 業時間を減少せらるれば其
 難手なり且東洋史料を望
 者の數は自然減少するを以て中
 し難くゆへ生じ當地の同僚と相談し
 上(此は陸狩野二君未だ停朝(時事)
 意見提出の可なり也)も貴兄
 に於て此點然るべく注意有之候
 尚ほ白鳥教授とも御話合し上
 相當の方法御講じ下りし幸甚
 にも右得書之如取上は御中
 筆一内は漢字は月日物首
 十月十七日
 桑原隲藏

市村學兄
 研北

▼ 21 | 桑原隲藏書簡 (1917年〈大正6〉9月20日、市村宛202)

展示品 21 の前半は、次ページで言及する中等教員免許のための検定試験のことに
 に関する内容である。注目すべきは、追伸として記されている書簡後半部分の、
 中等学校における歴史教科の細目変更に関して言及している点である。桑原によ
 れば、目下、文部省では高等師範出身者が主導して中等学校の教科細目を作成中
 であり、歴史科に大改編を加えて東洋史を外国史の一部とする意見が出ていると
 も聞く。昨今、全国に高等学校増設の機運が高まっており、東洋史を高等学校の
 必修科目にすべきと主張しようと考えている矢先、従来から有名無実の感がある
 中等学校の東洋史が廃滅されれば、大学における東洋史学科にも影響するので、
 市村に事実関係の確認と共に対策を講じてほしいと訴えている。

陳日仄聞言(目下)文部
 省にて中等学校の教科細目
 一新に作成中の由は高等師
 範出身者主として任じ、歴史
 科も大変更之れへ或は東洋
 史の目と廢し外國史の一部
 と云ふ上の方議もある由第一
 議實行せらるれば東洋史思
 へば由こし大事と存り候
 學校増設の機運熟し高等
 學校増設せらるれば予は此際
 何れも高等學校に必ず東洋史
 と開講する候に候と希ひせ
 切柄中等學校に東洋史の科
 目廢滅せし候は後亦
 無實となり高等學校の東洋
 史一層其意微なるに從つて
 大學の東洋史科の感熱は新
 言ありしに候
 右事實の有無及その對策
 三御記慮有之候

相啓 近日東上の津々勿率
 法高評と接才を得ず遺憾存
 在
 昨復檢定委員會長より通牒有
 之至急主査委員と選定すべく
 且つ豫備試験問題之提出を急
 ぎ申上候
 (一) 主査委員の件は従来の慣
 例に依るべく萬事貴下の御意
 見に一任す
 (二) 試験問題の件は近日一
 方面の協議の上然るべく御意
 見を申上候
 (三) 試験問題の件は近日一
 方面の協議の上然るべく御意
 見を申上候
 (四) 試験問題の件は近日一
 方面の協議の上然るべく御意
 見を申上候

▲ 22 桑原隲蔵書簡 (1914年〈大正3〉7月9日、市村宛161)

「文検」と略称される文部省師範学校中学校高等女学校教員検定試験は、1884年(明治17)から1949年(昭和24)まで81回に亘って実施された中等教員免許を取得するための検定試験である。中等教育機関の教員免許を取得する正規ルートは、高等師範学校を卒業することであったが、中等教育が漸次拡充される一方高等師範の数が限られていたため、それを補うものとして文検が機能した。帝大教授たちは高等師範教授と異なり、教員養成に直接に携わらなかったが、各学問領域と関連する教科の文検検定委員や教科書の検定(教科用図書調査委員)を務めることによって、各教科のあり方に深く関与した。

展示品 22 は、新たに歴史科の検定委員となり、主査委員の選定と予備試験の試験問題作成を依頼された桑原が、試験問題提出まで時間的余裕がないため、その作成を市村に委託しつつ、「総括的問題」「解釈説明を要する問題」「固有名詞」に分けて問題内容を提案をしている書簡。

相復貴翰披露悉了美
 作候父子本試験の問題
 には小生の意見と
 (1) 唐と波斯との関係
 (2) 明代宦官の専横
 (3) 清の太宗と朝鮮との交渉
 (4) 戊戌の政變
 等の内容より一題を選択
 せしむるに候
 貴台御意の問題に對し
 固く異議無之なり但五代形
 勢論は數少く廣汎に失
 主査委員の御意を
 建國の末歴は至極整成を以
 之も範圍少く廣汎に失
 輕く清の太祖の事業と
 明清の交渉と少く具體的
 には小生の意見と
 試験には無試験委員
 追々たる御意を以て
 必し御意を以て
 人等と云ふ大延琳、蒲
 奴何れもよし可なり但し何
 滿洲方面に關係あり故に

成り問題以文部省（以提出病一
 應以肉示被出此或以中并考
 此公意見之開陳（得て好都
 合に於て之存し候下取敢右
 貴公之得る如斯に候故旨

七月九日午前
 桑原隲藏

市村總兄
 研北

追伸
 唯今一寸思出せり候之者申述（ハ
 (1) 總括的問題
 天竺の私の執筆
 阿片戦争
 手如何に存し候

(2) 解釈説明之要す問題
 九品中正
 兩税法

(3) 固有名稱
 高鞅 史可法 陸九淵
 毛文龍

朝鮮の孝宗李 湜
 本懐に候

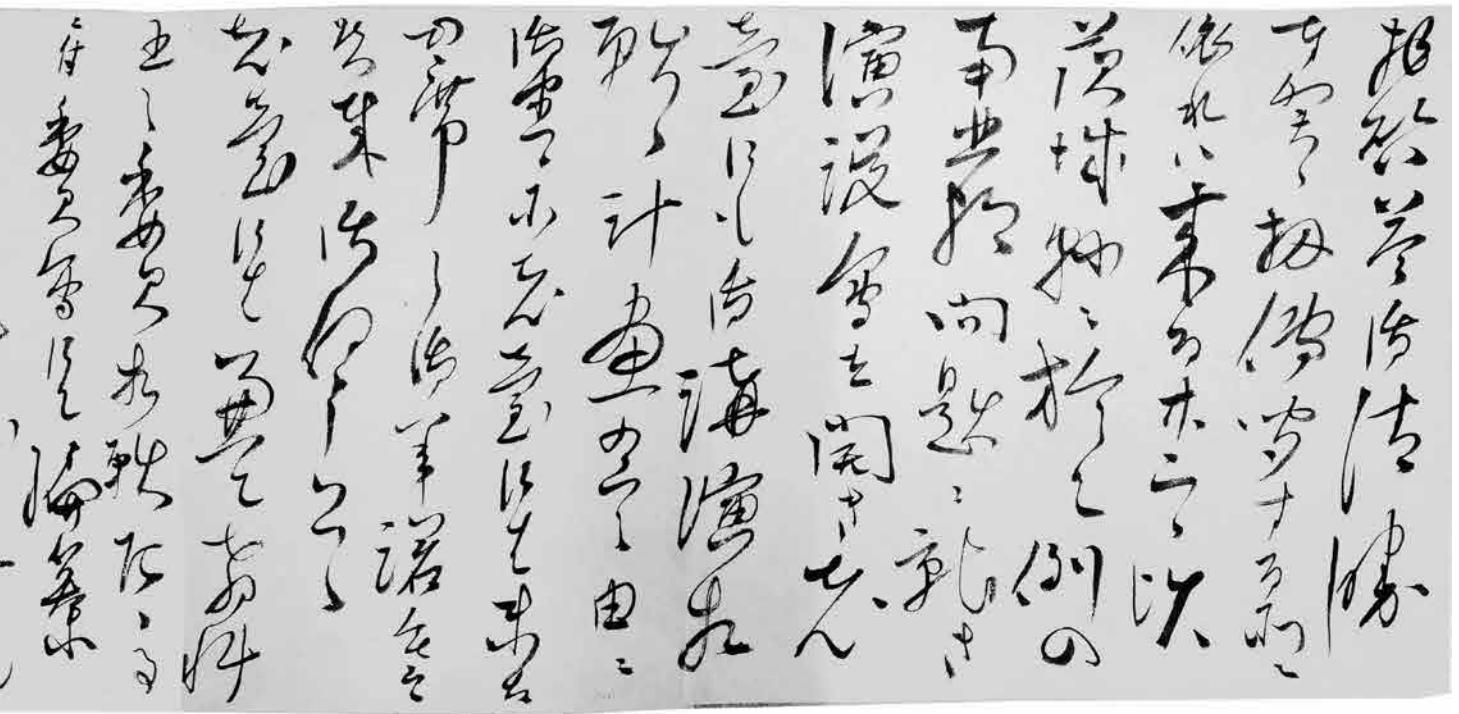
▼23 | 桑原隲藏書簡 (1914年〈大正3〉10月5日、市村宛165)

前掲書簡 22 において、桑原が「文検」歴史科の予備試験問題の作成を市村に委託したことを確認した。展示品 23 からは、予備試験の次に担当する本試験の試験問題作成について、市村と桑原の間で書簡の往復によって意見交換していたことが分かる。桑原は私案を提示し、また市村から送られた問題に対して私見を述べている。桑原の設問案に「戊戌の政変」のような現代史の事件が含まれていること、市村の設問案にあった「五代形勢論」や「清朝建国の来歴」を範囲が広すぎるのでより具体的にした方がよいと述べていることなどが注目される。市村の「五代形勢論」といった設問の立て方には旧来の漢作文における史論を思わせるものがある。一方、桑原の行届いた文面からはその緻密で几帳面な性格が伝わる。

是より一考し。之に對し
 既行儀の高仙芝（著し不生提
 出の(1)問と問題に決す場合を除き
 其の五五策
 出宜敷るべき歟と存し候
 地名のアルはあり。其れは一層
 孰打刺の喀喇和林を分海
 海陸、金上國係焉黃龍府
 本何と存し候一考し候
 最後は口頭試問の件、本人が若
 安らこの外問を討つ以外、市中
 紙への如き新案はより一考し候
 存し候。日本史西洋史の委問の
 方々の同意を得るやうに骨節
 堅ましく右を取敢書若
 貴公 研北
 十月五日
 桑原隲藏

市村總兄
 桑下

追白
 本試験の日割殊に口頭試
 問の日有り累定考し候。殊
 ぬ成るべく早く市内新と成
 候。此の案は十一月の上生
 の着京の贈礼有之候。其
 成るべく時日衝突せざる
 用意に候

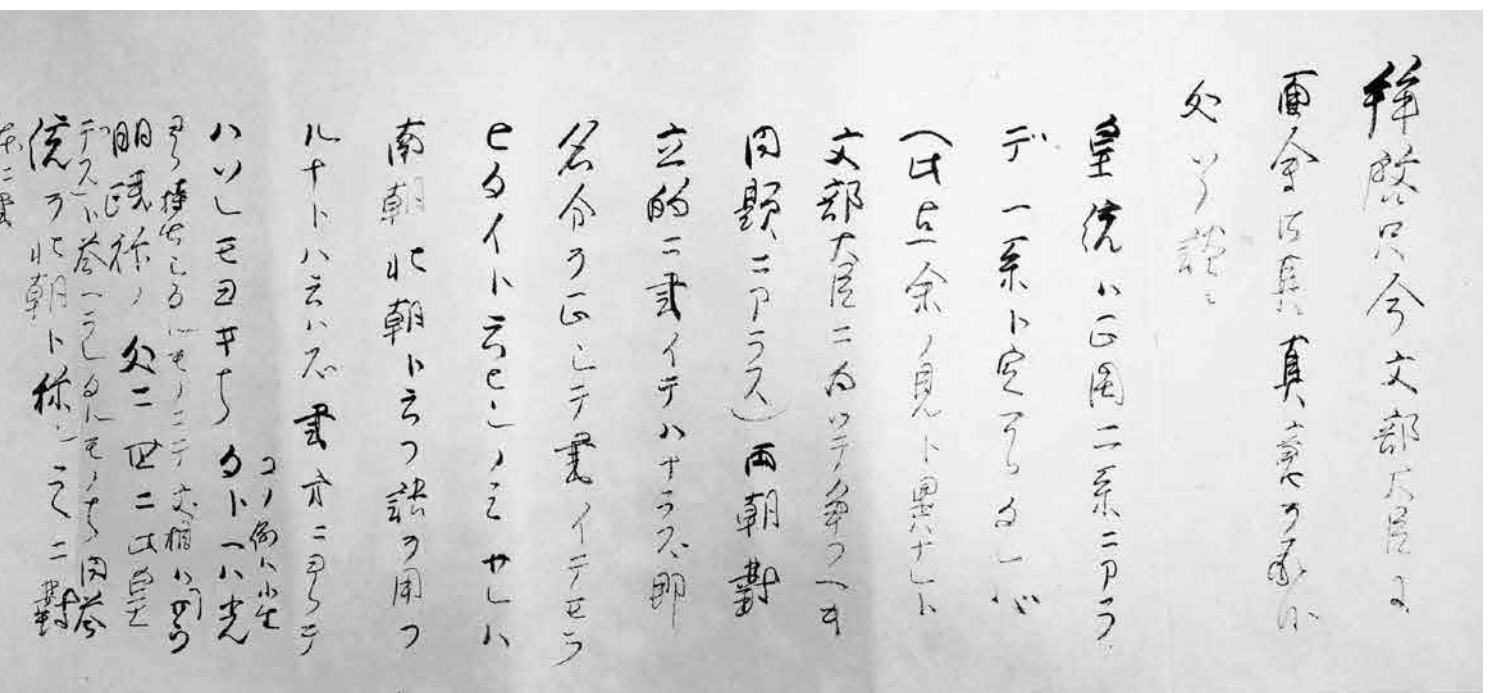


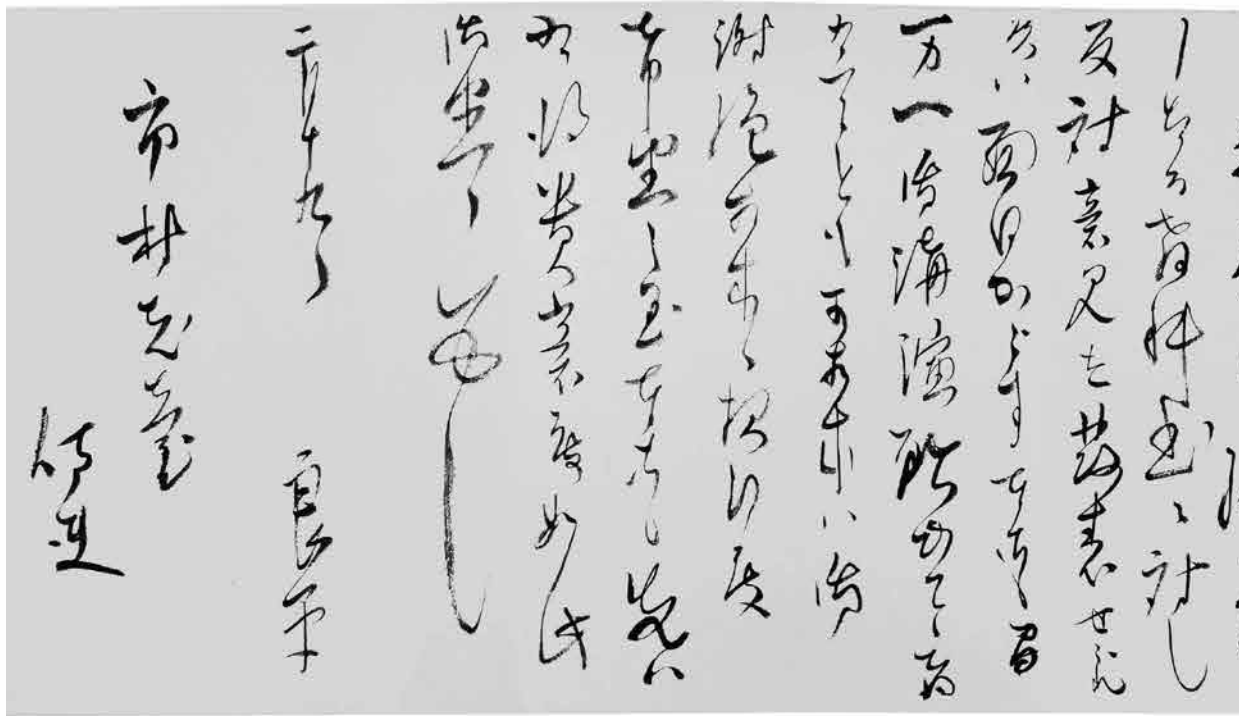
▲ 24 | 岡田良平書簡 (1911年〈明治44〉2月19日、市村宛135)

南北朝時代 (1337 ~ 1392) に関する歴史教科書の記述をめぐる問題に端を発した「南北朝正閏問題」は、1911年 (明治44) 1月の読売新聞に拠った漢学者たち (牧野謙次郎・松平康国ら) の論説を契機に政治問題化し、衆院議員藤沢元造 (南岳長男) による第二次桂内閣に対する国会質問へと発展する。一連の騒動の結果、文部省は問題の教科書 (教師用参考書) の使用を停止し、教科書編修官の喜田貞吉は辞職に追い込まれ、歴史学者たちは国体論と史実のはざままで苦悩することになる。市村はこの問題に関して王朝交替のある中国と日本では正閏の問題は同じでなく、通常は正閏の問題は起こりにくい、南北朝時代のような異例の場合には「国家成立の原則」に立って史実に対する批判が必要になると述べ、現実路線から南朝正統を妥当とした (『南北朝正閏論纂』)。

展示品 24 は文部次官岡田良平から市村に対して、国定教科書調査委員の立場を考えて、講演会において教科書に対する反対意見を述べることを自重するよう求める内容。しかし市村は2月26日に水戸で講演を行っている。

* 岡田良平 (1864 ~ 1934、1887 帝大文科大学哲学科卒) は遠江国出身の文部官僚。報徳思想家。一木喜徳郎は実弟。

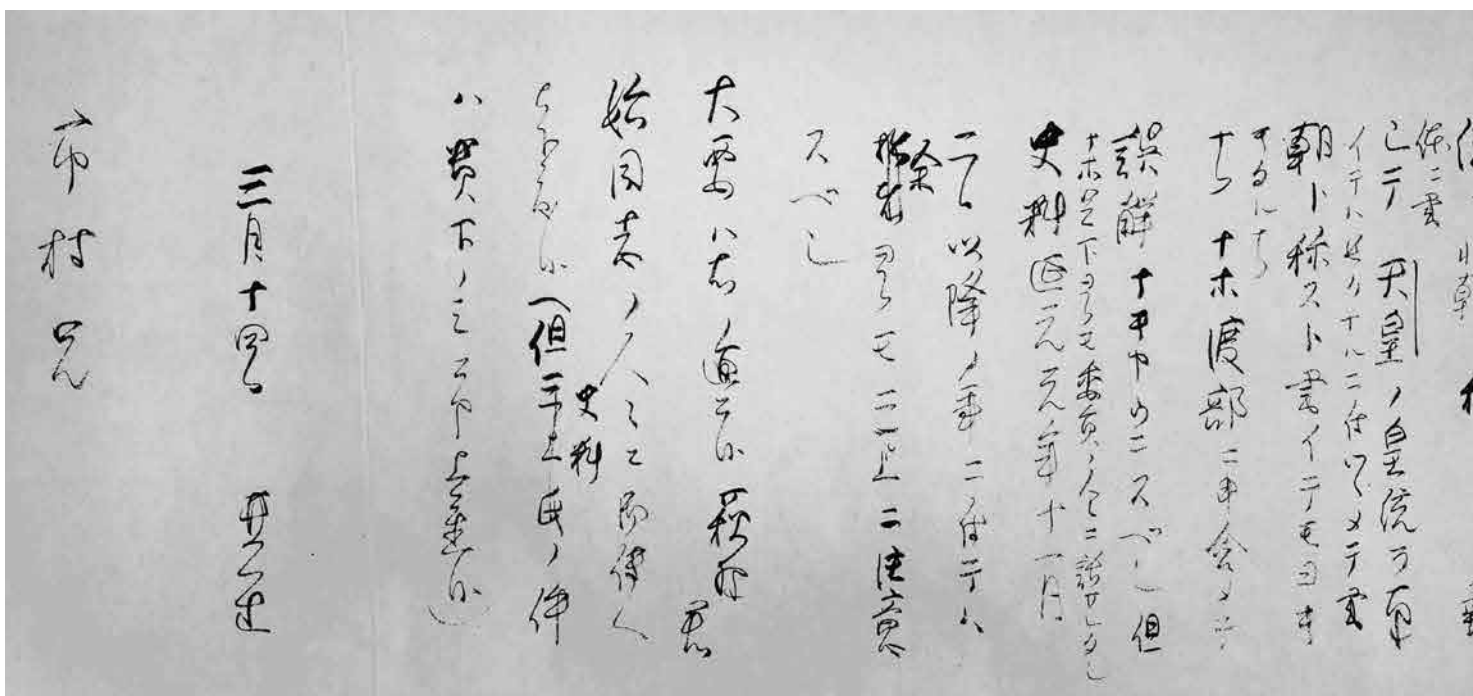


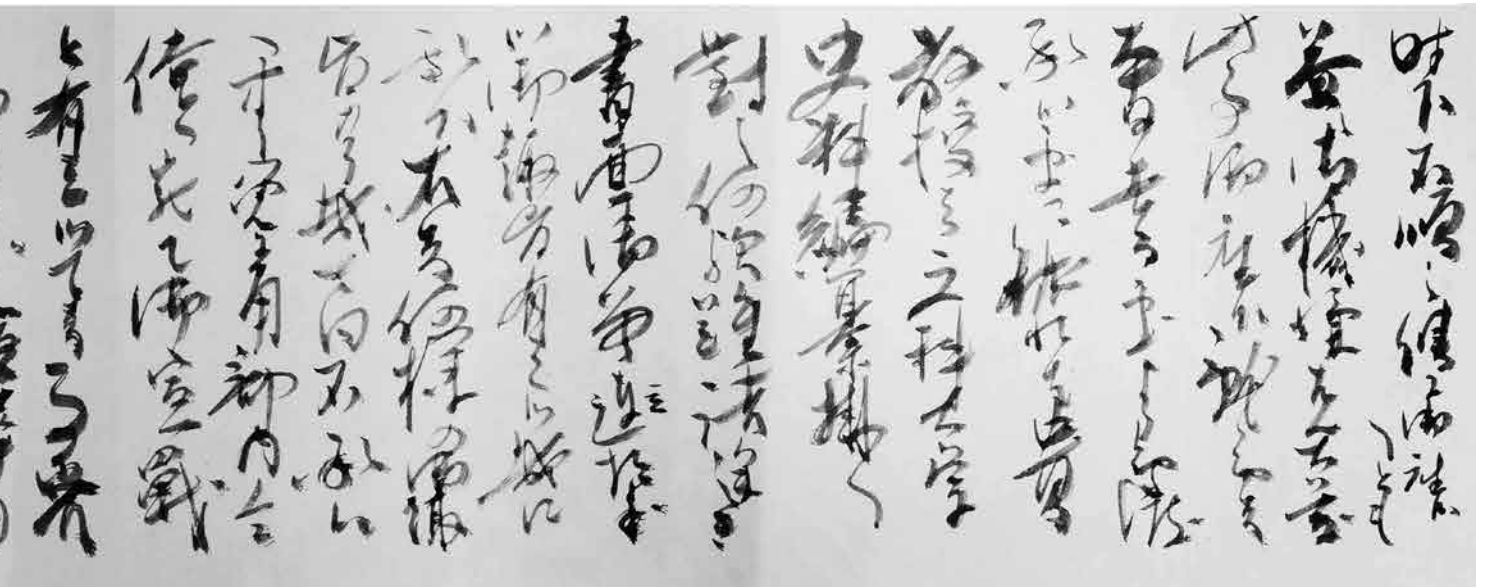


▼ 25 | 井上通泰書簡 (1911年〈明治44〉3月14日、市村宛137)

井上通泰と市村の交流は、明治20年代の森林太郎らとの文学結社「新声社」の時代に遡る。井上は岡山の第三高等中学校医学部の眼科教授を辞めた後、帰京して眼科開業の傍ら短歌創作や国文学研究に励み、山縣有朋ら政治家と交流を持ち皇室の信頼が厚かった。市村は井上の仲介によって明治天皇后女（富美宮允子・泰宮聡子両内親王）に漢籍を講義するようになっていた。展示品25は、南北朝正閏問題に関する政府方針を市村に報じた内容で、井上は小松原英太郎文相に面会した際の言葉を引用するかたちで、歴史教科書や史料の表現における注意点を書き送っている。またこれより先、2月25日に井上は旧友であり南朝正統論者である市村と賀古鶴所を伴って山縣有朋を小田原に訪ねており、市村は次第にこの問題に深く関与するようになっていた。

* 井上通泰（1867～1941、1891帝大医科大学卒）は眼科医、歌人、国文学者。柳田国男は実弟。

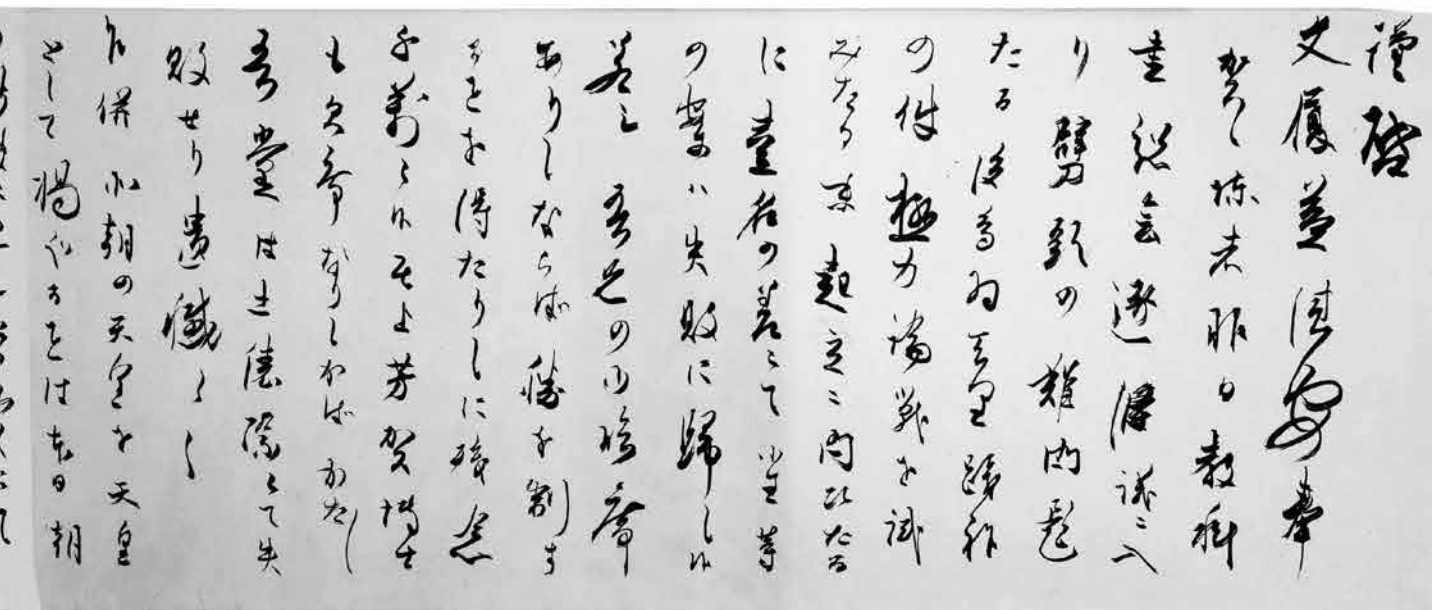


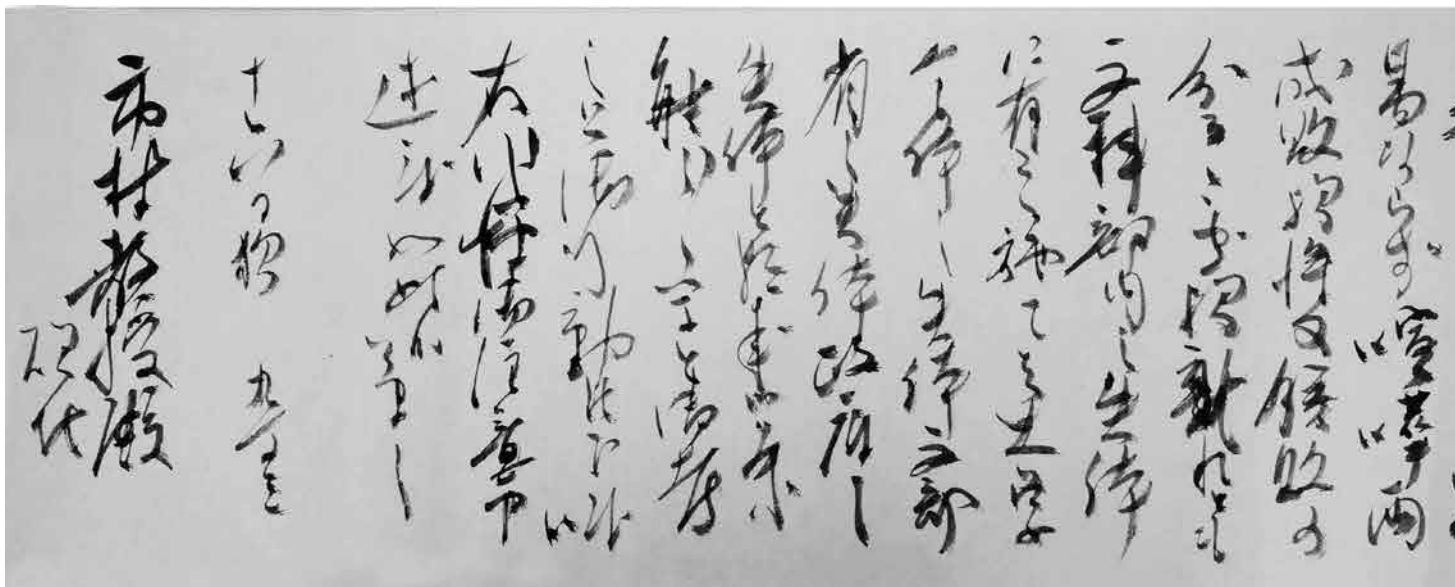


▲ 26 | 坪井九馬三書簡 (1911年〈明治44〉3月16日、市村宛138)

展示品 26 は、東京帝大文科大学長の坪井九馬三から市村の史料編纂掛に対する言動に関して嚴重に注意した内容。前掲 25 の井上通泰書簡には、南北朝の記述に関する小松原文相からの内意として、両朝対立的に記述してはならず、正閏の名分を正して書くようにとの指示があった。併せて井上は、吉野遷幸のあった延元元年 11 月（12 月の誤り）2 日以降の歴史資料における記述については、三上參次に別途注意すると記している。こうした井上書簡の内容から判断して、市村は井上からの意見を踏まえて、史料編纂掛の南北朝期の記述に対して批判的な意見を書簡にしたためて資料編纂掛に書き送ったと見られる。史料編纂掛からこの干渉に対する反発が起り、坪井文科大学長からの注意となったと考えられる。

*坪井九馬三（1859～1936）は 1904 年から 1912 年まで東京帝大文科大学長を務めた。

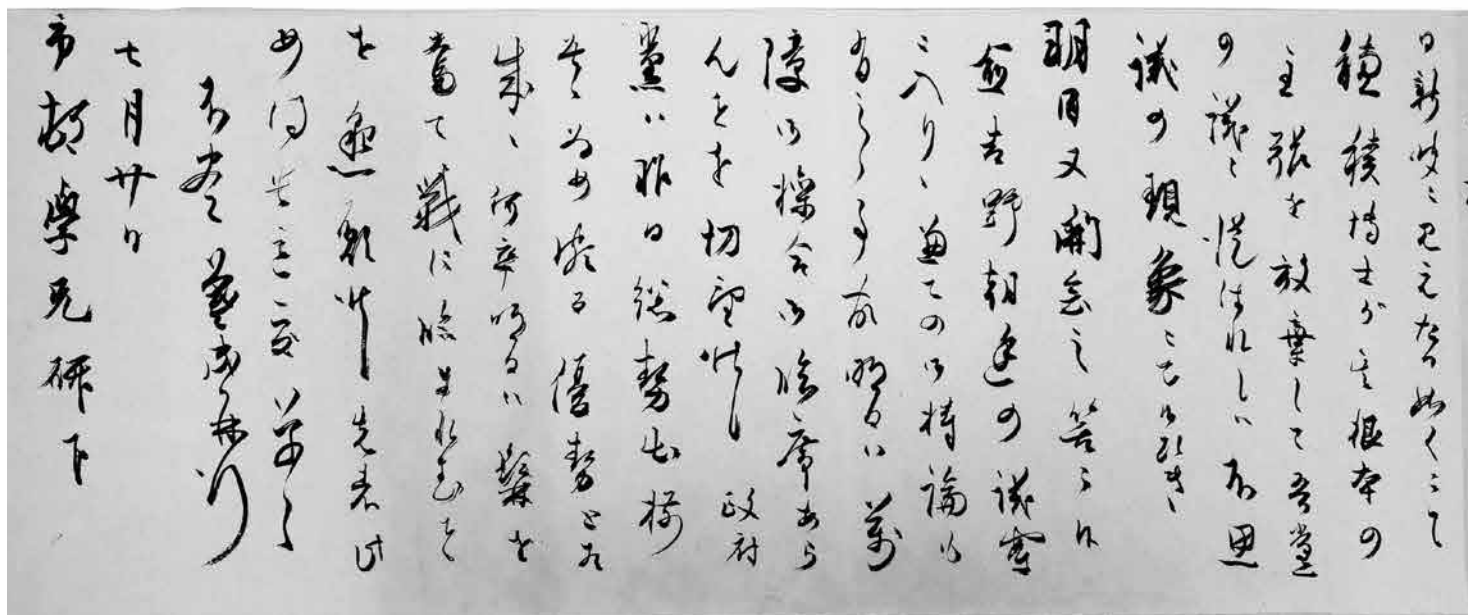




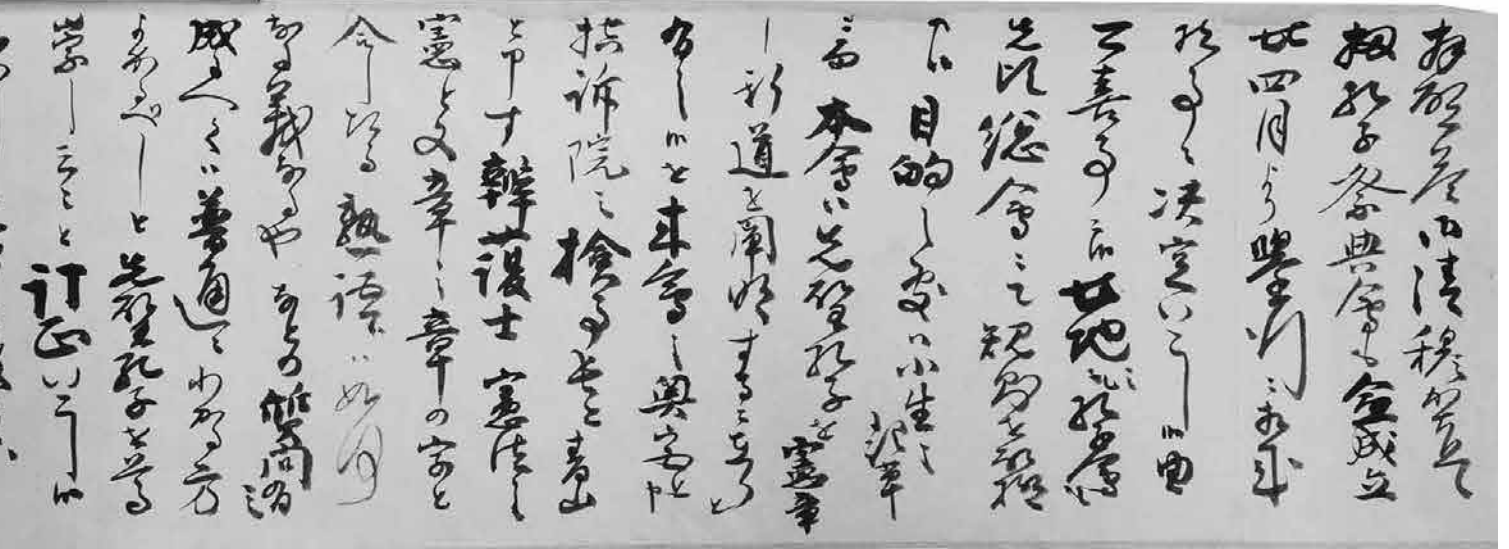
▼ 27 | 田中義成書簡 (1911年〈明治44〉7月20日、市村宛139)

南北朝正閏問題で世論が沸騰するなか、1911年（明治44）2月以降、文部省は南北朝に関する教科書記述をめぐる対応を余儀なくされた。まず「尋常小学日本歴史教師用巻一下」の使用を禁止するとともに、喜田貞吉の後任となった重田定一が修正案を起草し、5～6月にこれを国定教科書調査委員会歴史部会において逐条審議することとなった。部会では穂積陳重ら法学者と市村・田中義成ら歴史学者の主張が激しく対立し、市村・萩野らが主張した南北朝の正閏を明示する意見は容れられず、「南北朝」の呼称を改めて「吉野朝」とすることに決した。この部会案をもとに7月に入り総会を開いて更に逐条審議し、「吉野朝」改称に反対する意見もあったが（小牧昌業、加藤弘之、萩野、田中ら）、「南北朝」を「吉野朝」と改称することで成案をみた。展示品 27 は田中義成が市村に、市村や芳賀矢一が欠席した19日の後鳥羽天皇即位に関する逐条議の結果を報じ、併せて明日（7月21日）の吉野朝に関する逐条議への出席を請う内容。北朝の天皇に対する呼称など、なお検討すべき問題が残っていたことも窺える。19日の逐条議では田中らの案が多数決によって否決されたと述べ、21日の論戦への出席を請う田中の文面には、市村に対する難詰や皮肉が含まれているように読み取れる。

* 田中義成（1860～1919）は江戸出身の国史学者。



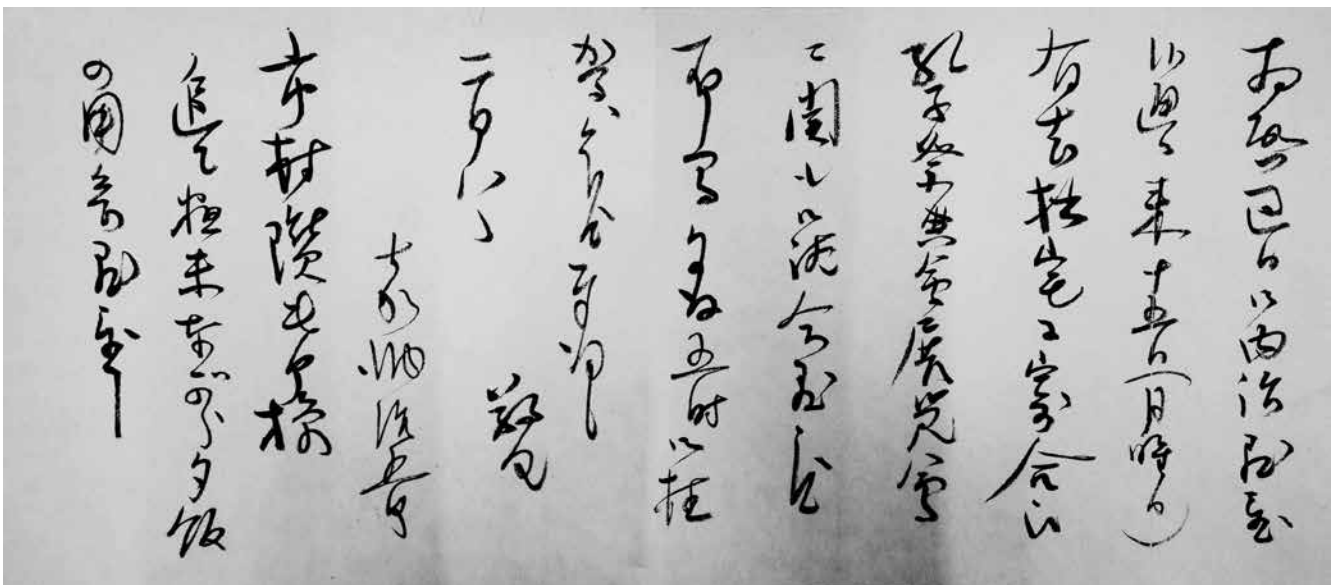
IV | 再び漢学の振興へ

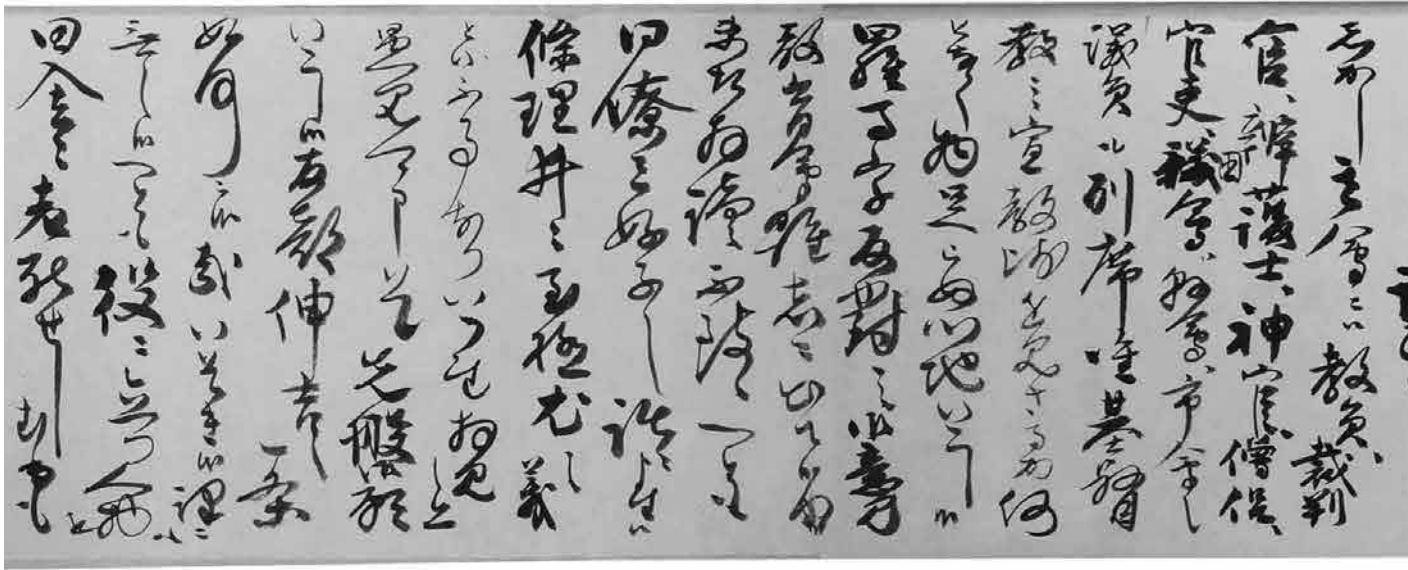


▼ 28 | 嘉納治五郎書簡 (1909年〈明治42〉2月8日、市村宛122)

1880年(明治13)発足の和漢学者有志による斯文学会と1918年(大正7)設立の財団法人斯文会は、名称こそ似通うがかなり性格の異なる組織である。後者は前者を解散して研経会・孔子祭典会・東亞學術研究会・漢文学会を統合する形で、内務・文部両省の関与のもとに設立された。斯文会の前身組織のうち、孔子祭典会は日露戦争後の1906年(明治39)に東京高師の教職員から湯島聖堂における積奠復活を求める声が上がリ、同校の嘉納治五郎校長が在京の老漢学者等に呼びかけて協議会を発足し(10月10日初会合)、翌年1月に評議員と委員を選任し(阪谷芳郎蔵相・牧野伸顯文相も評議員に)、同年4月28日に第1回孔子祭典会が挙行された。湯島聖堂における宗教儀礼の挙行は明治初年以來絶えてなかったことであり、こうした儀式に距離を置いてきたはずの文部省が関与するようになったことには大きな変化が認められる。展示品28は、嘉納から市村に、孔子祭典会の際に併せて催される先儒資料を展観する展覧会に関する協議のため来宅を請う内容。

* 嘉納治五郎(1860～1938、1881東大文学部政治学理財学科卒)は摂津国出身の教育者・教育行政家。

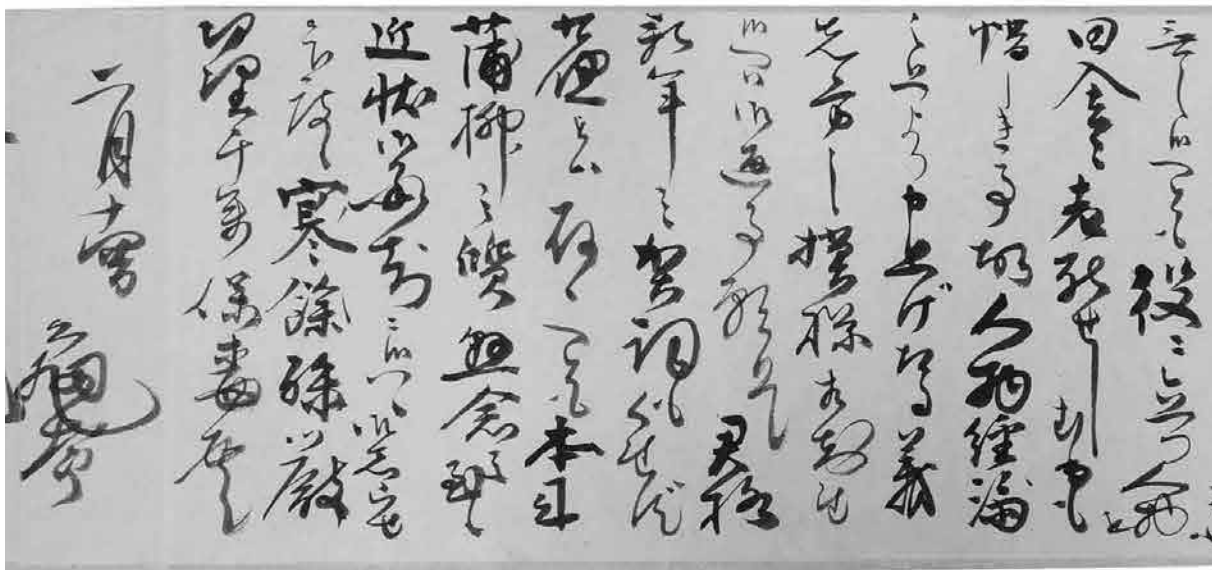


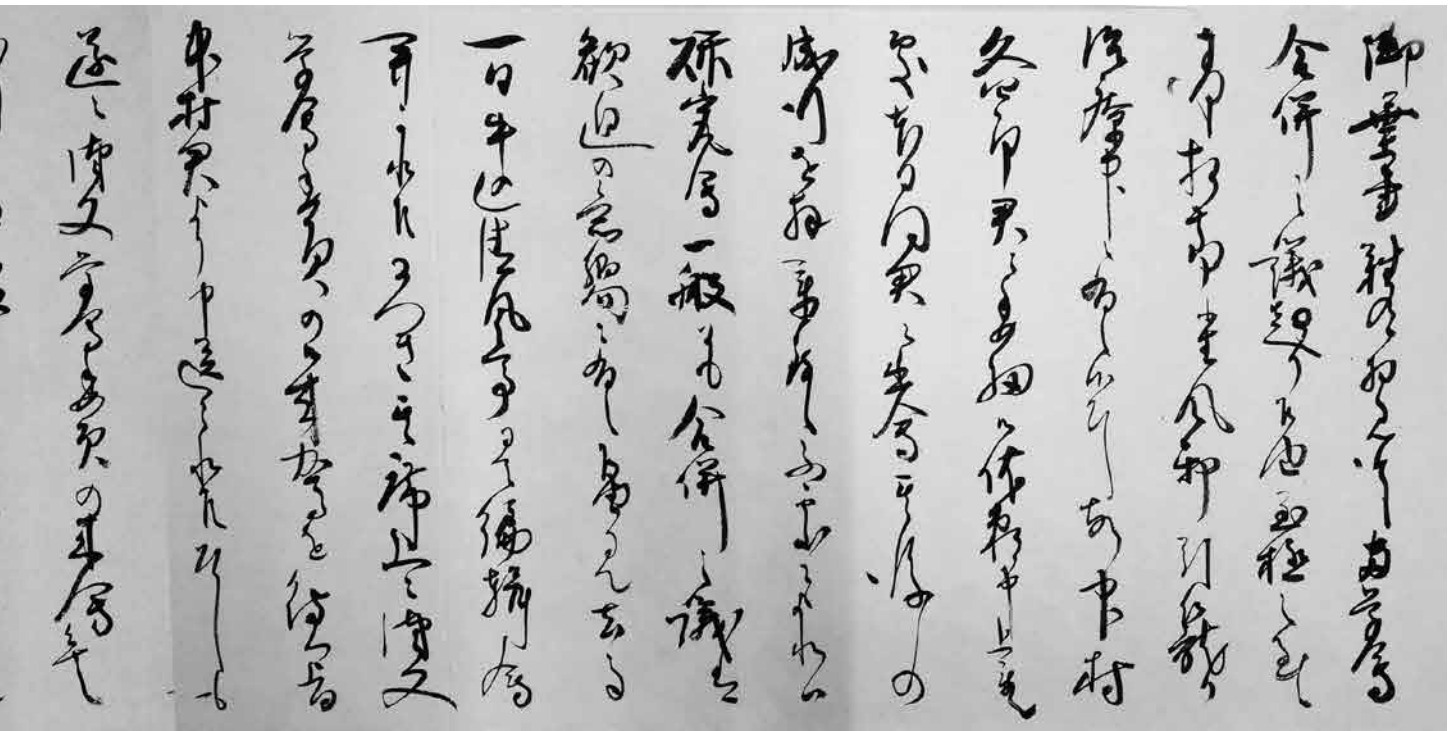


▲▼ 29 | 瀧川亀太郎書簡 (1907年〈明治40〉2月14日、市村宛101)

大著『史記会注考証』で知られる瀧川亀太郎は、市村と古典講習科の同級生で、長年、仙台・二高教授として漢文を講じた。展示品 29 は、東京・湯島聖堂における孔子祭典会の挙行に呼応して、仙台でも儒教唱道のための孔子会を設立したことを伝える内容。この他にも上越高田（増村度次）、愛媛・松山高校（今村完道）、鹿児島・七高など、各地の教育機関において漢学者による同様の孔子祭典会開催の動きがあり、1910～1920年前後、孔子祭は全国的な広がりを見せた。復活した孔子祭は伝統的な儒教儀礼ではなく、日本における儒教教化を孔子に感謝するものと意義付けられたことも指摘しておきたい。瀧川の書簡には、仙台における孔子会総会に宮城控訴院検事長の奥宮正治（槌斎の長男、健之の兄）らが参加したこと、また「教員、裁判官、辯護士、神官、僧侶、官吏、議員も列席」したが、キリスト教宣教師が居なかったのを物足らなく思ったという感想を洩らしている。諸宗派の国民道徳涵養への協力という点で、後の内務省による三教会同などを想起させるものがある。

* 瀧川亀太郎（1865～1946、号君山）は出雲国出身の漢学者。

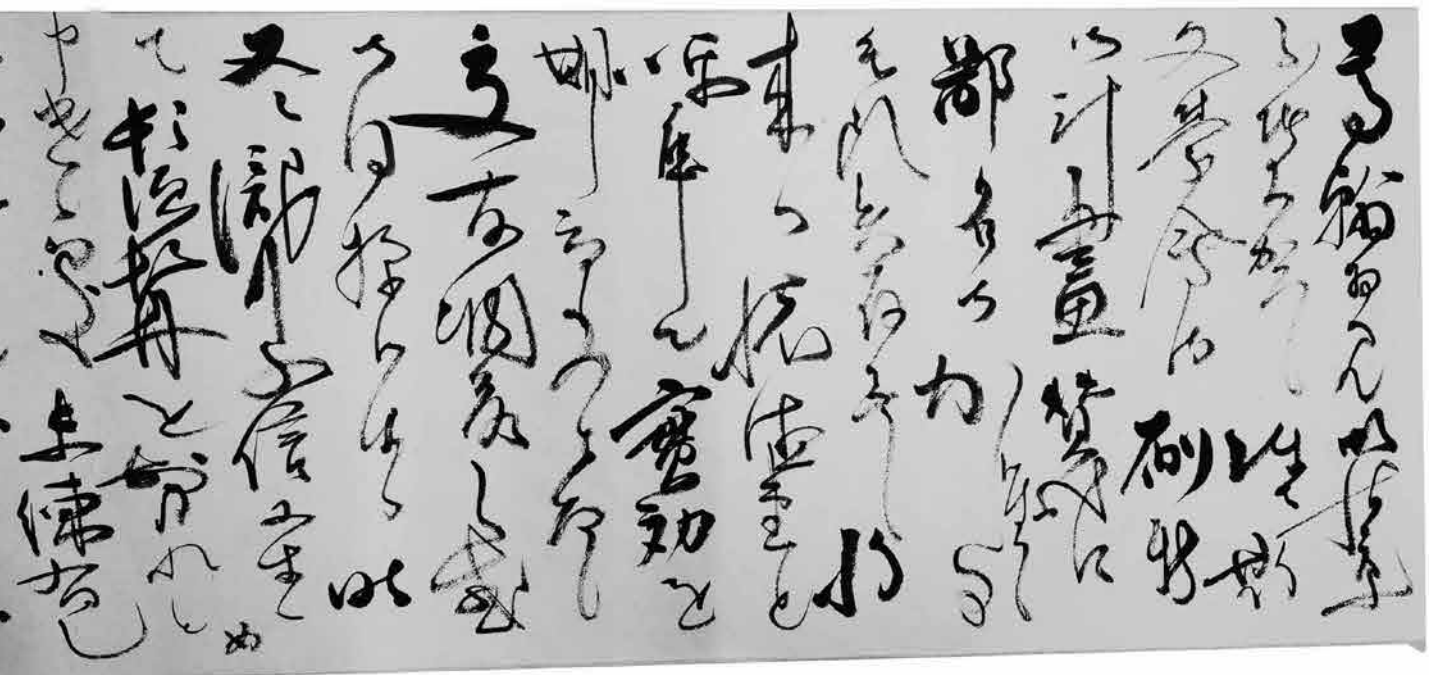


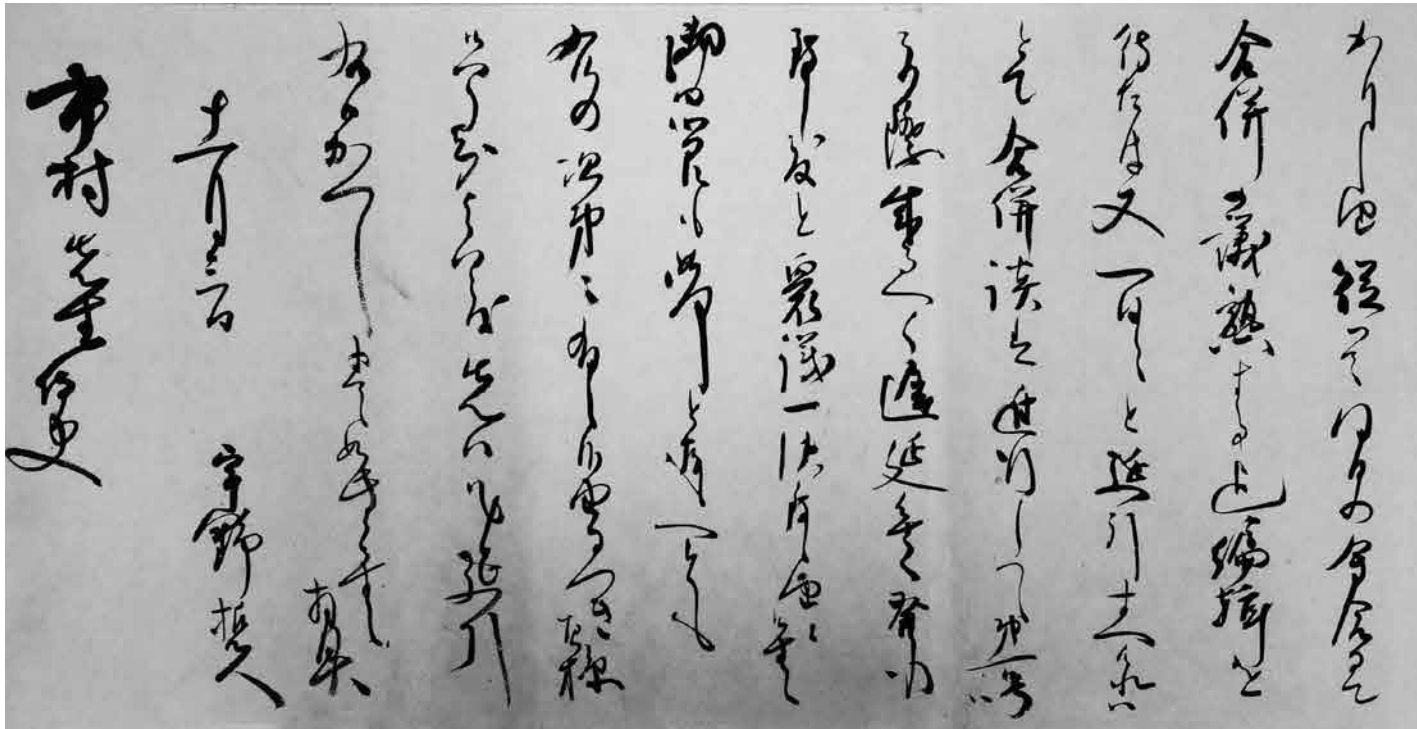


▲ 30 | 宇野哲人書簡 (1911年〈明治44〉11月3日、市村宛144)

展示品 28 において前述した斯文会の前身組織のうち、孔子祭典会以外の東亜學術研究会 (1909 設立) と漢文学会 (1910 設立) は、前者が帝大出身の新世代の学者が欧米の東洋学を意識して新しい視点から東洋学の振興をめざす學術団体、後者が早稲田系漢学者を中心とした中学校漢文科教員間の連絡や教科教育の研究のために組織であった。両組織の最終的な統合は 1918 年 (大正 7) の斯文会設立に俟つが、**展示品 30** からは 1911 年 (明治 44) の段階で既に両会合併の議論が持ち上がっていたことが分かる。宇野によれば、中村久四郎 (1874 ~ 1961、1899 東京帝大漢学科卒) ら東亜學術研究会関係者も合併に異存はなく、11 月 1 日の編集会議の場に漢文学会関係者を招き合併について協議しようと考えたが、その日漢文学会関係者は来会しなかった。この際、合併に関する協議は継続しつつ、学会誌『東亜研究』1 号 (1911 年 12 月刊) は東亜學術研究会単独で刊行することにしたと報じている。

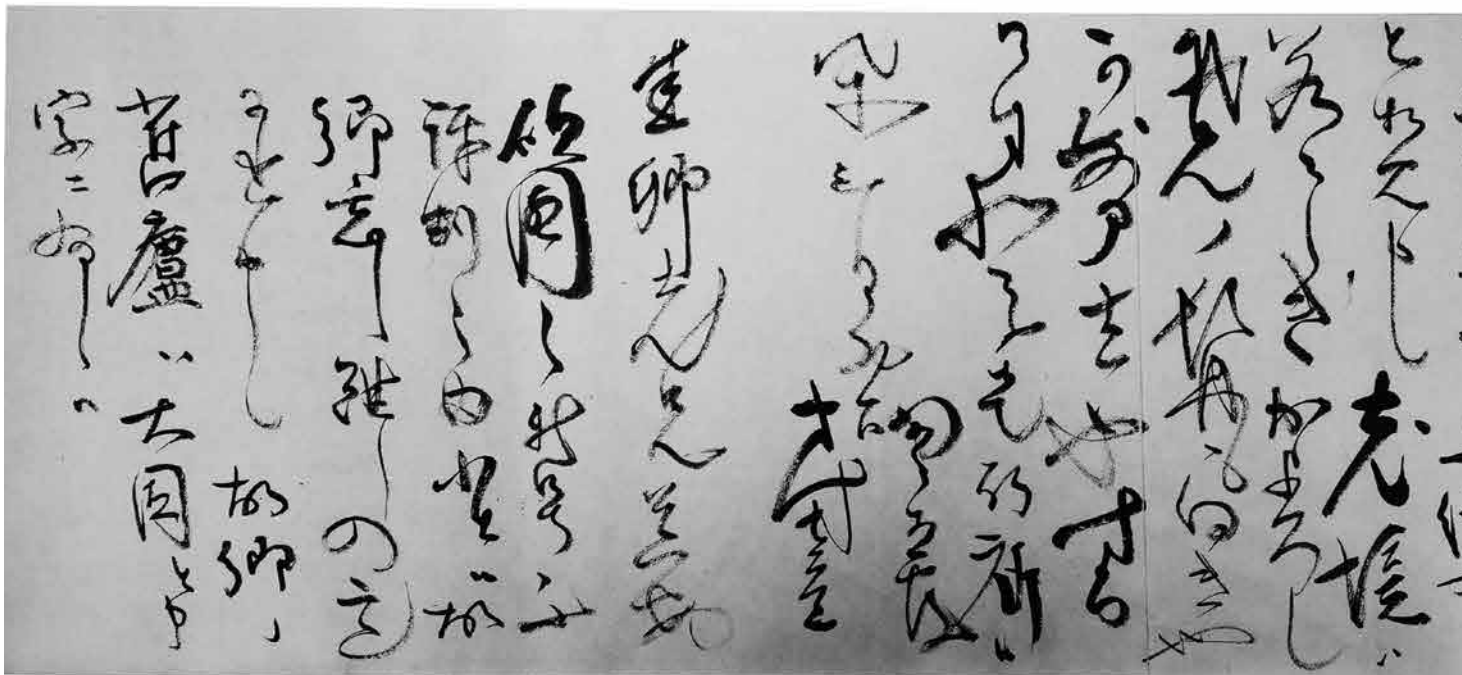
* 宇野哲人 (1875 ~ 1974、1900 東京帝大文科大学漢学科卒) は熊本出身の中国哲学者。

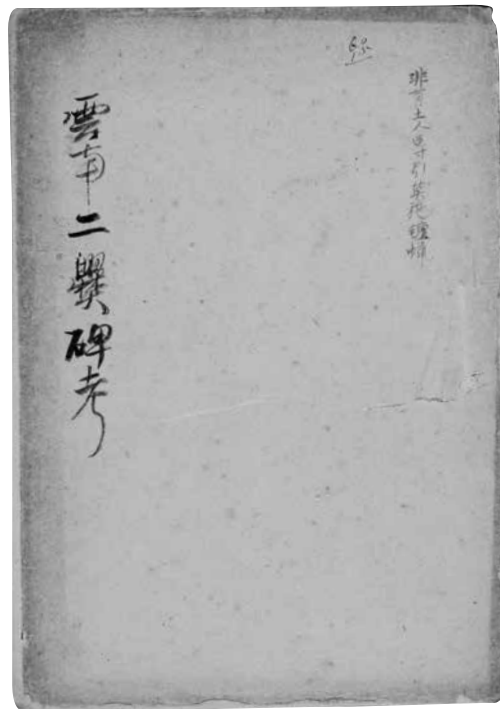
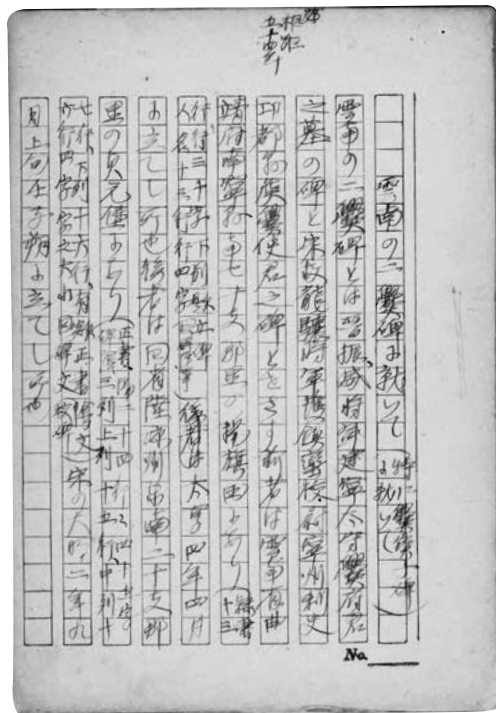




▼ 31 | 西村時彦書簡 (1918年〈大正7〉3月6日、市村宛206)

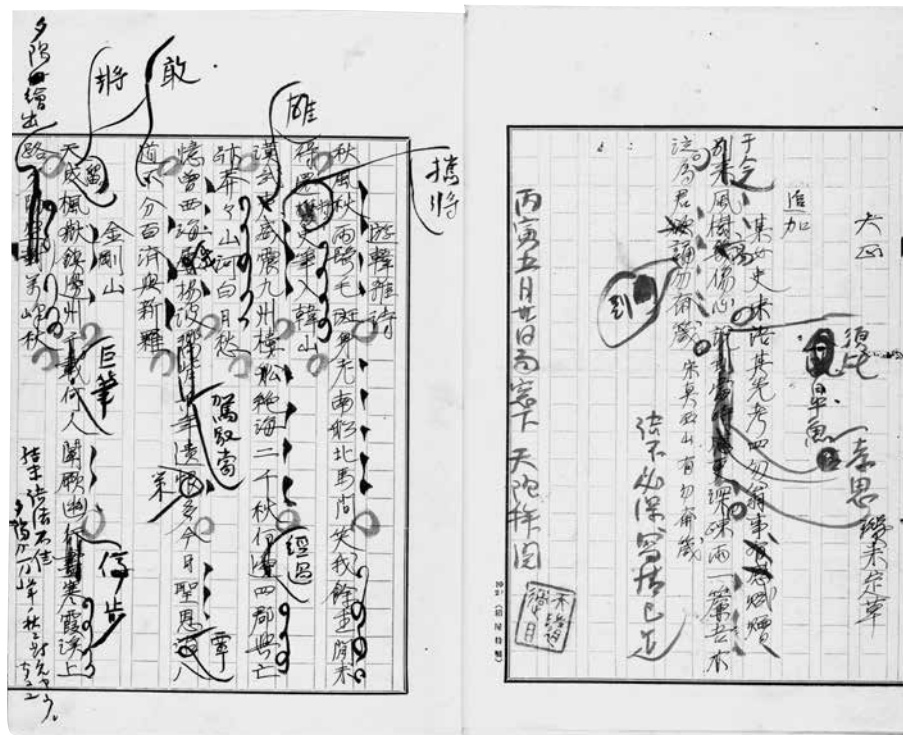
大阪で懷徳堂の復興に挺身する西村は、1910年（明治43）に記念会設立、1913年（大正2）に財団法人認可、1916年（大正5）に重建懷徳堂を竣工して教員に松山直蔵（1897東京帝大漢学科卒）を採用し、漢学振興の成果を上げていた。展示品31は、市村から斯文学会の刷新（斯文会設立）について賛同するように依頼された時の返書で、西村はこれに賛成するとともに、今後は懷徳堂と手を携えて漢学振興の実効を期したいと応じている。もう一つ興味深いのは、昨年冬に西村が友人瀧川子信（瀧川亀太郎が若い頃に使用した字）に自慢の白髯を剃れと言ったが、いまだ未練があるらしい。市村の白髯も剃った方がいい、老境に入ったら若々しくした方がいいと忠告していることである。古典講習科同級生の親しい人間関係がよく表れている。また追伸において西村の新しい号「碩園」について市村が不評を伝えたことに対して、西村がその由来に就いて説明したやり取りも、腹蔵のない彼らの人間関係を示すものである。なおこの翌年、大阪朝日新聞社を退社した西村は、内藤虎次郎らの推薦を得て1920年（大正9）に文学博士の学位を授与され、また島津家臨時編輯所の編纂長となり、更に1921年（大正10）秋に宮内省御用掛を拝して摂政官（昭和天皇）の侍講となる。1923年（大正12）11月の「国民精神作興詔書」の起草などの場で、漢学者であり新聞人であった西村の木鐸としての役割が発揮された。





34 | 市村瓚次郎『雲南二爨碑考』

雲南二爨碑とは、今日、書学分野で著名な東晋・爨宝子碑と劉宋・爨龍顏碑のことを指し、雲南省曲靖市（旧建寧郡）に現存する。市村によれば同碑は明代にその存在は知られていたが、金石学の発達した宋代や清代の文献に記録がなく、道光中に後者を阮元が紹介して以来有名になった。市村は三国時代の当該地方の歴史から説き起こし、更に碑文を用いて爨氏の歴史を明らかにしている。



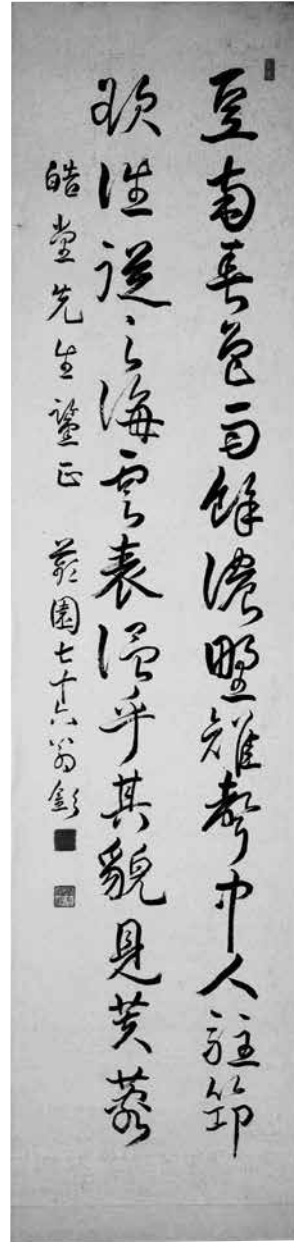
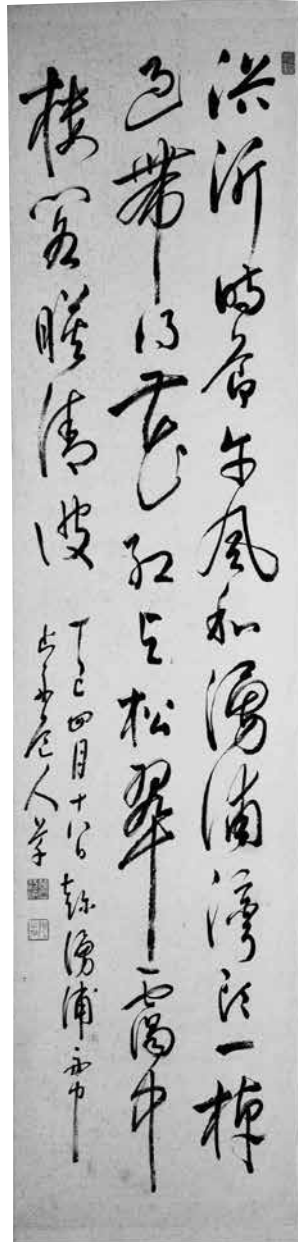
35 | 市村瓚次郎『(詩稿)』(大正末期~昭和初期)

古典講習科在学中ほどではないが、その後も市村は折に触れて作詩を続けていた。展示品 35 は大正末期から昭和初期にかけての詩文稿で、市村による本文はペン書き。批評には宮内省務めとなり東京に移った西村時彦や台北帝大文学部教授赴任以前の久保得二（1875～1934、号天随、1899 東京帝大漢学科卒）によるものが残る。

VI | 詩文実作者としての中国学者たち

36 | 漢学者・漢詩人揮毫屏風（八曲一双）

漢学者田保橋皓堂の依頼により諸家が揮毫した半切16枚を八曲一双の屏風に仕立てたもの。作者には学者・漢詩人・言論人・官僚等が含まれ、漢詩文が教養として生きていた時代であることを思い起こさせる。



① 阪本蘋園七言絶句

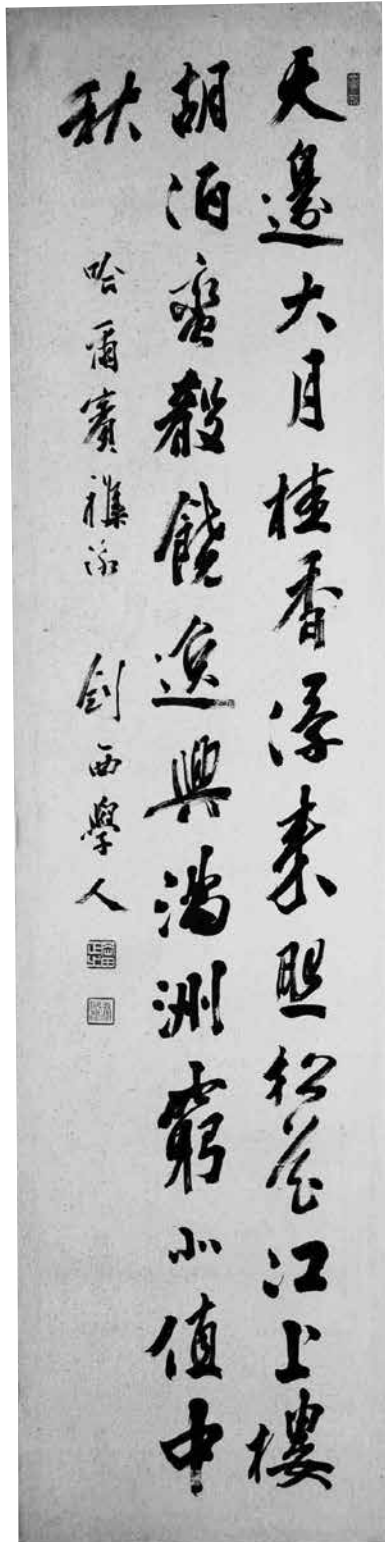
「豆南春色雨餘濃 野雉声中人駐節 欲往從之海雲表 温乎其貌見芙蓉 皓堂先生鑑正 蘋園七十六翁鈔」

本作品の作者阪本鈔之助（1857～1936、号蘋園・三橋）は、尾張出身の内務官僚・政治家。永井禾原の実弟。漢詩を能くし、台湾紀行『台島詩程』（1927刊）などを残した。本詩は駿河湾越しの富士山を詠じたもの。

② 前田慧雲七言絶句

「浴沂時節午風和 湧浦湾頭一棹過 帶得花紅与松翠 霧中樓閣暎清波 丁巳四月十八日 止舟道人草」

本作品の作者前田慧雲（1855～1930、号止舟・含潤）は、三重出身の浄土真宗本願寺派僧。著述多数。漢詩文を能くし『止舟齋詩鈔』（1929刊）や紀行『吳楚遊草・遼月韓雲吟草』（1922刊）を残した。本詩は1917年（大正6）に能登和倉温泉に遊んだ時のもの。



③細田劍堂七言絶句

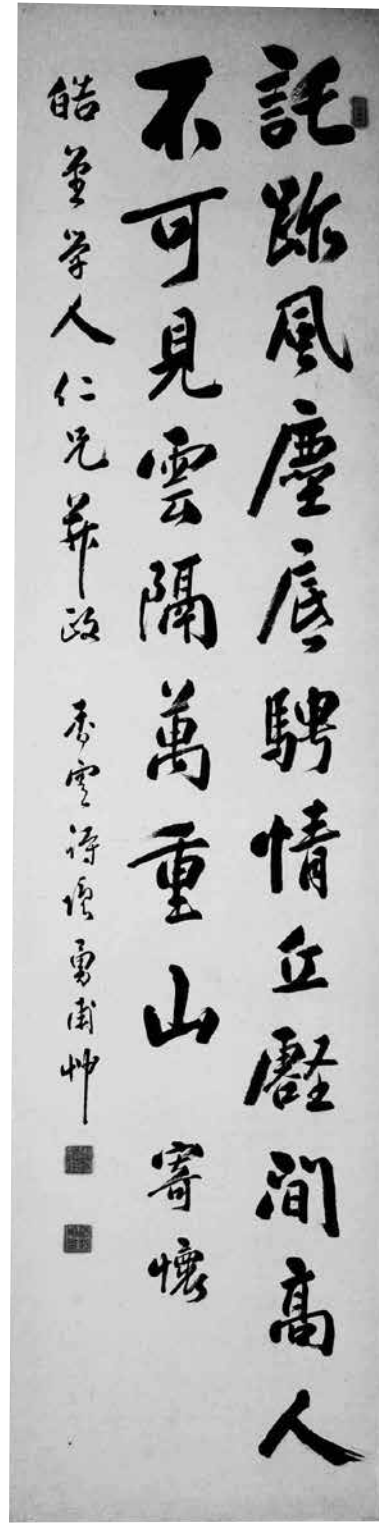
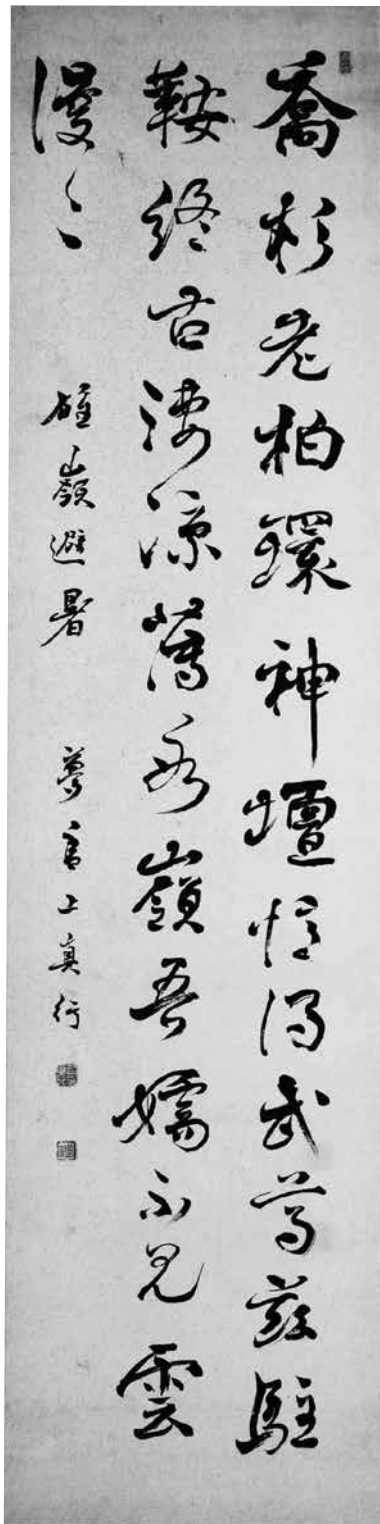
「仏唱無神蘇有神 由來蘇佛不知神 道在眼前君看取 良心明處是真神 劍堂謙」

本作品の作者細田謙蔵（1858～1945、号劍堂）は鳥取出身の漢学者。二松学舎に学び、東京高師・東京女高師の教授となった。詩文は那智佐典編『劍堂先生古稀寿言』に集められている。本詩は陽明学的な「心即理」を説いている。

④岡田劍西七言絶句

「天邊大月桂香浮 來照松花江上樓 胡酒蜜餠饒逸興 滿洲窮北值中秋 哈爾賓雜詠 劍西學人」

本作品の作者岡田正之（1864～1927、号劍西）は富山県出身の漢学者。帝大古典講習科漢書課前期卒業。学習院教授、東京帝大助教授を勤め、日本漢文学研究で知られた。本詩は、ハルビン訪問時の作。



⑤ 渡貫香雲五言絶句

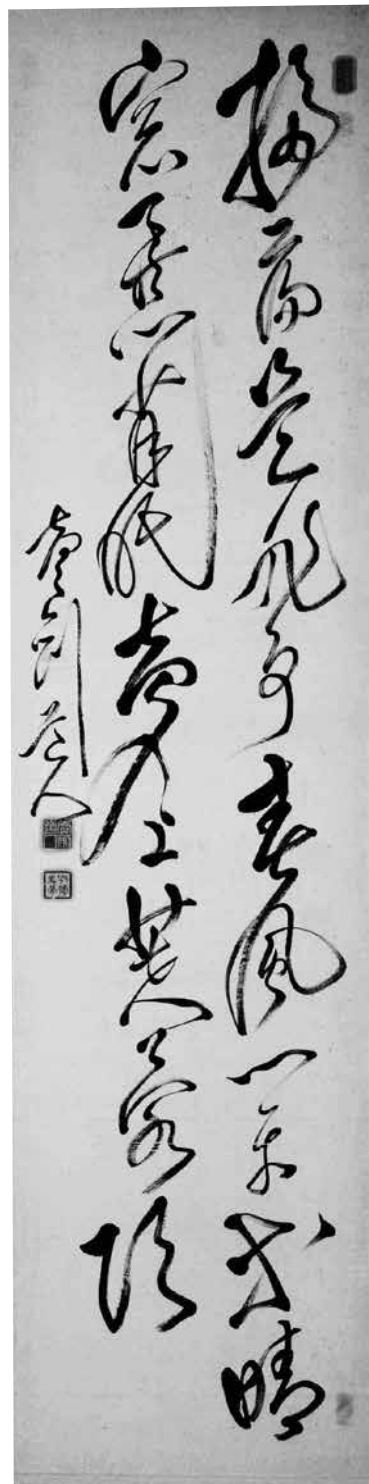
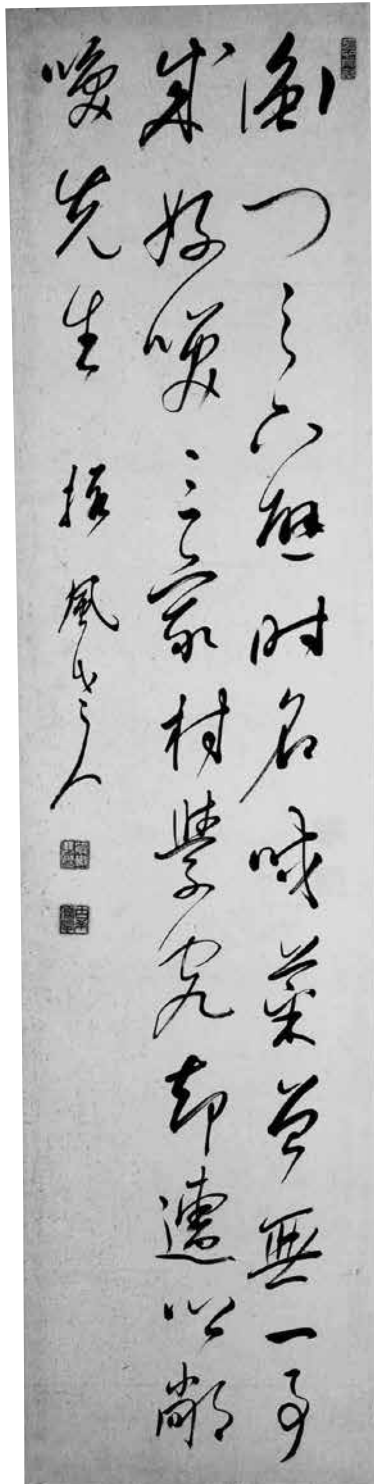
「託跡風塵底 騁情丘壑間 高人不可見 雲隔萬重山 寄懷皓堂學人仁兄并政 香雲詩陰勇甫艸」

本作品の作者渡貫勇（1870～、号香雲・寧固軒）は、各地の中学で漢文・書道を教えた漢学者。漢詩を能くし、『寧固軒小草』（1936刊）、『古稀唱和集』（1939刊）等がある。本詩は委嘱された田保橋皓堂の人物を詠じたもの。

⑥ 上夢香七言絶句

「喬杉老柏環神壇 憶得武尊茲駐鞍 終古淒涼薄氷嶺 吾嬬不見雲漫々 碓嶺避暑 夢香上真行」

本作品の作者上真行（1851～1937、号夢香）は、雅楽を業とする公家に生まれ、明治以降、洋楽も兼修して作曲も手がけ、東京音楽学校の教授を勤めた。傍ら漢詩を能くし、『東京十才子詩』（1880刊）、『明治二百五十家絶句』（1902刊）等にその作品が収載された。本詩は碓井峠に避暑に行った時の作。



⑦上村壳劍五言絶句

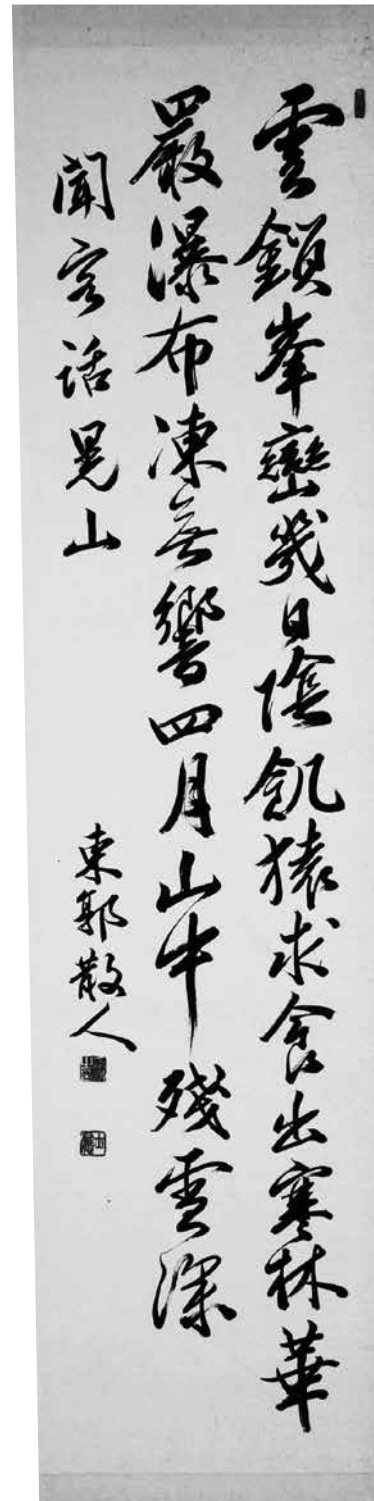
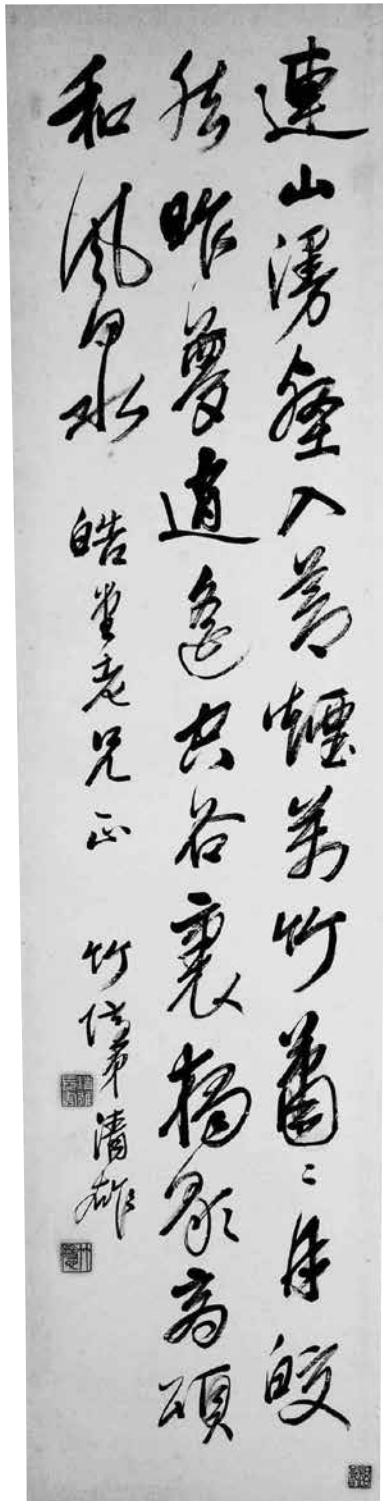
「掃蕩是非事 春風以平等 晴窓寤宵眠 夢上芙蓉頂 壳劍道人」

本作品の作者上村才六(1866～1946、号壳劍・馬骨・詩命楼)は岩手県出身の言論人・漢詩人。漢詩の著書に『壳劍詩草』(1903刊)、中国紀行『清韓游踪』(1906刊)がある。漢詩雑誌『文字禪』(のち『漢詩春秋』)を創刊した。本詩は富士山を夢に見たことを詠じる。

⑧服部擔風七言絶句

「衡門之下避時名 喊菜曾無一事成 好咲三家村学究 却遭鄉僻喚先生 擔風老人」

本作品の作者服部轍(1867～1964、号之丞、号擔風)は尾張出身の漢詩人。著書に『江西觀蓮集』(1900刊)、『養病詩紀』(1908刊)、『志勢遊草』(1910刊)、『丙辰詩存』(1917刊)、『藍亭詩存』(1935～1943刊)、『擔風詩集』等がある。本詩は郷里に隠棲した自身を詠じている。



⑨ 落合東郭七言絶句

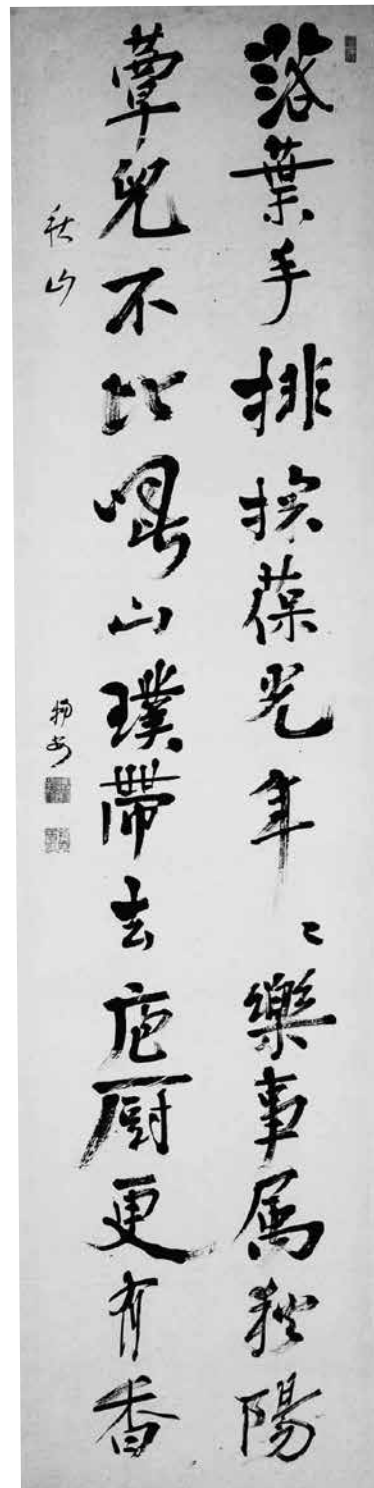
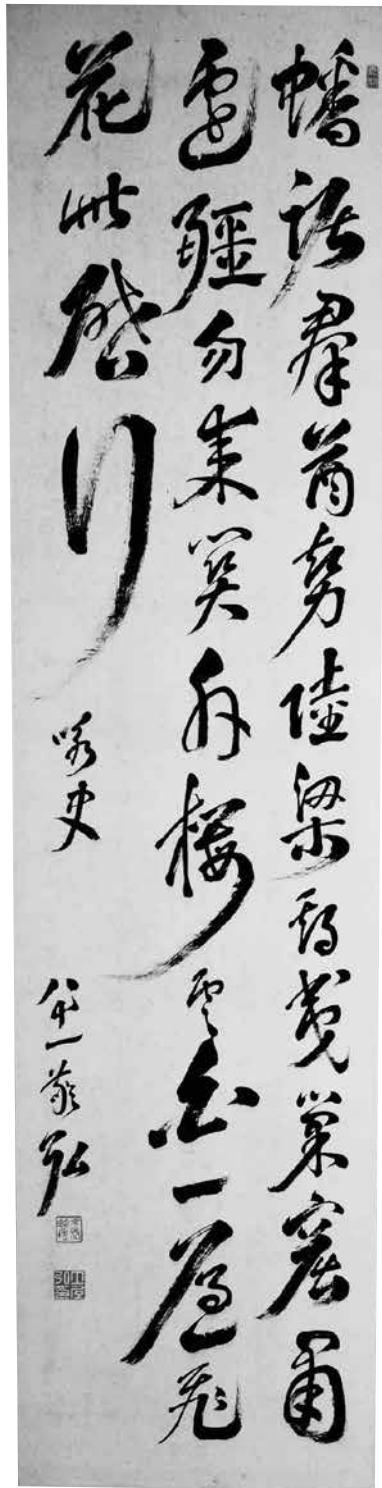
「雲鎖峰巒幾日陰 飢猿求食出寒林 華巖瀑布凍無響 疏月山中殘雪深 聞客話晃山 東郭散人」

本作品の作者落合為誠(1867～1942、号東郭)は熊本出身の漢学者・漢詩人。帝大選科に学び、郷里の濟々鬘・五高や七高に教鞭をとり、後に伯父元田永孚の縁から宮内省に出仕して大正天皇の侍従となった。本詩は客から聞いた残雪深い早春の日光を詠じたもの。

⑩ 高野竹隱七言絶句

「連山漫壑入暮煙 萬竹蕭々月皎然 昨夢逍遙空谷裏 獨歌高頌和風泉 皓堂老兄正 竹隱弟清雄」

本作品の作者高野清雄(1862～1921、号竹隱)は、尾張出身で、佐藤牧山・森春壽に学んだ漢詩人。一時、神宮皇学館に教鞭を執った。本詩は昨夜夢に見た静かな夜景を詠ずる。



⑪ 近藤物庵七言絶句

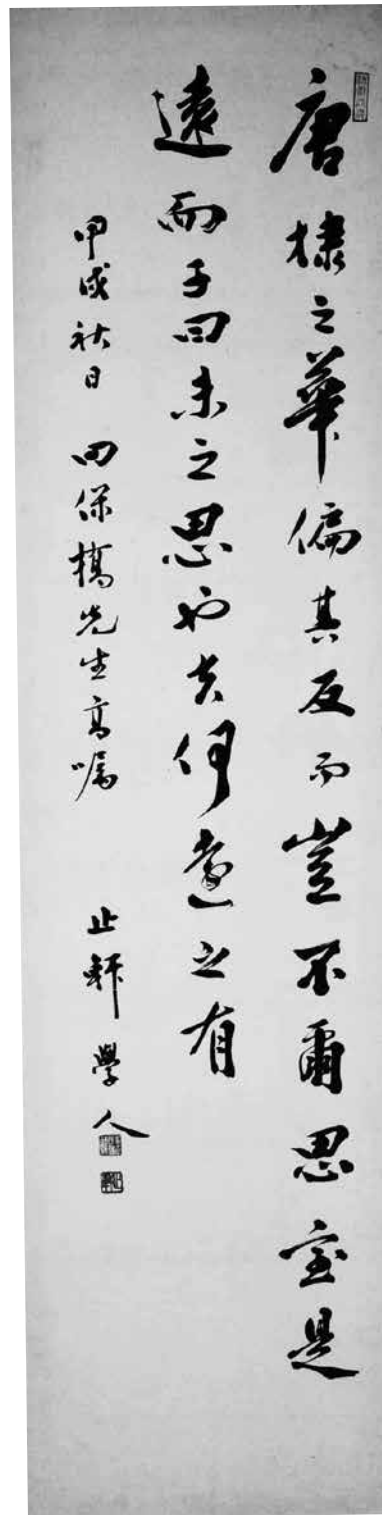
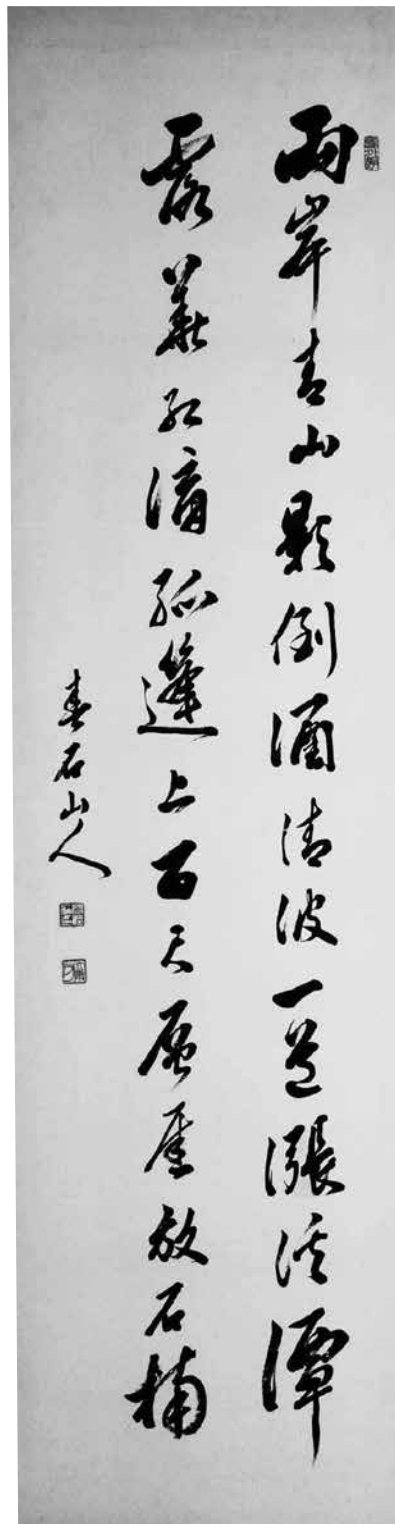
「落葉手排探葆光 年々樂事属秋陽 蕈兒不比崑山璞 帶去庖厨更有香 秋山 物安」

本作品の作者近藤真澄（1870～1941、号物庵・物安）は高知出身の冶金学者。帝大理科大学を卒業して京都帝大教授となり、傍ら漢詩文と禅学を好んだ。著書に『物庵禅話』（1911刊）、『禅心録』（1920刊）等がある。本詩は京都の秋景色を詠じたもの。

⑫ 土屋鳳洲七言絶句

「蟠踞群酋勢陸梁 鷄夷巢窟肅边疆 勿来関外桜雲白 一屋飛花此啓行 詠史 八十一齡弘」

本作品の作者土屋弘（1842～1926、号鳳洲）は泉州岸和田出身の漢学者。池田草庵・森田節齋らに学び、関西・東京の多くの学校で漢学を講じた。詩文を能くし、『晚晴楼詩鈔』『晚晴楼文鈔』がある。本詩は源義家が後三年の役で東北に出陣した帰途に、勿来関で和歌を詠んだ故事を詠じたもの。



⑬ 諸橋止軒書

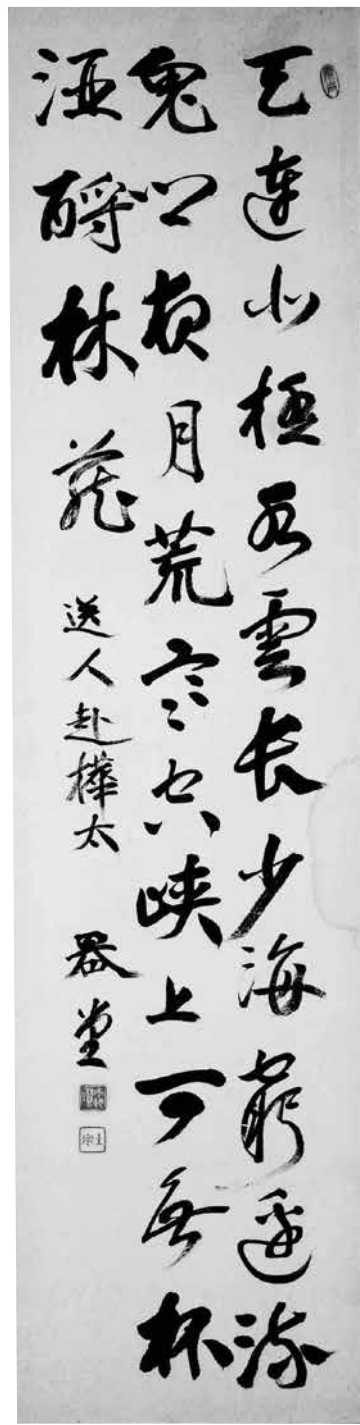
「唐棣之華。偏其反而。豈不爾思。室是遠而。子曰、未之思也。夫何遠之有。 甲戌秋日 田保橋先生高囑 止軒学人」

本作品の揮毫者諸橋徹次（1883～1982、号止軒）は新潟県出身の漢学者。東京高師出身、同校の教授となった。『大漢和辞典』の編者として著名。本作は『論語』子罕篇の一節。昭和9年（1934）、諸橋52歳の時の揮毫にかかる。

⑭ 岡崎春石七言絶句

「兩岸青山影倒酒 清波一道漲溪潭 露華紅滴孤篷上 百尺層崖放石楠 春石山人」

本作品の作者岡崎壮太郎（1879～1957、号春石）は東京出身の漢詩人。大沼枕山に詩を、依田学海に文を学び、晩翠吟社に属して詩に研鑽した。著書に「近世詩人叢話」（『漢詩大講座』第12巻所収）がある。



⑮市村器堂七言絶句

「天連北極水雲長 少海窮辺流鬼郷 夜月荒寒空峽上 可無杯酒酌林蔵 送人赴樺太 器堂」

本作品の作者市村瓊次郎は東洋史学者・漢学者。帝大古典講習科卒業、学習院教授を経て、東京帝大教授となり、漢詩も能くした。本詩はカラフトに赴任する人を送別する内容。

⑯内田遠湖五言絶句

「夕雨洗林樾 竹窓涼味加 讀書方了 問雲聽鳴蛙 遠湖」

本作品の作者内田周平（1854～1944、号遠湖）は漢学者。東大医学部を経て大学院で哲学を学び、哲学館等に出講。道学を重んじた。詩文には『遠湖文髓』（1940刊）、『遠湖小品』（1942刊）等がある。本詩は自らの身辺を詠じたもの。

*田保橋四郎平（1865～？、四朗、字明卿、号皓堂）は能登出身の・漢詩人。七尾中学に教鞭を執り、著書に『梅花白屋詩鈔』（1931刊）、『梅花白屋詩文』（1943刊）等がある。

VII 資料翻印

I 東京大学古典講習科と市村瓊次郎

2・市村瓊次郎「古典講習科卒業謝恩会における」謝辞「一八八七年（明治二〇）七月九日

謝辞（明治二十年 月卒業謝恩会席上、同級生を代表して）

不肖瓊、古典科漢書課を卒業すべき同学諸氏に代り、今日来臨の栄を辱くせる総長閣下・旧総理閣下、及び新旧教授諸先生に向つて一言の謝辞を述べ併せて将来の希望を陳せんと欲す。

抑古典科漢書課の大学に設けられしは、今を距ること五年前、即ち明治十六年にして、実に旧総理閣下（*加藤弘之）の設立に係るものなり。故に我々を生み賜ひしは旧総理閣下なりといふも不可なかるべし。然るに昨年之初めに方り、旧総理閣下は我々を捨て、元老院に入らせ賜ひしは、我々をして悲嘆やる方なく、真の生母に別れしか如き感あらしめたり。されと幸に現総長閣下（*渡辺洪基）の来任に遇ひて更に第二の母を得たるが如き感ありき。それ我々を生み賜ひし旧総理閣下の鴻恩は固より謝せざるべからず、又第二の母たる総長閣下の我々を遇すること真の生母に異なる所なかりしは深く謝せざる可からざる所なり。又新旧教授諸先生の我々を教へ我々を導き我々を諭し、ことの懇篤なりしことは、我々の心肝に銘して忘る、能はざる所なり。我々の初めて大学に入りし時は、所学に対し殆無知の小児の如くなりしが、今や稍西東を辨し黑白を識るに至りしは、是れ偏に教授諸先生の賜といはざる可からず。然らば教授諸先生は我々の師保といふも亦不可なかるべし。こ

の我々を生み賜ひし我が父母の恩固より忘却すべからずと雖も、我々に智識を授け賜ひし我が師保の恩また銘記すべきなり。是れ今日、弟に総長閣下・旧総理閣下及び新旧教授諸先生に感謝する点なりとす。

今や我々生徒は五箇年の蜜雪の労を積み、將に業を卒へて東西各地に離散せんとす。是に於て我が父母と我が師保を此の富士見軒に招待し粗酒粗餐を呈して聊か感謝の意を表し、且その尊容の撮影を請ひこれを不朽に伝へんと欲す。然るに我が父母と我が師保とは道路の泥濘に拘はらず辱く玉趾を枉かせ賜ひしは、我々一同の感激措かざる所なり。是れ第二に総長閣下・旧総理閣下及び新旧教授諸先生に感謝する点なりとす。それ総長閣下・旧総理閣下及び新旧教授諸先生の我々を遇すること頗る厚く我々を愛すること甚親きこと此の如し。我々は將に何を以て此の厚遇と親愛とに酬え奉るべきか。

曾て聞く、君子の孝は口腹の養にあらずして、その心志を養ふにあり。立身行道揚名於後世以顯父母孝之終也と。然らば我々が将来、我が父母と我が師保とに報する所以のものは左の三条に過ぎざるべしと信す。即ち第一は自ら信するの厚きこと、第二は自ら任するの重きこと、第三は自ら期するの遠きこと是也。

第一自ら信するの厚きこと…凡そ事業の如何を問はず、自ら信すること厚からざれば、何事も成就すること難しとなす。然るに今日、漢学を修むるものを觀るに、自ら信すること頗足らざるに似たり。彼の漢学先生の中には自ら我は当世不用の人物なりと称するものなきにあらず。又漢学を修むるものも我々は已むを得ずしてこれを修むるに過ぎず、実は心にこれを屑しとせざるなりと公言するものなきにあらず。是れ等は自ら侮り自ら軽するものにて、所謂自ら信するの足らざるものと謂はざるべからず。それ我が旧総理閣下の

我々を生み賜ひしは、我々の必要なるを知る故なる可く、又総長閣下の我々を存続せしめたるは、亦我々の無かる可からざるを認めたる故なるべし。若し我々を無用とせば旧総理閣下の創設する筈なく、又総長閣下のこれを存続せる訳もなかる可し。且大学の本科に漢文学科を置き中学・師範の教科にも漢文の加はり居るを見れば、我が政府も漢学を廢する意なきこと明なり。且理論上よりするも實際上よりするも、これを全廢し得べきものにあらすと思ふ。然るに社会の風潮に動かされ漢学を修むるは已むを得ざるに出つといひ、或は漢学は無用の長物なりといふか如きは自ら信するの厚からざるのみならず、我が総長閣下と旧総理閣下とを信せざるものなり。独我総長閣下と旧総理閣下とを信せざるのみならず、我政府を信せざるものなり。独我政府を信せざるのみならず、天下の理論と實際とを信せざるもの也。若し此の如き思想を抱き居らは、我々の学業の成は得て期すべからず。是れ自ら信するの厚からざる可からざる所以なり。

第二自ら任すること重きこと…我々は自ら信するの厚きのみならず、自ら任することも亦重からざる可からず。東洋の学問は猶未開拓の所あり。支那は日本に比すればその研究の行き届きたる所あれと、所謂支那流の研究にて間々粗漏の所あるを免れず。例へば古来、支那と外国との関係を記したるもの多けれど、大抵、大秦国の東羅馬の異名たるを言はず。又罽賓国のことを記しても今のカブルたり或はカシミールたるを言はず。苟も此の如くなれば、正史の外国伝やその他の史書を繕いても当時の国際関係を明にすること能はざる可し。是れ支那歴史を読むもの、窃に遺憾とする所なり。又支那の歴史は歴代の正史その他の史類が具りて頗完全なるか如く思はるれと、緊要の記事が少くしてその要領を捉ふること容易ならず。故にこれを取捨折衷し

て簡にして要を得たるものとなさ、るべからず。是れ等の任に当るものは固より自ら任するの重きを要する也。

又社会の事は法律のみにて治まるべきものにならず。道德の必要なることは三尺の童子と雖も知る所なり。さてその道德なるものは、人間社会の精神的基礎となるものにて、国の文野によりて幾分か方法を異にすとも、その目的を一にすることは東西古今の同じき所なりとす。或る先生の話に、仏國にては孔子流の忠恕主義を唱ふるものあり。有名なる法律家マルトラン氏の如きは社会は仁でなければ治まらずといへりと聞く。又独逸・伯林法科大学の教頭某氏は社会は愛でなければ成立する能はずといへりと聞く。蓋歐洲各国の有様は支那の春秋戦国とよく似て居れば、かゝる説の世に出つるも亦怪むに足らず。然らば孔子の仁といひ博愛といふか如きも亦今日に於て捨て去るべきにあらざること明なり。然れとも儒教道德のみに偏せずして博く各派に参照し長を採り短を補ひて益々孔子の価値を天下に發揮するが急務なるべしと信す。況や今日の如き金錢主義の流行の際には、道德の事は一日も間却すべからず。これまた自ら任するの重からざる可からざる所以也。今日日本邦に於ける漢学の衰態はその極に達す。諸老先生一旦世を去らば、深く漢書を理解するもの無きに至るやも知れず。然るに西洋各国にては支那・印度等を研究する学会あり、雑誌あり。独逸にては先日、東洋語学校を設立するに至れり。此の勢にて進み行かは、我が邦にては反てその近隣なる支那の事情をも知るものなく、遂には西洋人を聘して東洋の事実を学ぶやうになるやも知れず、果して然らば邦家の体面を汚すこと実に重大なりといはざる可からず。これ等の恥辱なからしむるは我々の将来の責任にあらずや。これまた自ら任することの重からざる可からざる所以なり。

さてこの大任に当るにはそれ丈の素地を作らざるべからず。即ち従来の方法より進んで其の学問に入ること、是れなり。真の学問とは固より彼を知り己を知りて比較研究をなすことも必要なり。我々如き春秋に富むものは進んで彼を知ることゝを為さざるべからず。然る後に著述なり講演なりを以て世を裨益することを図らざるべからず。然れども著述をなすには邦文を以てするを望む。何となれば従来多く漢文を用ゐる来りしものは世間に漢文を理解するもの多きか故ならんも、今や漢文を理解し得るもの多からず、故に社会一般の利益を図るには是非邦文を以て著述をなすを希望するなり。然れども漢文を全廢するにあらず。漢書を読むもの、漢文を修むるは勿論なれども、これを國際的又は芸術的の使用に止め、普通の著述は新井白石や貝原益軒の如く仮名交り文を用ゐんことを欲する也。苟も一般に漢文を用ふる時は、支那人には便利ならんも本邦人には不便頗大なるべし。例へば欧米の学をなすものが欧文にて著述をなすと同様にして、本末輕重を忘れ我が国家の体面を汚すものなり。故に我々の書を著はす時には国文を用ふるのみならず、漢書の論語孟子の如きは翻訳して一般の民衆が見ても読み易く解し易くし、孔門の道德、儒教の精神如何を知らしむることを図らざるべからず。これまた我々の自ら任ずることの重からざる可からざる所以也。

第三自ら期するの遠きこと…前に陳する如く、自ら任ずること重きも眼前の近効を求むる時は中途にして或は廢することあるべし。何となれば今日日本邦の有様はまるで西洋狂ともいふべき有様にして、事の是非、物の善惡の區別なく、輸入しさへすれば既に文明国となりしものと心得居るもの多し。これ本邦人の癖にして利ともなり害ともなることあり。今を距ること千餘年前、支那の文物を輸入せし時に方り、当時の縉紳先生を初めとし一般人民に至る

まで支那狂となりしか如し。甚しきに至つては唐朝の正朔を用ゐしことあり。那須国造碑の如きは是れなり。該碑には永昌といふ年号が刻せられてあるが、これは則天武氏の時の年号にて、我が持統天皇の三年に当れり。外国の年号を用ゐしか如きは忌はしきことなれば、強めて説をなして永昌の字は朱鳥といふ字の缺落せるならんといふものなきにあらず。然れどもこれは附会の説にて、当時の状態より推せば唐の年号を用ゐしことも怪むに足らず。又儒林の豪傑物徂徠が孔子の賛に東夷物茂卿と題し、或は復姓を単姓に改めしが如きは皆支那狂の結果にして、今日よりこれを見れば憫笑に堪へざるものあり。然るに今日、洋学者の中には耶蘇教の信者にあらずして猶神武の紀元や明治の年号を捨て、千八百九十幾年と書するものあり。又曾て支那を中華と称し自ら夷狄に処するか如く、西洋の事物を文明と称し東洋の慣習を野蛮と称せるものあり。これは西洋狂の結果にして、正氣の沙汰とは思はれざるなり。かくの如き時代に本邦や支那の歴史文学を修むるもの、排斥せらるゝは怪むに足らざるなり。然れどもこれ等の狂人は設令癲狂病院に入院せしめざるも、深く学問を修め智識を養は、自然に治療せらるゝことあるべし。その時に至らば、今日往事の支那狂者が唐の年号を用ゐる東夷と称したるを笑ふか如きものあるべし。今日西洋狂の盛なる時に方つて我々の如き頑然たるものありて、我が日本を尚び我が東洋を重じ、支那狂の覆轍を踏まずして支那を研究するは独日本や東洋の爲めならず、世界の爲めなりと知るべし。故に西洋狂者からは或は譏笑せられんも、他日その狂病の治する時に至らば必我々に感謝するものあるべし。豈自ら期すること遠からざるべけんや。

然るに遠を期すといへば、或は例の迂遠なる学者の妄想といふものあらん。けれども迂遠の笑は我々の甘して受くる所なり。何となれば世の所謂迂遠と

は世事に迂遠なるの謂にして、学問に迂遠なるにあらざればなり。すべて實際の問題を取扱ふ政治家の如きは世事に敏なるを要すと雖も、苟も学者たるものは世事に迂遠なることこそ頼母しけれ。何となれば社会の事は分業を待つて初めて完全なるべきは経済学者を待たずして知る所なり。故に天文学者は天文の事さへ知らは政治法律は知らずして可なり。又地質学者は地質の事さへ知らは人情世態を知らずとも可なり。その他、文学史学医学に至るまで其専門の学にさへ明ならば世事に迂遠なる諱りはこれを甘受して可なり。漢学者にして迂遠の諱を免かれんと欲し、漫に政治家を気取り口を開けは輒ち経世のことを言ふ。苟も経世のことを言はんと欲せば、何ぞ必しも漢学に限らん。余は望む、漢学者たらんと欲するものは政治家たるの念慮を断ち、一意専心、支那の史学なり文学なり哲学なりを主としてこれを泰西の学問に参して一科の学問となさざるべからず。これその迂遠の譏を意とせず、自ら期すること遠からざる可からざる所以也。

以上述べたる三箇の志望は終始我々の心頭を離れざる所なり。蓋自ら信すること厚からされは自ら任すること重き能はず、自ら任すること重からされは自ら期すること遠き能はず。故にこの三者は相待つて用をなすものなり。我々が彼の親愛なる我が母と我が師保との恩に報するにはこの三者を以てせざるべからざるなり。

今日、総長閣下・旧総理閣下及び新旧教授諸先生を茲に招待せるも、不腆の酒肴以て歡を尽すに足らず、唯前陳三条の意見を以て将来報恩の一端となさんことを希ふ。これ同学諸氏に代りて一言の蕪辞を述ふる所以なり。

II 漢学から東洋史学へ

4..小中村義象書簡(一八八七年〈明治二〇〉一〇月三十一日、市村宛2)

(翻印) 吉川半七書を飛ばして云く、東洋學會雜誌原稿組立候處、凡百餘ページニ相成り、雑誌には不都合也。付ては中ニ仕切をなし、国民之友之体裁ニ致度、御異存无キヤトノ質疑ニ付、今朝直ニ吉川へ参り(昨夜帰宅八十時過キナリキ、書面も此時見たり)候處、もはや築地活版所ニ廻置候との事ニ付、格別不都合も無之候へは、左様取極メ申候(書肆ハ投機者也、中仕切のある法見ばえよく、且専ら流行躰の由ニ御座候)。但し紙数も預メ定メ置度候へは、もし、、餘り長たらしく成候ハ、文苑の處さし引する様ニ申付置候。表面文字ハ巖谷のも出来候へ共、餘り宜しからず、猶他ニも頼試ントノ事也。

一 関根君ニ願置候事務取纏メの件ハ如何。會員名簿帳及印等御取揃へ、小子追御遣はし被下度候。且是迄毎月廿日発行の處を此度改メテ五日ニ相極メ候ニ付てハ、其届出も不致てハ不都合なり。是等の事魚住ト御相談の上、色々御談判被下度候。吉川へ御通知奉願候。(もしそれか面倒ならハ、小子追御通牒ありても不苦候。)付テハ、明後二日午後三時、小子方ニ吉川ヲ喚ヒ申候間、御両兄共御出懸被下度候。もし御不参ナラハ右の事件御認メノ御状被下度候。委詳の事ハ其時分御談可仕候。早々不具。十月三十一日 小中村義象

會計局長 関根正直殿 編集局長 市村瓚次郎殿

5..三上参次書簡(一八八八年〈明治二二〉三月三〇日、市村宛6)

(翻印) 時下益御健勝奉欣賀候。小生方、本日より来月八日まで少く閑を得候二つき、御来遊被下度奉希候。さて兼々御話の貴著支那史、此者に御渡し被下度、また未だ批評のため執筆し能ふや否や判然致さず候へ共、兎に角了

見ハ其了見二候間、那珂氏の通史も御手許二候はゞ、併せて拝見致し度候間、暫時御惠貸被下度奉希候。先ハ要事まで、一筆如此。尚拝眉之節、萬縷。三月卅日 三上参次拝 市村詞兄硯北

6..白鳥庫吉書簡(一八八九年(明治二二)八月一七日、市村宛13)

(翻印) 晴雨定なき天氣ニ御座候所、貴兄益御清尚奉賀候。陳者、小生此度、学習院より歴史教授法要領、編述被仰付候處、貴兄は支那歴史専心と云ひ、旁小生不案内ニ付、如何なる書を如何様に用ゆへき乎、御高案伺度、右懇願申上候。草々頓首。 白鳥庫吉 八月十七日 市村学兄

7..白鳥庫吉書簡(一八九二年(明治二五)一〇月一七日、市村宛27)

拝白。貴兄には去月中旬ころより御不例之由ニ拝承候處、當時は如何被為渡候哉。追々秋冷ニも相成候へハ、定めて御平癒之途ニ就かれ候事とは存候得共、海外萬旦風土不同、折角御保養專一二御坐候。向に上海よりの御手昏正ニ拝披仕候。その後、安井兄への御芳尺をも拝見仕候。愈兄か今回の御壯遊、不堪欽羨。早々帰朝之上、清談ニ接し度候。十月のつきよりハ日々領を引くの有様ニ候處、忽チ今回の音信ニ接し、驚愕感憐交々ニ仕候。○学校の方へハ安井兄よりそれ、手續ニ及はれ、小生よりも次長幹事へ委細申聞候間、その辺の儀は決して御懸念被下間敷候。猶又御刃向等も有之候ハ、幸ニ被仰付度、不堪希望候。先は不取敢御見舞、迄申進候。不尽。 白鳥庫吉 十月十七日 市村賢契硯北

8..萩野由之書簡(一八九四年(明治二七)七月二十九日、市村宛40)

先夜ハ松井君にて酒を飲ミ、折節大村君外一客来訪、四人にて征韓談致し居候所、夜半まで聲音を聞かす、残念ニ候ま、翌晩御尋申候ひし也。其節拝晤ハ得す候へ共、今日忽筑波山上の一朶雲を得候て、御佳作をさへ御示し下され、暢情不過此奉存候。都下炎威方熾ニ、加之近來腦患しく、為二日夕困頓。函山か房海かへ避暑いたし度存候所、御科程読書の校正近き在る筈にて出遊も六ヶ敷、愈以懊惱、た、枕ニ親しみ居候。よりに御作の和答も出来不申候。御諒恕可被下候。昨日始て日清開戦、我海軍大捷の報に接し、快心快読、されと京釜間電信ハ今以未通にて、陸軍の消息ハ相知れ不申候。海軍既に如此、陸軍の克捷ハ勿論之事歟と存居候。連戦連捷ハ善し。慮を勞すへきハ平呉之後ニあり。庶堂諸公の計画如何。聴かまほしきものニ御座候。兄の取りたまへる上海申報、我新報と対讀せは面白きこともあらむ。遠からず拝晤を得て一斑を承らむと待居候。不取敢御答のミ、不尽。 七月廿九日 時ニ門外號外之聲あり。報する所何事ぞ。未分り申さす候。 由之 圭 卿大雅

9..林泰輔書簡(一八九四年(明治二七)九月二四日、市村宛42)

九月十日之芳翰拝読仕候。如來論秋冷相催候處、高堂益御清福奉賀候。次ニ小生無異消光、乍憚御放念奉折候。然ハ生儀先般朝鮮へ渡航致候處、折悪敷開戦に際し候ニ付、半途にて帰国致候。夫が為メ兼て計畫致候十分の一位の旅に因て全豹を推す時は徧く八道を跋涉致し候ハ、必らず有益之事不尠と存じ、再遊之念は勃々として難止候得共、奈何、百事不如意、姑く控居候。豊

嶋牙山の戦争之時ハ、小生ハ内地旅行致居候得共、地方杯にてハ今回の事件ハ何に因て起り、何等の有様ニ相成り候哉、更ニ承知致候もの無之位の次第にて、小生杯も毎度質問を受け候。将来我邦が嚮導之位置に立ちて内政を改革致候杯ハ中々困難之事ニ存候。到底、軍國機務所之議決位にてハ覚束なく候。今一層内地之紛擾を惹起し、数回之戦争にても無之候ハ、逆も彼邦懶惰之人心を鼓舞作興して文明に導し杯之事ハ六ヶ敷事と存候。日清戦争ハ着々其歩を進め、皇威益揚り、先つ大慶之事と存候。右ハ疾に拝復可申上候処、当地も種々更革之際にて、彼是取紛れ甚々延引、恐縮之至ニ奉存候。先ハ右迄、萬期後郵候。勿々不乙。

九月廿四日 林泰輔 市村盟臺

尚々松平、菊池両兄も皆々異状無之候。乍末、御令聞様へ可然御致聲奉祈候。岡田、瀧川諸兄へも御序之節、宜敷願上候。

10・児島猷吉郎書簡（一八九八年〈明治三二〉九月某日、市村宛70）

拝啓、其後ハ御無音致候。時下小春之好時季ニ相成候。貴兄益御清適奉賀候。次ニ小弟不相変無恙消光罷在候条、御安心被下度候。尤当地ノ氣候寒暖激変ニハ生等亦少々辟易罷在候。此頃ニテモ日中ハフランネル一枚ニテ至極適当ト相感し候へ共、夜分ニ相成候ハ、挟纏尚冷氣ヲ相覚へ候。因テ生等ハ目下防寒ノ準備ニ忙ハシキホドニ有之候。尤雨山ハ昨年ニ比シテ餘程温暖ナリト申居候。コハ蓋有故也乎。鰥兄以為如何。小生ノ五高ニ於ケル亦無事ニ相務メ居候。今日迄（来年ハ知ラズ）ノ処、星江ノ氣焰ト声望トハ決シテ人後ニ落チズト自惚罷在候。求馬先生ハ不相変御氣ノ毒見タヤウナル次第ニ有之、雨山ノ方へハ続々生徒同氏ノ不都合ヲ訴へニ来り候由ニ付、雨山亦頗ル其

処置ニ困入候。現ニ本日小生ノ許ニ来訪致候生徒ノ言ニ「須藤先生ハ暑中休暇迄ノ運命ナリト生徒一般ニ豫想且祈望致居候処、豈凶ランヤ、九月以後ニ復タ其面ヲ見ントハ」ト、怒氣面ニ溢ル。亦以テ其一斑ヲトスルニ足レリ。貴兄ノ大学ニ於ケル、定メテ氣焰万丈、生徒ハ既ニ烟ニマカレテ五里霧中ニ（コレハ少々失敬）彷徨セルナルベシト存候。何卒吾党ノ為メニ十分光采ヲ發揮有之度希望ニ不堪候。過日或京友ガノ通信ニ「器堂ノ大学ニ於ケル声望至極宜敷、決シテ林ノ舞ヲ演スルコトナカルベシ、安心セヨ。又東亜学会雜誌ハ廢刊ニ決セリ、満足セヨ」トノ文言有之候。前者ノ言ニ對シテハ通信ノ通安心致候へ共、後者ノ言ニ對シテハ恰モ鞭ヲ死者ニ加フルノ觀有之ルニ付、決シテ通信ノ通りニ満足ヲ致サズ、寧ロ弔意ヲ表し申候。当地益友ナシ、又書物ナシ、若シ一年以上以上ヲ茲土ニ經過スレハ全ク井底ノ蛙ト化シ去ルベシト雨山ト時々浩歎ヲ洩ラシ居候。左ノ二首、句蕪ナリト雖、意ハ尽セリ。御諒察被下度候。

九月十三夜訪雨山対月言懷

與君対秋月 月色有餘情 灑氣侵衣冷 寒光入水明
情随鴻影動 愁自笛声生 惆悵荆門客 登樓賦上京
其二

客中对明月 天外起離情 別鶴迷雲岫 孤鴻顧影鳴
関山愁万里 霜露冷三更 胡事都門子 十年忘旧盟
嗚呼愁人ノ心情如何ニ寂寞ヲ感シツ、アルヤハ御推想被成下度候。在京諸友ノ動靜如何。後便御通信ヲ乞フ。早々不悉。 学弟猷吉 器堂老兄侍史

11…三上參次書簡(一九〇二年(明治三五)二月二十七日、市村宛75)

拝啓、昨日之岡田正之氏を全く大学の人とする談二つき、はかばかしき結果を見ざりしハ遺憾ニ存じ候。全氏の将来のためニハもとより言を要せず、かの教員養成事業にもよかるべく、又文科大学としても東洋史之講義を三時間依頼し易き次第にて、かたゝ、今一応この議を起したきものにて候。今回田中氏より星の氏ニ談じ候処、星の氏ハ然らバ学長ニ申出して見るべしとの事にて候。貴下にも尚右ニ御盡力被下てハ如何ニ候哉。まづハ右のミ勿々敬具。追て昨日の會ぎの節、養成所の支那史だけ岡田氏をとの説ニ対し、小生ハそれハ陸軍にて六かしくいふならん。寧ろ岡田氏の全身を貰ひうる方可ならんと申候ひしに、右を星の氏ハ誤解し居られし由にて候。一寸申添候。以上。

卅五年二月廿七日 三上參次 市村学兄視北

また追て右ハ急を要し候ニより、御意見伺ひたく候。

12…狩野直喜書簡(一九〇五年(明治三八)四月二十八日、市村宛92)

拝啓。愈御清福奉賀此事ニ存候。扱今般調査会に於て或ハ人を需むる事と相成候哉も難計、就てハ過日来論之淺井氏を推挙致度存し、織田博士迄ニハ話置候。然し愈延請すること、ナルヤ否ハ未定につき、此段御承知被下度奉願候。唯此ニ御尋致度ハ、御承知之通り小生等之調査致候ハ清国現今之制度ニ有之、従ふて六部則例、会典事例、近時之上諭及び奏摺等之読める人を欲し申候。支那制度専門之学士ニ対し御尋致候ハ甚以失礼に候得ども、御承知之通り古文トハ少々趣を殊に致し、これに慣れたる人ニ非スンバ一寸困申候間、右御尋致候。他之一点ハ、延請致候ハ、報酬ハ若干にて御承諾可有之候哉。これまた何度、何トソ貴兄之御見込御示し被下度奉願候。先ハ右迄、勿々頓

首。 狩野直喜頓首 市村仁兄大人侍史 四月廿八日

13…市村瓚次郎書簡(一九〇五年(明治三八)八月二十八日、市村宛97)

拝啓。本月十八日大連着。翌日旅順ニ赴キ、三日間滞在致候。東雞冠山・二龍山・松樹山・案子山・椅子山・二〇三高地・黄金山等ヲ一覽致候。陸面ノ砲台ノ稍完全ニ旧状ヲ存セルハ椅子山・案子山ニテ、其堅牢壯大実ニ驚人ノ許ニ候。東雞冠・二龍・松樹等ノ砲台ハ攻撃ノ結果、尽破壊爆發セラレ、殆元状ヲ存セズ。其慘憺タル有様ハ想像ノ及ブ所ニアラズ。我軍隊ハ此ノ堅牢ナル砲台ヲ破リタル功績ヲ思ハ、感涙ノ外無之候。二〇三高地ニ登レハ、旅順港ノ全形ハ全ク一目ノ下ニ有之。山上ニ戦死者ノ碑ヲ立テ、山腹ニ露人ヲ埋メタル所有之、今猶臭氣鼻ヲツキ、人膏ノ地上ニシモ出セルヲ見申候。港内沈没ノ軍艦ハ「シトヴィサル」「ペレスウツイ」「アムール」ニシテ、「バルラタ」「バーヤン」ハ浮キ上リ居リシニ、廿日ノ午後ニ「バーヤン」ハ出港日本ニ赴キ申候。新市街ノ建物ハ皆宏大ナル者ニ有之候得共、今全ク空家ニ有之候。同廿二日午後一時旅順出發、夕刻南山ノ下ヲ過キ申候。百メートル位ノ山ニテ、想像セルカ如キ高キ者ニ無之候。同廿三日午後二時遼陽着、停車場附近ニ百万坪ハ露人ノ占領シ居リシ所、建物今猶存セル者多ク有之候。此地ニテ賀古君ニ面会致候。遼陽市ハ人口三万七千餘有之由ニ候。廿四日ニハ太子河ヲ渡リテ東京城及東京陵ヲ一覽致候。東京城ハ清ノ太祖ノ築キシ所、今日ヨリ三百年ノモノ、大抵荒壊ニ帰シ居リ申候。東京陵ハ太祖ノ弟壯親王及長子楚英貝勤ノ墓ニ候。廿五日ハ騎馬ニテ首山堡ニ赴キ候。高二〇九メートル、北方遼陽城ヲ一目ニ見申候。極メテ要害ノ地、山上露兵設ケタル塹壕壘壁猶存居候。歸途鉄道線路ニ沿ヒテ来リ、汽車ノ来ルニより下馬シ居候処、馬ハ汽車ニ驚

キ狼走シ去リ（絵端書ニテ通信セル通）、殆困却仕候。馬ハ其後兵站司令部ニテ搜得候得共、馬背ニ結ビ付アリシ写真ノ器械ヲ紛失シ、翌半日ハ憲二人輸卒二人ヲ派シテ線路両側ヲ搜索セシメ候得共見当ラス。殆絶望致候。已ニ写真器ヲ失ヒ申候上ハ、折角ノ出張取調ノ事柄モ半ハ目的ヲ空クスルナラント心配致居候得共、今更致方無之。廿七日午後一時出発、六時奉天ニ着。今日城中ナル総司令部ヲ訪、大山元帥・福島少将ニ面会致候。明日宮殿其他ヲ一覽ノ筈、時宜ニヨリテハ先ツ鉄嶺・開原ノ地方ニ至リ、更ニ歸来リテ当地ニ二三週間滞在ノ事ニ可相成歟、未定ニ候。時宜ニヨリテハ撫順・興京ノ方面ヘモ赴ク筈ニ付、帰京ハ十月初旬ニ可相成歟ト存候。今回ノ旅行地ハ到处日本軍隊充滿シ、兵站宿舍ノ厄介ニ相成、毫モ不自由無之。日本酒・ビール何デモ有之、奉天ニテハ午房ノウマ煮、蓮根ノ油揚、氷豆腐、沢山ノ香物等モ有之候。氣候ハ正午八十度位、朝夕ハ七十二三度位ニテ凌能ク候。来月中旬ニ至レハ餘程冷氣ニ相成由ニ候。当分ノ処、身躰異状無之、御安心相成度候。書状ハ大抵七日位ニ達ス可ク候。奉天兵站宿舍宛ニテ届キ可申候。草々不一。 八月廿八日夜 於奉天宿舍 市村瓊二郎
市村喜代子殿 同毅殿 同宏殿

14..内藤虎次郎書簡（一九〇六年〈明治三九〉一月九日、市村宛98）

過日は参上、長座、殊に御饗応を辱うし、奉謝候。小生事ハ明日午後六時、一先づ帰阪の途ニつき申度、その前今一度拝晤ヲ得申度考居候。明日午前中参上のつもりニ御座候。御差支なくば御在宅願上候。尚例の漢文旧档はその際一時拝借仕度候。これハ小生事この度外務省の方ノ用事ニテ清韓国境問題調査ニ従事致居候処、通文館志ニハ清朝が朝鮮征服以前之事は無之二付、右

旧档にて一応取調申度存候。今月末迄ニハ再び御手許迄差上可申、その上にて緩々御贍下され度候。又この方撮影の写真も明日取そろへ持参可仕候間、その内にて御入用の分ハ御指示下され度候。大阪より差上可申候。尚いろ、御相談申上度候も、拝眉の際委細可申上候。匆々頓首。一月九日 虎次郎
器堂先生侍史

15..宮崎道三郎書簡（一九〇七年〈明治四〇〉二月二四日、市村宛104）

拝啓。愈御清光奉拝賀候。然ハ先日御話御座候呼蘭（忽蘭）一寸相調候所、元史語解并ニ清文補彙ノ説ニテハ此等文字ヲ以テ写セシモノ凡ソ三種有之候様被存候。尤モ元史語解ノ説ニ付テハ如何被思候廉無之ニアラス候得共、兎ニ角見当候マ、御報申上候。
一、（清文補彙）

《満文》呼蘭城黑竜江地名、○見于对音字式。《満文》烟筒峯、在永陵対面《満文》之西。

満州語ノ《満文》(hulan)ハ烟筒ノ義ト相見エ申候。満州源流考卷十八ニモ呼蘭竈突ト有之申候。

二、（元史語解）卷一

《満文》^{呼喇}烏阿安 ^{烏蘇}烏思

呼蘭烏遜 呼蘭集聚也。烏遜水也。卷一百三十五作忽蘭兀孫。

茲ニ《満文》トアルハ蒙古語ノ《満文》(hural)ヲ写シタルモノ歟。《満文》ハ Schmidt 氏蒙古語辞典ニ Die versammlung die religiöse zusammenkunft der geistlichkeit ト御座候。

三、（元史語解）卷四

《満文》
鳥阿安 伊勒基

呼蘭伊勒吉 呼蘭野騾也。伊弥吉去毛皮也。卷三作忽蘭也兒吉。

茲二《満文》トアルハ蒙古語ノ《満文》(Amla)ニテ黒鬃黃馬ノ義ニハアラザル歟。野騾ハ蒙古語ニテ普通 chigraiト申候由ニ候。但シ遼史語解卷八ニモ呼蘭蒙古語野騾也。卷十七作胡懶ト有之申候。

先ハ右申上度、草々敬具 十一月九日 宮崎道三郎 市村博士殿

16..服部宇之吉書簡(一九〇八年(明治四二)九月一日、市村宛112)

拜啓。時下御清康奉賀候。鳥居氏本年三月赤峯よりシラムレンを経て大小巴林に至りアルコルチンを経て西ウヂムチンに到り、更に外蒙古車臣汗顔より喀爾喀河畔に出で黒龍江省に達し、遂に七月十一日を以て赤峯に帰着。更に該地附近に旅行し、今又旅行の準備に有之。極めて元氣の容子に候。先日桑原・矢野両文学士蒙古旅行の時、赤峯にて鳥居氏に遇ひ、一家元氣の報を齎し帰り候。鳥居氏前記旅行中ハ通信の便無きを以て、何方にも御無音致居候事と存候。此に一事御配慮を願度儀有之。其は外国語学校より蒙古語教師招聘の儀、小生と在北京本願寺派寺本婉雅氏と依頼有之候処、俸給ハ月額百円との事にて、何分然るべき人を得るに苦しみ候。小生等ハ蒙古語の外に兼ねて満、漢、西藏等の語をも能くする人を求め居候が、右様の人ハ百円にてハ躊躇致候。就て本日村上校長に詳細の事情を開陳し、東京大学の方に兼務し、月五六十円を得るやう尽力を頼み遣し候が、貴兄に於ても学長等と御相談の上御心添願度候。尤も語学校の方にてハ急ぎ居候ニ付、本件ハ御多忙中恐縮に候も、至急御商議願上候。先ハ右要件のみ勿々。 九月一日 服部宇之吉 市村瓚次郎殿

17..坪井九馬三書簡(一九〇八年(明治四二)九月一〇日、市村宛113)

謹啓、本朝御来訪被下候処、何の風情も無之、失礼仕候。其節申進候筈之処、失念候儘、以書状申進候。陳は先般本学より金沢へ宛三国史記借入申入候処、先年三年半も貸付候に付き、勿論写本可有之、且金沢に於ては書物を門外に出さず候規程之由、貴下迄御通報有之、確に承候。依而再度通牒致し、普通写本にては不辨用申、且影写候為に借入度旨申送候。然処、今日迄も返答無之、然上は乍御面倒貴下よりも金沢へ宛御書状被下間敷候哉。其趣旨は、先年永々旧前田本を借用候も、当時は研究未至、該書は旧版本と而も何分缺本なり、猶ほ外に佳本可有之杯の空想を抱き、手元本ニ校訂候位に止め、影写は扱おき普通之写も取置不申候処、其後種々之方面から種々の異本を獲候へ共、畢竟皆旧前田本に及はず、今に至り該書を影写し置かざりしを後悔候次第に候。且目下最後之校正を致居候際、旧賀州本無之候ては校正上遺憾有之候条、何卒一覽致度、是は実に学海及政浦百年之後まで相響き候次第に就き、規程に拘らず特制之手段にて該書を向ふ一年限り本学へ御貸与相成度儀に有之候。此辺何卒貴下よりも金沢表へ御申越相成度、此段願入候。敬具。

九月十日 坪井九馬三 市村瓚次郎様硯北

18..菊池謙二郎書簡(一九一一年(明治四四)十一月二〇日、市村宛145)

拜啓仕候。支那革命事件、御感想如何。史実を眼前に見候事千載之一遇と喜び居申候。扱右革命につき当地の人々にも支那に関する知識を與へ度、水戸市教育会主催と相成、来月四日頃(四日は三日の誤字ニ候)講演会相催度候間、御出馬被下候は、幸甚之至ニ御座候。もし同日頃御都合あしければ、其次の日曜に繰延べ候てもよろしく御座候。服部博士にも是非御出演を請ひ度

候間、乍御手数尊兄より御相談被下度願上候。御迷惑とは奉拝察候得共、御

揃御出で被下度、千万希望仕候。草々敬具。十一月二十日 謙

圭卿博士視北

白河鯉洋杯も招き候考、午前午後交互りて相開き度つもりニ御座候。

塩溪即事

広原過去辞山迫 驅馬白雲深処行 紅葉青松峰万壘 碧潭翠石水千莖

懸崖当面蛟龍躍 棧道架空煙霧橫 日暮倚樓独高唱 餘音縹渺入溪声

正

右拙吟当地の新聞紙上に出され候へ共、御覽無之事と奉存候。御叱正可被下

候。塩原は実に好景色の処ニ御座候。一度御覽相成度、小生ハ幾度にてもま

あり度と存居候。

19…西村時彦書簡（一九一一年〈明治四四〉一二月三日、市村宛147）

拝啓、其後碌々御礼状も不差上、失礼打過候処に、長翰到来、懷徳堂遺書其々

御頒贈被下候由、御手数奉謝候。講演筆記、速記者病氣之為ニ延引仕候得共、

近日訳了のよし申来候間、いづれ呈稿候。訂正可相願候。貴論之通、清国動

乱、史学上之興味申計無之候。電信電話時代之大乱とて、三年間之変転ハ三ヶ

月位にて進みゆく有様目くるしきほとに有之、日々之電報、紙々の評論ハ商

権笥記を読むに異ならず、貴論も拝誦佩服仕候。小生も弊紙上、清国内乱史

話と題して四五回連載、咄嗟之筆、慚愧之至御座候。先ハ御返事旁草々頓

首。十二月廿三日 彦 圭卿学兄研北

Ⅲ 教科教育としての東洋史

20…桑原隲蔵書簡（一九一〇年〈明治四三〉一〇月一七日、市村宛132）

拝啓、其後無音に打ち過ぎ申居り候処、益御清祥之条奉賀候。小生事本月一

日より胃痙攣に苦しみ今日迄就褥服薬致し居り候。併し両三日前より略快癒

に向ひ明後日より登校開講之豫定につき、御安神被下度候。又て今回極秘

密にて文部省より大学総長に高等中学校の学科の時間数諮問相成り候由に

て、総長より学長を経て教授に意見を徴せられ候。貴大学も定めて同様の事

と遥察申候が、右のうち中学校の方は漢文を二年より課すること、相成り居

り候が、右は一年より課する方適當なるべく愚考致し候。次に中学の東洋史

も従来第三学年一年間教授せしものを、今回の改正案にては単に第三学年の

第一学期と第二学期とのみにて東洋史を授け、第三学期よりは西洋史を授く

るやう相成り居り候。右は由々しき大事と存じ候。御承知之如く高等中学校

の歴史は大抵は西洋史又は日本史を主とし、東洋史を授くるもの甚だ稀なれ

ば、大学入学生の東洋史の智識は単に中学の第三学年にて習得せし智識に止

る故、従来とても授業上困難を感ずること尠からざりしに、今回更に授業時

間を減少せらるゝは殆ど堪へ難き所にて、且は東洋史科志望者の数も自然減

少する恐なしとも申し難く候。小生も当地の同僚と相談之上（内藤・狩野二

君未だ帰朝致さず）、意見提出致す考に候へども、貴兄に於ても此点然るべ

く御注意有之度、尚ほ白鳥教授とも御談合之上、相当の方法御講じ被下候は、

幸甚に候。右得貴意度、如斯に候。褥中乱筆、御判読を煩はし候。頓首。

十月十七日 桑原隲蔵 市村学兄研北

21…桑原隲藏書簡（一九一七年〈大正六〉九月二〇日、市村宛 202）

拝啓、秋冷之候益御福祥之条奉賀候。陳は過日小生より差出し置き候検定本試験東洋史問題、御閱了被下候や、伺上候。御意見も有之候は、為念御取捨添削の程承知いたし置き度候。唯今主任箕作博士より来月四日問題打合会開催之旨御通知被下候が、生憎矢野君の送別会有之、小生は特に関係ある発起人として出席周旋いたさざるべからざる責任あれば、今回は上京見合せ度、万事然るべく御取計らひ被下度、右差当りこの用向のみ。勿々頓首。 九月卅日 桑原隲藏 市村学兄案下

頃日仄聞いたし候へば、目下文部省にて中等学校の教科細目を新に作成中の由にて、高師出身者主として任に当り、歴史科にも大変更を加へ、或は東洋史の目を廢して外国史の一部となさんとする議もある由。万一この議実行されんか、わが東洋史界にとりて由々しき大事と存じ候。学校増設の機運熟し、高等学校増設せらるゝ様子なれば、この際何れの高等学校にも必ず東洋史を開講する様いたし度と希望せる折柄、中等学校にて東洋史の科目か廢減さるゝ様にては従来殆ど無実なりし高等学校の東洋史は一層萎縮振はさるべく、従つて大学の東洋史料の威勢にも影響すべしと存じ候。右事実の有無及びその対策など、御配慮有之度候。

22…桑原隲藏書簡（一九一四年〈大正三〉七月九日、市村宛 161）

拝啓、過日東上の際に匆率御高話に接するを得ず遺憾に存じ居り候。昨夜、検定委員会会長より通牒有之、至急主査委員を選定すべく、且つ豫備試験問題を提出いたすべき旨申越し候。

（第二）主査委員の件は従來の慣例も有之べく、万事貴下の御意見に一任いた

し候につき、他の委員諸君と御協議の上然るべく御取計らひ置き被下度候。

（第二）試験問題の件は過日一寸面陳申置きし通り、来る二十日頃に東上いたし、其節御協議申すべき豫定に候ひしも、かく時日急迫いたし候上は、不得已貴下に選定の御面倒を願ふより詮方なかるべき歟と信じ候。歴史科の委員は小生にとりて初経験の事として、従前の慣例、問題の配当、時間の配当等万事不案内に候へば、今回の豫備試験の問題選定だけは貴下を煩はしたしと存じ候。尤も御選定相成り候問題は、文部省へ御提出前一応御内示被下候は、或は御参考迄に愚見をも開陳し得て好都合にあらざる歟と存じ候。不取敢右貴意を得たく如斯に候。頓首。 七月九日午前 桑原隲藏 市村学兄研北

追伸 唯今一寸思ひ出で候儘を左に申述へ候。

(a) 総括的問題ならば 天宝の乱の顛末 若くば 阿片戦争 等如何と存じ候。

(b) 解釈説明を要する問題としては 九品中正 兩税法

(c) 固有名詞にては 商鞅 史可法・毛文龍 陸九淵 朝鮮の孝宗李滉 など如何と存じ候。御参考に供し被下候は、本懐に候。

23…桑原隲藏書簡（一九一四年〈大正三〉一〇月五日、市村宛 165）

拝復。貴翰披読、委細了承仕り候。又て本試験の問題については小生の愚見にては

(1) 唐と波斯との関係

(2) 明代宦官の専權

(3) 清の太宗と朝鮮との交渉

(4) 戊戌の政変

等の内より少くとも一題は選択いたしたく存じ候。貴台御申越しの問題に對しても固より異議無之候が、但五代形勢論は題少しく広汎に失して受験者が多少解答に当惑せざるかとの懸念有之候。清朝建国の來歴は至極贅成なれど、之も範圍少しく広過ぐる恐なきか。較々清の太祖の事業とか、若くば明清の交渉とか少しく具体的にいたしたる方望ましからん歟と存じ候。尤も小生は歴史の檢定試験には無經驗なれば、右は杞憂に過ぎざる歟も測られず。其辺のことは然るべく御取捨有之度候。人名については大延琳、蒲鮮万奴、何れもよろしかるべし。但し何れも滿洲方面に關係あるもの故、其うち一にてよろしかるべし。之に對して裴行儉か高仙芝（若し小生提出の（1）問を問題に決する場合は除き）、或は王玄策など宜敷かるべき歟と存じ候。地名もアングラはよろしけれど、一層、訛打刺か喀喇和林、若くば渤海、遼、金に關係ある黃龍府など奈何と存じ候。御一考被下度候。最後に口頭試問の件、本人の答案について質問を試むる以外、御申越しの如き新案を加ふるもよろしかるべしと存じ候。日本史西洋史の委員の方々の同意を得るやう、御骨折望ましく候。右不取敢貴答まで。匆々頓首。 十月五日 桑原隲藏 市村学兄案下

追白、本試験の日割、殊に口頭試問の日取り略定まり候は、豫めなるべく早く御内報を煩はし度候。実は十一月に小生の義弟の婚礼有之候につき、成るべく時日衝突せざるやう用意いたしたく候。

24・岡田良平書簡（一九一一年〈明治四四〉二月一九日、市村宛 135）
拝啓、益御清勝奉賀候。扱伝聞する所ニ依れハ、来る廿二日頃茨城縣ニ於て

例の南北朝問題ニ就き演説会を開き、老台にも御講演相願候計画有之由ニ御座候所、老台には未だ出席之御承諾無之候哉、御伺申上候。老台には兼て教科書之委員相願居候事ニ付、委員会にて編纂したる教科書ニ對し反対意見を發表せられ候ハ面白からず奉存候間、万一御講演願出で候者有之とも、可相成ハ御謝絶相願候様致度希望之至奉存候。先ハ右得貴意度、如此ニ御座候。頓首。

二月十九日 良平 市村老台侍史

25・井上通泰書簡（一九一一年〈明治四四〉三月一四日、市村宛 137）

拝啓、只今文部大臣に面会仕、其真意ヲ承候処、ソノ談ニ皇統ハ正間ニ系ニアラデ一系ト定マリタレバ（此点余ノ見ト異ナレト文部大臣ニ向ツテ争フヘキ問題ニアラス）、兩朝對立的ニ書イテハナラス。即名分ヲ正シテ書イテモラヒタイト云ヒシノミ。サレハ南北朝ト云フ語ヲ用フルナトハ云ハズ。書方ニヨツテハソレモヨキナリ。タトヘハ（コノ例ハ小生ヨリ持出シタルモノニテ文相ハ「サウデス」ト答ヘラレタルモノナリ。問答体ニ書イテハ長クナルニ付、ツ、メテ書キタルナリ）光明踐祚ノ処ニ、世ニ此皇統ヲ北朝ト稱シ、之ニ對シテ天皇ノ皇統ヲ南朝ト稱スト書イテモヨキナリ。ナホ渡部ニ申含メテ誤解ナキヤウニスベシ。但史料延元元年十一月二日以降ノ事ニ付テハ余ヨリモ三上ニ注意スベシ。大要ハ右ノ通ニ候。萩野君始、同志ノ人々ニ御伝ヘ被下度候。（但史料ノ件ハ貴下ノミニ申上置候。） 三月十四日 井上生 市村兄

26..坪井九馬三書簡(一九一一年〔明治四四〕三月一六日、市村宛138)

時下不順之候ニ御座候へとも、益々御機嫌克、大慶此事御座候。就而は本日去る処より鳥渡承候処ニ依れば、貴教授は文科大学史料編纂掛へ対し何歎難詰かましき書面御差立相成候御趣旨有之候哉に承候。右は何様の御趣旨なり哉一向不承候へ共、兎角部内全僚へ宛て御宣戦と有之候ては事容易ならず、喧嘩両成敗歟、将又勝敗の分る、処歟、孰れとも文科部内之失体ニ有之、旋ては大学全体之失体、文部省之失体、政府之失体と相成候条、能く、篤と御考之上御行動被下度候。右乍憚御注意申述度如此候。草々。十六日夜

九馬三 市村教授殿視北

27..田中義成書簡(一九一一年〔明治四四〕七月二〇日、市村宛139)

謹啓、文履益佳安奉賀候。陳は昨日教科書総会逐條議ニ入り、劈頭の難問題たる後鳥羽天皇踐祚の件、極力論戦を試みたる末、起立ニ問ひたるに、壹名の差にて小生等の案ハ失敗に歸し候。若シ吾兄の御臨席ありしならば勝を制することを得たりしに、残念千万ニ候。其上芳賀博士も欠席なりしかば、かた、吾党は土俵際にて失敗せり。遺憾々々。乍併北朝の天皇を天皇として掲ぐることは本日朝日新聞ニ見えたる如くにて、穂積博士が其根本の主張を放棄して吾党の議ニ従はれしハ不思議の現象にて候ひき。明日又開会之筈ニ候。愈吉野朝廷の議案ニ入り候。兼々の御持論も有之候事故、明日ハ万障御繰合御臨席あらんことを切望仕候。政府党ハ昨日総勢出揃居候為め、頗る優勢と相成候。何卒明日ハ髻を奮て戦に臨まれむことを懇願仕候。先は此段得貴意度、草々不尽。 義成再行 七月廿日 市邨学兄研下

IV 再び漢学の振興へ

28..嘉納治五郎書簡(一九〇九年〔明治四二〕二月八日、市村宛122)

拝啓、過日御内話致置候通り、来十五日(月曜日)有志拙宅に寄合ひ、孔子祭典会展覧會ニ関し御談合致度存候間、午後五時御枉駕被下度奉存候。敬具。二月八日 嘉納治五郎 市村瓊次郎様 追て粗末ながら夕飯の用意致置候。

29..瀧川亀太郎書簡(一九〇七年〔明治四〇〕二月一四日、市村宛101)

拝啓、益御清穆賀上候。扱孔子祭典會も愈成立、此四月より舉行ニ相成候事ニ決定いたし候由、可喜事ニ候。此地之孔子會も先頃總會にて規則を取極申候。目的之處ハ小生之起草ニ而、本會ハ先聖孔子を憲章し斯道を闡明するニ在りと有之候を、來會之奥宮と申控訴院之檢事長と、青山と申す辯護士、憲法之憲と文章之章の字と合したる熟語ハ如何なる義なるやなどの質問有之、成るべく普通ニわかる方よかるべしと、先聖孔子を尊崇し云々と訂正いたし候。しかし其會ニハ教員、裁判官、辯護士、神官、僧侶、官吏、國會、縣會、市會之議員も列席、唯基督教之宣教師を見ざるか何となく物足らぬ心地いたし候。羅馬字反對之御意見、教育會雜誌ニ出で候由、未だ拝讀不致候へとも、同僚三好子之話ニよれハ、條理井々至極尤之義といふ事なり。いつれ拝見之上、愚見可申上候。先般御願いたし候友部伸吉之一条、如何ニ候哉。いそぎ候譯ニも無之候へとも、役ニ立つ人物を田舎ニ老死せしむるも惜しき事故、人物經濟之上より申上げたる義、先方之模様相知れ候へハ、御返事願上候。君格新年之賀詞もくれあず、壯健とハ存候へとも、本来蒲柳之質、懸念之至候。近状御承知ニ候ハ、御しらせ被下度候。寒餘殊厳、切望千萬保齋。頓

首。二月十四日 龜太郎 器堂老兄侍史

園と申字二有之候。

30…宇野哲人書簡（一九一一年〈明治四四〉一月三日、市村宛14）

VI 詩文実作者としての中国学者たち

御葉書難有拜見仕候。両学会合併之議起り候由、至極之至ニ奉存候。折節小

36…漢学者・漢詩人揮毫屏風（八曲一双）

生風邪引籠り治療中ニ有之候ひし故、中村久四郎君ニ委細御依頼申上置候

① 阪本蘋園七言絶句

処、本日同君ニ出会、其後の成行を拝承致候ふ処ニよれハ、研究会一般にも

豆南春色雨餘濃 野雉声中人駐節 欲往從之海雲表 温乎其貌見芙蓉

合併之議は歓迎の意嚮ニ有之候由にて、去る一日牛込清風亭にて編輯会開か

皓堂先生鑑正 蘋園七十六翁鈔

れ候につき、其席上ニ漢文学会委員の御来駕を待つ旨、中村君より申送られ

② 前田慧雲七言絶句

候ひしも、遂ニ漢文学会委員の来会無之かりし由。従つて同日の会合にて合

浴沂時節午風和 湧浦湾頭一棹過 帶得花紅与松翠 靄中樓閣映清波

併の議熟する迄編輯を待たは又一日々々と延引すへけれハとて、合併談は進

丁巳四月十八日趨湧浦舟中 止舟道人草

行しつゝ、第一号ハこの際成るべく遅延無之發行致し度と衆議一決致候由ニ

③ 細田劍堂七言絶句

御座候。御思召も如何と存候へとも、右の次第ニ有之候由につき、左様御了

仏唱無神蘇有神 由来蘇物不知神 道在眼前君看取 良心明処是真神

知被下度、先ハ乍延引右御かへしまて如此ニ御座候。拜具。十一月三日

劍堂謙

宇野哲人 市村先生侍史

④ 岡田劍西七言絶句

天辺大月桂香浮 来照松花江上樓 胡酒蛮殺饒逸興 滿洲窮北值中秋

31…西村時彦書簡（一九一八年〈大正七〉三月六日、市村宛206）

哈爾賓雜詠 劍西学人

尊翰拜見、御壯康不堪大賀候。陳は、斯文學會御刷新御計畫、賛成に御座候。

⑤ 渡貫香雲五言絶句

鄙名御加之事、毛頭異存無之、将来ハ懷徳堂と呼應して實効を期し度ものと

託跡風塵底 騁情丘壑間 高人不可見 雲隔万重山

存候。交友凋落之感、御同様に存候。昨冬、瀧川子信にすゝめて鬚髯を剪れ

寄懷皓堂学人仁兄并政 香雲詩湧浦艸

と申遣候處、未練有之と相見申候。老境ハ若々しきかよろし。我兄ノ髯も白

⑥ 上夢香七言絶句

き也、可剪去也。時下御自愛是所祈候。勿々拜覆。戊午三月初六 弟時彦

喬杉老柏環神壇 憶得武尊茲駐鞍 終古淒涼薄氷嶺 吾孀不見雲漫々

圭卿老兄道安

確嶺避暑 夢香上真行

碩園之新号不評判之由、小生ハ故郷忘し難しの意に出申候。故郷ノ舊廬ハ大

⑦ 上村亮劍五言絶句

掃蕩是非事 春風以平等 晴窓熹宵眠 夢上芙蓉頂

壳劍道人

⑧服部擔風七言絕句

衡門之下避時名 喊菜曾無一事成 好咲三家村字究 却遭鄉敵喚先生

擔風老人

⑨落合東郭七言絕句

雲鎖峰巒幾日陰 飢猿求食出寒林 華巖瀑布凍無響 疏月中殘雪深

聞客話晃山 東郭散人

⑩高野竹隱七言絕句

連山漫壑入暮煙 万竹蕭々月皎然 昨夢逍遙空名裏 独歌高頌和風泉

皓堂老兄正 竹隱弟清雄

⑪近藤物庵七言絕句

落葉手排探葆光 年々樂事属秋陽 草兒不比崑山璞 帶去庖厨更有香

秋山 物安

⑫土屋鳳洲七言絕句

蟠踞群酋勢陸梁 鷄夷巢窟肅辺疆 勿来関外桜雲白 一屋飛花此啓行

詠史 八十一齡弘

⑬諸橋止軒書

唐棣之華。偏其反而。豈不爾思。室是遠而。子曰、未之思也。夫何遠之有。

甲戌秋日 田保橋先生高嘔 止軒学人

⑭岡崎春石七言絕句

兩岸青山影倒酒 清波一道漲溪潭 露華紅滴孤篷上 百尺層崖放石楠

春石山人

⑮市村器堂七言絕句

天連北極水雲長 少海窮辺流鬼鄉 夜月荒寒空峽上 可無杯酒醉林藏

送人赴樺太 器堂

⑯内田遠湖五言絕句

夕雨洗林樾 竹窓涼味加 讀書方了訊 間雲聽鳴蛙

遠湖

主要参考文献

- ・『東洋学会雑誌』東洋学会、一八八六～一八九〇年。
- ・『南北朝正閏論纂』山崎藤吉・堀江秀雄編、一九一一年。
- ・『清国行政法』台湾旧慣制度調査会、一九一〇～一九一五年。
- ・『碩園先生追悼録』懷徳堂堂友会、一九二五年。
- ・『東京帝国大学卒業生氏名録』東京帝国大学、一九二六年。
- ・『林泰輔年譜』『支那上代之研究』光風館書店、一九二七年。
- ・『斯文六十年史』斯文会、一九二九年。
- ・『市村博士年譜略』『市村博士古稀記念東洋史論叢』富山房、一九三三年。
- ・『常総の漢詩人』富村登遺稿出版後援会、一九六五年。
- ・山本四郎「南北朝正閏問題について」『史林』五六―三、一九七三年。
- ・『東洋学の系譜』第一集・第二集、大修館書店、一九九二・一九九四年。
- ・『三島中洲の学芸とその生涯』雄山閣出版、一九九九年。
- ・『懷徳堂事典』大阪大学出版会、二〇〇一年。
- ・倉石武四郎『本邦における支那学の発達』汲古書院、二〇〇七年。
- ・『講座 近代日本と漢学』戎光祥出版、二〇一九～二〇二〇年。

編集 後記

編者はこれまで東京大学古典講習科についてたびたび言及してきた。今回の展示で取り上げた市村瓊次郎も古典講習科出身者を代表する存在であるから、処々方々より「またか」という声が聞こえてきそうであるが、今回の資料は、近年、本学に収蔵されることになったものであり、これまで紹介されていない資料である。市村瓊次郎の来簡を中心とした極めて地味な展示となってしまうが、帝国主義時代における政治外交と学問、また国内における国体論の形成と国漢・歴史教科の関与について言及することが少なくなかった。▲編者が古典講習科に関心を持つ理由は、一八八〇年代のアカデミズム黎明期における人文学の様相を知ろうとする場合にこれが恰好の題材と思われるからである。ただ今日「国漢」や「東洋史」といった窓から見える景色が見ていただく方にネガティブなイメージを与えてしまうとすれば、それは偏に編者の力量の無さのなせるわざである。世界情勢が大きく転換しつつある現在、過去の学問が持っていた政治社会と切り結ぶダイナミズムを感じ取り、関心を持っていただければ幸いである。▲今回も、展示に当たっては館長をはじめとする附属図書館の諸氏、および丸善雄松堂の山崎和正氏に多大なご協力を賜った。また図録に掲載した写真撮影にあたり、東アジア学術総合研究所日本漢学研究センターの鈴置拓也助手の協力を得た。ここに記して謝意を表す。

(町 泉寿郎)

二松学舎大学 歴史文化学科 開設記念展示

黎明期の歴史学

— 東洋史学者 市村瓊次郎資料から —

発行日 令和四年三月一日

編集者 大学資料展示室運営委員会

発行者 二松学舎大学附属図書館

〒一〇二―八三三六

東京都千代田区三番町六一一六

製印
本刷 株式会社 サンセイ

林孝輔
三子孝悌
孝悌人

孝悌人
於奉七兄弟
三子孝悌